

大菩薩峠

慢心和尚の巻

中里介山



お銀様は今、竜之助のために甲陽軍鑑の一冊を読みはじめました。

「某は高坂彈正それがしかうさかだんじやうと申して、信玄公被管ひくわんの内にて一の臆病者也、仔細は下々しもじもにて童子わらべこどものぎれごとに、保科彈正ほしな鑓彈正やり、高坂彈正逃彈正にげと申しならはすげに候、我等が元来を申すに、父は春日大隅かすがおほすみとて……」

それは巻の二の品ほんの第五を、はじめから、お銀様はスラスラと読みました。

竜之助がおとなしく聞いているために、品の第六を読み了おわつて第七にかかろうとする時分に、

「有難う、もうよろしい」

「夜分には、また源氏物語を読んでお聞かせしましょう」

二人ともに満足して、その読書を終りました。お銀様は書物に疲れた眼を何心なく裏庭の方へ向けると、小泉家の後ろには竹藪たけやぶがあつて、その蔭にまだお銀様の好きな椿つばきの花が咲いておりました。お銀様はそれを見たとわざわざ庭へ下りて、その一輪を摘み取つて来ました。重々しい赤い花に二つの葉が開いています。

「お目が見えると、この花を御覧に入れるのだけれど」

柱に凭もたれていた竜之助の前へ、お銀様はその花を持って来ました。

「何の花」

「椿の花」

お銀様はその花を指先に挿んで、子供が弥次郎兵衛を弄ぶ^{もてあそ}ようにしていました。

「たあいもない」

竜之助はその花を手にとろうともしません。お銀様は、ただ一人でその花をいじくりながら無心にながめていました。

さてお銀様は、机の上をながめたけれども、そこに、有野村の家の居間にあるような、一輪差しの花活^{はないけ}も何ありません。

「お銀」

竜之助はお銀様の名を呼びました。それは己^{おの}が妻の名を呼ぶような呼び方です。

「はい」

お銀様はこう呼ばれてこう答えることを喜んでいました。自分から願うてそのように呼ばれて、このように答えることを望

んでいるらしい。

けれども竜之助は呼び放しで、あとを何の用とも言いませんでした。ただ名を呼んでみて、呼んでしまつては、もうそのことを忘れてしまつてゐるようでしたが、実はそうではありません。

「あなた」

お銀様は椿の花を面かおに当てて、その二つの葉の間から竜之助の面をながめました。

「この花をどうしましょう、わたしの一番好きな椿の花」

お銀様はクルクルと、椿の花を指先で操あやつりました。

竜之助は返事をしません。けれどもお銀様はそれで満足しました。

「生けておきたいけれども、何もございませんもの」

お銀様は、わざとらしくその花を持ち扱つて、机の上や室の隅などを見廻しました。この一間に仏壇があることは、お銀様も前から知っていました。けれども、この花は仏に捧げようと思つて摘んで来た花ではありません。ところが、持余しもてあま気味になつてみると、そこがこの花の自然の納まり場所であるらしい。お銀様はその一花二葉の椿を持つて、仏壇の扉をあけた時に、まだそんなに古くはない白木の位牌いはいがたった一つだけ、薄暗いところに安置されてあるのを見ました。位牌が古くないだけにその文字も、骨を折らずに読むことができます。

あくじよだいし
「悪女大姉」

と読んでお銀様は、手に持っていた椿の花を取落しました。

「悪女大姉」の戒名かいみょうは、尋常の戒名ではありません。

不貞の女をもなお且つ貞女にし、不孝の子をもなお孝子とし

て、彼方あなたの世界へ送るのが人情でもあり、回向えこうでもあるべきに、これはあまりに執念しゅうねんの残る戒名であります。

何の怨みあつてその近親の人が、この位牌を祀まつるのだからその気が知れないと思ひました。また何の意趣があつて、引導の坊さんがこの戒名を扱えらんだのだから、その気も知れないと思ひました。

それがお銀様にとっては、単に文字の示す悪い意味の不快な感じだけでは留まりませんでした。悪女！ お銀様はむらむらとして、ここにまで自分を見せつけられる憤いきどおりから忍ぶことができないものようです。けれども、この位牌はお銀様に見せつけるために置かれたものでないことは、その木の肌を見ても、墨の色を見てもわかることであります。

お銀様がここへ来るずっと前から、たつた一つ、こうしてこ

ここに置かれてあつたのだということも、いかに逞たくましい邪推を以て見てもそれは疑えないのであります。

お銀様は、悪女の文字から来る不快と悪感おかんとをこらえて、そのことは竜之助に向つて一言も言いません。せつかくの椿の花を拾い上げて、わざと後向きに花立へ差して、仏壇の扉を締めてしまいました。

その晩のこと、お銀様は竜之助を慰めるために話の種の一つとして、ふと、このことを言い出す氣になつて、

「そこにお仏壇がありまする、その中に、妙な戒名を書いたお位牌がたつた一つだけ入れてありました、何のつもりで、あんな戒名をつけたのだか、わたしにはどうしてもわかりませぬ」

「何という戒名」

「悪女大姉というのでございます」

「悪女大姉？　どういふ文字が書いてあります」

「悪というのは善悪の悪でございます、女というのは女という字」

「なるほど、悪女大姉、それは妙な戒名じゃ」

「ほんとにいやな戒名ではござんせぬか」

「戒名には、つとめて有難がりそうな文字をつけるのに」

「それが悪女とはどうでございます、死んだ後まで、悪女と位牌に書かれる女は、よほどの悪いことをしたのでございましょう」

「誰かの悪戯いたづらだろう」

「いいえ、そうではございませぬ、立派な位牌にその通り記しるしてあるのでございます」

「はて」

「もしわが子ならば親が無言だまつてはおりますまい、妻ならば夫

たる人が、悪女と戒名をつけられて無言^{だま}つていよう道理がございませぬ」

「どうも解^げせぬ、読み違えではないか」

「いいえ」

「その悪女の悪という字が、たとえば慈とか悲とかいう文字が、墨のかげんでそう見えるのではないか」

「そうではございませぬ」

「慈女大姉、悲女大姉、その辺ならばありそうな戒名だが、好んで悪女と附ける者はなからう、それは御身の読み違えに相違ない」

「いいえ、確かに」

お銀様は、確かに自分の眼の間違^{けねん}いでないことを主張したけれども、そう言われてみると、懸念^{けねん}が起りました。

「そんならば、もう一度見て参りましょう」

お銀様はそれを曖昧あいまいに済ますことができない性質たちです。立つ

て仏壇をあけて見ましたけれども、仏壇の中は暗くありました。

「それごらんあそばせ、悪女」

取り出してよいものか悪いものか懸念をしながら、お銀様は自説の誤らないことを保証するために、行燈の光までその位牌を持ち出しました。

「確かに悪女？　そうして裏には……」

竜之助に言われて、お銀様が位牌の裏を返して見ると、そこには「二十一、酉とりの女」と記してありました。

その翌朝、竜之助は、お銀様に手を引かれて、小泉家の裏山へ上りました。

径を辿こみちつて丘陵の上まで来ると、そこに思いがけなく墓地がありました。林に囲まれた芝地の広い間には、多くの石塔といどまんじゆうくつかの土饅頭が築かれてありました。墓地ではあつたけれども、そこは日当りがよくて眺めがよい。そこから眺めると目の下に、笛吹川沿岸の峡東こうとうの村々が手に取るように見えます。その笛吹川沿岸の村々を隔てて、甲武信ヶ岳こぶしから例の大菩薩嶺、小金沢、笹子、御坂みさか、富士の方までが、前面に大屏風おおびようぶをめぐらしたように重なっています。それらの山々は雲を被かぶつていゝるのもあれば、雪をいただいているのもあります。

お銀様は、その山岳の重畳と風景の展望に、心を躍らせて眺め入りました。

山岳にも河川にも用のない机竜之助は、日当りのよいことが何より結構で、お銀様が風景に見惚みとれている時に、竜之助はよ

い気持であたりの芝生の上へ腰を卸して、日の光を真面まともに浴びている。

「あなた、そこはお墓でございますよ」

お銀様に言われて、そうかと思つたけれども、敢て立とうとはしません。

竜之助の腰を卸していたところは墓に違いありません。ほかの墓とは別に、孤島はなれじまのように少しばかり土を盛り上げたところに、無縫塔むほうとうのような形をした高さ一尺ばかりの石が一つ置いてあるだけでありました。その前には、竹の花立があつたけれど、誰も香花こうげを手向たむけた様子は見え、腐りかけた雨水がいつぱいに溜ためっているだけです。

竜之助が動かないから、お銀様もまた、その近いところへ蹲うずくまりました。ここは誰も人の来る憂うれえのないところです。天の

日は二人ばかりのために照らし、地の上は二人ばかりを載せているものようです。

あたりの林も静かでありました。丸腰で来た竜之助は、ついにそこへゴロリと横になつて肱枕ひじまくらをしてしまいました。竜之助の横になつて肱枕をしたその頭のあたりがちょうど、無縫塔の形をした石塔のあるところであります。

それだから竜之助は、墓を枕にして寝ているものようです。寝ている竜之助はそれをなんとも思つてはいないらしいが、傍で見たお銀様は、快い形と見る事ができません。この人に墓を枕にして眠らせるということが、好ましいことではありません。それとも知らずに竜之助は、

「こんなところで死にたいな」

と言いました。けれどもそれは嘘うそです。竜之助がこう言つたの

は、それは、あんまり日の当りがよくて、そこに足腰をゆるゆると伸ばした心持が譬え様がないから、そう言ったのだけれど、お銀様は、やはりその言葉を不吉の意味があるもののように聞いて、

「石になつては詰りませぬ」

お銀様はこう言いながら、ほとんど二人並んで寝るように片手を伸べて、竜之助の頭の石塔の石を撫なでました。石を撫でながら、なにげなく石の裏を見ると、そこに、「二十一、酉とりの女の墓」と小さく刻んであるのが、図はからず眼に触れてゾツとしました。その気になつて見れば、この石塔の前面には何の文字もなくて、裏にだけ遠慮をしたもののよう「二十一、酉の女の墓」と刻んであるのが異様です。なお他にある総ての墓とは、ほとんど除物のけもののようにされて、この墓だけが一つ、ここに置かれて

あることも異様です。

それよりもまた、お銀様の胸を打ったのは、昨夜調べてみた「悪女大姉」の位牌の裏の文字が、これと同じことの「二十一、酉の女」の文字であつたことです。

この文字を見た時にお銀様は、蛇を踏んだような心持になりました。寝ていた机竜之助は、何を思ったか、むつくりと頭を上げて起き直り、

「お銀どの」

「はい」

「あの、ここは何村というのであつたかな」

「ここは東山梨の八幡村^{やわた}」

「東山梨の八幡村？」

「八幡村の大字は江曾原^{おおあざ えそはら}と申すところでございます」

「八幡村の江曾原！」

竜之助がいま改めてそれを聞くのはあまりに事が改まり過ぎる。ここへ来てからも相当の日数があるのだから、仮りにも現在の己おのれのいる土地の名前を記憶しておらぬということはあるまい。けれどもこの人は、初めてそれを聞くもののように、念を押して尋ねて再びそれを繰返しました。

「して、いま我々が厄介になっている家の主人の名は」

「小泉と申します」

「小泉……それに違いないか」

「いまさら、そのような御念を」

「八幡村の小泉家——そこへ、拙者も、お前も、今まで世話になつていたのか」

「それがどうかなさいましたか」

「小泉の主人というのは、拙者の身の上も、お前の身の上もみんな承知で世話をしているのか」

「いいえ、わたしの身の上は知っておりますけれど、あなたのことは少しも」

「それと知らずにこうして、隠して置いてくれるのか」

「左様でございます」

「お銀どの、そなたの家は甲州でも聞えた大家であるそうじゃ」

「改めて左様なことをお聞きになりますのは？」

「お前はここからその実家^{うち}へ帰ってくれ」

「まあ、何をおっしゃいます」

「小泉の主人に頼んで、実家へ詫^わびをして帰るがよい、今のうちに」

「わたしに帰れとおっしゃるのでございますか、わたし一人を

有野村へ帰してしまおうとなさるのでございますか」

「生命いのちが惜しいと思うならば、一刻も早く帰るがよい、もし生命が惜しくないならば……それにしても帰るがよい」

「何のことやらさっぱりわかりませぬ」

「わからないうちに帰るがよい、危ないことじゃ、これから先へ行くと、お前も悪女になる」

「悪女とは？」

「悪女大姉、二十一、酉とりの女がいま思い当つたよ」

「あなたのお言葉が、いよいよわたしにはわからなくなりました」

「わかるまい、悪女大姉、二十一、酉の女というのは、拙者にも今までわからなかった」

「あれはどうしたわけなのでございます」

「あれはな」

「はい」

「あれは、人に殺された女よ」

「かわいそうに。そうしてどんな悪いことをしましたの」

「お前がしたような悪いことをした」

「妾^{わたし}がしたような悪いこととは？」

「男の魂を取つて、それを自分のものにしようとしたからだ」

「妾はそんなことは致しませぬ」

「いまに思い知る時が来る」

竜之助が石塔の頭へ手をかけて立ち上つた時に、どこからともなく一陣の風が吹き上げて来ました。その風が、颶^{つむじかぜ}風のよう^{さつ}に颯^{あたり}と四^さ辺^{あたり}の枯葉を捲き上げました。紛^{ふん}乱^{らん}として舞い上る枯葉の中に立つた竜之助は、今その墓から出て来たものようであ

ります。

「なんだか、わたしは怖ろしくございます」

日はかがやいているのに、お銀様はその周囲まわりが鉛のように暗くなることを感じました。

二

机竜之助はその晩、ふらふらとして小泉の家を出でました。

お銀様は竜之助の出たことを知りませんでした。それは竜之助がお銀様の熟睡を見すまして、密そつと抜け出でたからであります。

小泉の家の裏手を忍び出でた竜之助は、腰に手柄山正繁の刀を差していました。これは神尾主膳から貰ったものであります。

手には竹の杖を持っていました。これも甲府以来、外へ出る時には離さなかつたものであります。面は例によつて頭巾ずきんで包んでいました。

その歩き方は、甲府において辻斬を試みた時の歩き方と同じであります。あるところはほとんど杖なしで飛ぶように見えましたが。あるところは物蔭に隠れて動かないのでありました。自然、甲府でしたことを、ここへ来ても繰返すもののように見えます。

けれどもここは甲府と違つて、人家も疎まばらな田舎道いなかみちであります。笛吹川へ注ぐ小流れに沿つて竜之助は、やや下つて行つたけれど誰も人には会いません。人には逢うことなくして、水車の車のめぐる音を聞きました。竜之助がその水車の壁に身を寄せた時に、一方の戸がガタガタと音をして開きました。

「それでは新作さん、行つて来ますよ」

それは若い女の声。

「ああ、気をつけておいで」

それは若い男の声。

「ずいぶん暗いこと」

若い女は外の闇へ足を踏み出しました。手拭を姉さんあね被りかぶにして、粉物を入れた箕みを小脇にし、若い女の人は甲斐か甲斐いしく外へ出て、外から戸を締めようとして、

小屋の中で臼うすのあたりを小箒こほうきで掃いていた若い男は、その手を休めてこちらを向いて、

「狸たぬきに見込まれないようにしろや」

と言つて笑うと、

「大丈夫だよ、わたしなんぞを見込む狸はいないから」

女もまた、小屋の中を見込んで笑いながら戸を締めました。

女はこう言い捨ててスタスタと草履ぞうりの音を立てながら、小流れの堤を上の方へと歩いて行きます。

この水車はある一箇の人の持物ではなくて、この八幡村一郷の物であります。一軒の家が一昼夜ずつの権利を持つている共有物でありました。その当番に当つた家では、その機会においてなるべく多くの米を搗うぎ、麦を挽ひかねばなりませんでした。これがために、いつもこの水車小屋には徹夜の働き手があります。

もし若い娘がその当番の夜に働いていたならば、それと馴染なじみの若い男が手伝いに来たがります。馴染でない若い男もやつて来たがります。もしまた出来てしまった間柄である時には、その馴染であるとないに拘かわらず、手を引いてこの水車小屋の一夜を、水入らずの稼かせぎ場ばとして許すのであります。

右の若い女が土手道をスタスタと歩いて行く時に、机竜之助は壁の下から軽く飛んで出でました。いくばくもなくその娘のあとから追いつきました。追いついたというけれど、それはほとんど風のようにです。風は微風でも音がするけれど、竜之助の追いついた時までは音がしませんでした。

でも女はその音を聞かないわけにはゆきません。

「おや？」

箕みを抱えたまままで振返ると、そこに真黒い人影が、いつぱいに立ちはだかつているのを見ました。

「物を尋ねたい」

「はい」

女はワナワナと慄ふるえました。

女はワナワナと慄えて、立っていられないために地面へ竦すくん

でしまおうとした時に、竜之助は右の猿臂えんぴを伸ばして、女の首筋を抱えてしまいました。

「あれ！」

と叫ぶ口を、竜之助は無雑作むぞうさに押えてしまいました。女は箕を取落して、そこら一面に濛々もうもうと粉が散乱しました。

「お前は小泉という家を知っているか」

こう言いながら竜之助は、いったん固く押えた女の口を緩めゆるました。

「はい……」

女は再び叫びを立てるほどの気力がありません。

「それはどこだ」

「小泉の旦那様は……」

「小泉の主人を尋ねるのではない、小泉の家にお浜という女が

あつたはず、それをお前は知っているか」

「小泉のお浜様は……もうあのお家にはおいでがございません」

「どこへ行つた」

「お嫁入りをなさいました」

「それから？」

「それからのことは存じませぬ」

「知らぬということはあるまい」

「存じませぬ」

「人の噂ではそれをなんと云つてゐる」
うわさ

「人の噂では……」

「氣を落つけて、人の噂をしている通りを、わしに聞かしてくれ」

「人の噂では、お浜様はよくない死に方をなされたそうでござ

います」

「よくない死に方とは？」

「悪い奴に殺されたのだなんぞと、村では噂をしているものも
ありますけれど、わたしはそんなことは知りませぬ」

「悪い奴に殺されたと？ どこで……」

「はい、お江戸とやらで殺されて、骨になったのを、こっそり
とこの村へ届けた人があつて、それでお浜様の幽霊が出るなん
ぞと若い衆が言っていますけれど、わたしなんぞは何も存じま
せんから、どうか御免なすつて下さいまし」

「お前はどこの娘だ」

「わたしは……」

「お前の歳は？」

「十八でございます、助けて下さいまし」

「十八……それで名は？」

「名前なんか申し上げるようなものではございません」

「いま水車小屋にいた若い男はありや、お前の兄弟か、亭主か」

「あれは新作さんでございます」

「新作というのは？」

「この村の若い者」

「お前はあの男を可愛いと思うか」

「それは、あの人はゆくゆくわたしと一緒になる人……」

「うむ、わしはこの通り眼が見えないけれど、感で見ると、お前

は可愛い娘らしい、お前に可愛がられる若い男は仕合せ者じゃ」

「あなた様は、わたしをどうなさるんですございます」

「小泉のお浜を殺したのは拙者だ^{おれ}」

「エ、エ！」

「その供養くようのために、お前を頼むのだ」

「ああ怖い」

「これから後、拙者の差している刀に血の乾いた時は、拙者の命の絶えた時じゃ」

「わたしを殺すのでございますか、わたしをなぜ殺すのでございます、いま死んでは新作さんに済みませぬ」

「それは拙者の知ったことでない、こうせねばお浜への供養が済まぬ」

「あれ！」

「斬つてしまえば雑作ぞうさはないけれど、これはお浜へ供養の血」

「苦しい！」

「存分に苦しけれ」

「ああ苦しい！」

夜中過ぎに机竜之助は帰つて来ましたが、竜之助が帰つて来た時までお銀様は、竜之助の出したことを知りませんでした。そつと帰つて来て、行燈あんどんの下で頭巾ずきんを取ろうとした時にお銀様は眼が醒さめました。醒めてこの体ていを見ると怪しまずにはおられません。

「どこへかおいであそばしたの」

「ついそこまで」

「お一人で？」

「一人で」

「何の御用に」

「眠れないから歩いて来た」

「そんなら、わたしをお起しなさればよいに」

「あまりよく寝ている故、起すも気の毒と思つて」

「そんなことはございません」

「ああ、咽喉のどが乾いた、水が一杯飲みたいものだ」

「お待ちなさい、いま上げますから」

お銀様は、水指みずさしを取るべく起きて寝衣ねまぎを締め直しました。

「まだお火がありますから」

とお銀様は火鉢の灰を掻かき起しました。

「お銀どの」

竜之助はうまそうに、水を一杯飲んでしまつてから、

「紙があつたはず、それから筆と墨と」

「何かお書きなさるの」

お銀様は竜之助の請求を怪しみながらも、手近の硯箱すずりばこと一帖の紙とを取寄せて机の上に載せながら、

「わたしが書いて上げましょう、用向きをおつしやつて下さい」
「ええと、その紙で帳面をこしらえてもらいたい、半紙を横に折って長く逆綴ぎやくとじにしてもらいたい」

「横に折って長く逆綴に？　そうして何にするのでございます」
お銀様は、竜之助に頼まれた通りに帳面をこしらえ始めました。紙撚こよりをよってそれを綴じてしまつて机の上へ置き、

「逆綴というのは、これはお葬いやなにかの時にするものでございましょう」

「死んだ人へ供養のためにするのじゃ」

「供養のために？」

お銀様は、いよいよ竜之助の挙動と言語とを怪しまずにはおられませんでした。

「今日の日は何日であつたろう」

「二月の十四日」

「それでは、そこへ初筆しよふでに二月十四日の夜と書いて……」

「二月十四日の夜、と書きました」

「その次へ、甲州八幡村にてと……」

「はい、甲州八幡村にて」

「その次へ、少し頭を下げて、名の知れぬ女と書いて」

「名の知れぬ女」

「十八歳と小さく」

お銀様は、竜之助に言われる通りにこれだけのことを書きま
した。

「これだけでよろしいのでございますか」

「まだ……左の乳の下と」

「左の乳の下、それから？」

「それでよろしい」

「これがどうして供養になるのでございます」

竜之助はそれには答えることがなく、

「今夜、拙者が外出したことは誰にも語らぬように。この後とでもその通り」

「あなたを一人歩きさせたのは、わたしの罪でございますもの」

「寝よう」

その時に何の拍子か、行燈あんどんの火がフツと消えました。

八幡村を震撼しんかんさせるような恐怖が起つたのは、その翌日の夕方のことでありました。

昨夜、水車小屋から出て行方知れずになったという村の娘が一人、水車場より程遠からぬ流れの叢くさむらの蔭に、見るも無惨むざんに殺されて漂っていたのが発見されて、全村の人は震駭しんがいしました。

慄え上つて噂をするのを聞いていると、それは大方、恋の恨みだろうということです。

その娘は村でも指折りの愛嬌者に数えられて、新作と約束が出来るまでに、思いをかけた若い者も少なくはなかったということ、それらの恋の恨みであろうということに一致すると、青年たちはいずれも痛くない腹を探られる思いをして、恐怖と無気味と復讐心とに駆られて、村の中は不安の雲が弥^{いや}が上に捲き起ります。

小泉の家は名主^{なぬし}でありますから、何者よりも先にそこへ駆つけて、その処分に骨を折らなければなりません。

主人の妻はお銀様に向つて、

「まあ、当分は夜分など、外へおいでなさることではありませぬ」

と言いました。

その出来事の物語を聞いたお銀様は胸を打たれました。

その時に机竜之助は、眠っているのかどうか知らないが横になつていました。

お銀様は行燈の下の机によつて、忙せわしく昨晚こしらえた横綴の帳面を繰りひろげて見ました。

「もし、あなた」

お銀様は机竜之助の面おもてを睨にらんで、

「もし、あなた」

二度まで竜之助を呼びました。

「何だ」

竜之助は懶ものうげな返事をします。

「あなたは昨ゆうべ晩どこへおいでになりました、もしやあの向うの

水車小屋の方へおいでになりはしませんか」

「水車小屋の方へ行つた」

「そうしてそこで何をなさいました」

「そこで何もしない」

「何かごらんになりはしませんでしたか」

「別に何も……見ようと思つても見えはせぬわい」

「あの十八になる村の娘さんと、道で行きあうようなことはありませんでしたらうね」

「はははは」

竜之助は笑いました。何の意味ある笑い方であつたか、お銀様には少しもわかりませんでした。

「ああ怖ろしい」

お銀様は総身そうみへ水をかけられたようになりました。

竜之助はクルリと背を向けて返事をしませんでした。

お銀様は怖ろしい形相ぎようそうをして、寝返りを打った竜之助の後ろ姿と、それから、自分が昨夜、怪しみながらも竜之助に言いつけられた通りを書いた帳面を見比べていましたが、やがて、荒々しく立って竜之助を揺り起して、その帳面を見えない眼先へ突きつけて、

「左の乳の下……かわいそうに、罪もない村の娘さんの左の乳の下を抉えぐつて殺して、お濠ほりとやらへ投げ込んだのはあなたでございましょう、ナゼあなたは、そのようなことをなさいました、そのようなことをしなければならぬというのはどうしたわけでございます、そうしておいて帰つて来て、わたしにこの帳面を書かせようとは、そりやまあ何という仕様でございます」

「それは今に始まったことではない」

と竜之助は言いました。そう言いながら起き上りました。

「甲府にいたとき噂にも聞いたろうが、夜な夜な辻斬をして市中を騒がせたのは、みんな拙者の仕業しわざじゃ」

「エエ！ あなたがあのだ辻斬の本人？」

「それをいま知って驚いたからとて遅い、昨夜はまたむらむらとその病が起つて、居ても立つてもおられぬから、ついあんなことをしてかした」

「ああ、なんという怖ろしいこと、人を殺したいが病とは」

「病ではない、それが拙者の仕事じゃ、今までの仕事もそれ、これからの仕事もそれ、人を斬ってみるよりほかにおれの仕事はない、人を殺すよりほかに楽しみもない、生甲斐もないのだ」

「わたしはなんと言つてよいかわかりませぬ、あなたは人間ではありませんね」

「もとより人間の心ではない、人間というやつがこうしてウヨウヨ生きてはいるけれど、何一つしでかす奴等ではない」

「あなたはそれほど人間が憎いのですか」

「ばかなこと、憎いというのは、いくらか見どころがあるからじゃ、憎むにも足らぬ奴、何人斬ったからとて、殺したからとて、咎にも罪にもなる代物しろものではないのだ」

「本気でそういうことをおっしゃるのでございますか」

「もちろん本気、世間には位を欲しがって生きている奴がある、金を貯めたいから生きている奴がある、おれは人が斬りたいから生きているのだ」

「ああ、神も仏もない世の中、それで生きて行かれるならば……」

「神や仏、そんなものが有るか無いか、拙者は知らん、ちよつと水が出たからとて百人千人はブン流されるほどの人の命じゃ、

疫病神^{やくびようがみ}が出て采配^{さいはい}を一つ振れば、五万十万の要^いらない命が直ぐにそこへ集まるではないか、これからの拙者が一日に一人ずつ斬つてみたからとて知れたものじゃ」

「おお怖ろしい」

「真実、それが怖ろしければ、いまのうちにここを去るがよい」
「それでも、こうなつた上は……」

「こうなつた上はぜひがないと知つたならば、お前は、拙者のすることを黙つて見ているがよい」

「ああ、わたしはいつそ、あなたにここで殺されてしまいたい」
「いつかそういう時もあるう、その帳面のいちばん終^{しま}いへ、お前の名を書いて歳を入れずにおくがよい」

「ああ、わたしは地獄へ引き落されて行くのでございます」

「地獄の道づれがいやか」

「否いやと言つても応おうと言つても、こうなつたからは仕方がございませぬ、わたしはどうしたらようございましょう」

「なんと言つても甲州の天地は狭いから、ともかくもこれから江戸へ行くのじゃ、おそらくお前は生涯、拙者の面倒を見なければなるまい」

「わたしは怖ろしくてたまりません、けれどもどうしてよいかわかりません、それでもわたしはあなたと離れようとは思いません」

「黙つて拙者のすることを見ていてくれ」

「黙つて見てはいられません、わたしもあなたと一緒に生きている間は、あなたのような悪人にならなければ、生きてはおられませぬ」

恵林寺えりんじの師家しけに慢心和尚まんしんおしょうというのがあります。

恵林寺が夢窓国師むそうこくしの開山であつて、信玄の帰依きえの寺であり、

柳沢甲斐守の菩提寺ぼだいじであるということ、信長がこの寺を焼いた時、例の快川国師かいせんこくしが、

あんぜんかならずしもさんすいをもちあず
安禅必不須山水

しんとうめつきやくひもおのづからすずし
滅却心頭火自涼

の偈げを唱えて火中に入定にゅうじようしたというような話は、有名な話であります。

宇津木兵馬は駒井能登守から添書てんしよを貰つて、ここの寺の慢心和尚もとの許へ身を寄せることになりました。

慢心和尚というけれども、和尚自身が慢心しているわけでは

ありません。和尚は人から話を聞いていて、それが終わると、非常に丁寧なお辞儀をする人でありました。非常に丁寧なお辞儀をしてしまつてから後に、

「お前さんより、まだ大きなものがあるから、慢心してはいけません」

王城の地へ上つて行列を拝した時にも、和尚は恭うやうやしく尊敬の限りを尽しましたけれども、そのあとで、

「お前さんより、まだ大きなものがあるから、慢心してはいけません」

と言つて歸りました。

領主や大名へ招かれた時でも、そうでありました。御馳走になつたあとでは、非常に丁寧なお辞儀をして、歸る時に、

「お前さんより、まだ大きなものがあるから、慢心してはいけ

ません」

諸仏菩薩を拜んだあとでも、また同じようなことを言いました。

「お前さんより、まだ大きなものがあるから、慢心してはいけません」

慢心和尚の名は、おそらくその辺から出て呼びならわしになつたものと思われます。慢心してはいけませんというのは、人に向つて言うのではなく、自分に向つて言うのらしいから、それで誰も慢心和尚の不敬を咎めるものはありませんでした。

慢心和尚の面はまん^{かお}円いと言つても、またこのくらいまん^{かお}円いのは無いものでありました。面の全体がブン廻シで描いたと同じような円さを持っていました。そうしてそのまん^{かお}円い面のまん中に鼻があるにはあるけれども、眼と眉は有るといえば有

る、無いといえは無いで通るくらいであります。

ほんのりと霞がかかったように、細い眉が漂うている。その代りでもあるまいけれど、口は特に大きいのです。和尚の拳こぶしは小さい方ではないけれど、その小さい方でない拳を固めて、それを包容し得るほどに、和尚の口は大きいのであります。それがお師家しけさんで通るのだから、大した学問とか隠れたる徳行とかいうものを持つているのかと思えば、それが大間違いであります。学問は門前の小僧よりも出来ない人でありました。書入れをしたり仮名かなをつけたりして、やつと読むことのできる語録を二三冊持つていることが、和尚の虎の巻で、それを取り上げてしまえば、水をあがった河童かっぱ同様で、講義も提唱もできないのであります。

隠れたる徳行にも、隠れざる徳行にも、和尚の人を驚かす仕

事は、ただ自分の拳を自分の口の中へ入れて見せるくらいのものであります。これだけは尋常の人にはできないことであります。けれども和尚は決して、そんなことを自慢にはしていません。自分の拳が、自分の口の中へ入るといふようなことをおくびにも人に示したことはありませんから、はじめて和尚を見た人は、さても円い面の人があるものと驚き、次に大きな口もあればあるものと驚き、あとで人から、あの口へあの拳が入るのだと聞いて、三たび驚くのであります。

宇津木兵馬もこの和尚に相見しょうけんの時から、三箇みつの驚きを経過しました。慢心和尚は宇津木兵馬からその身の上と目的を聞いて後、例の慢心は持ち出さないでこう言いました。

「わしはその敵討かたきうちというのが大嫌いじゃ」

兵馬は和尚のその言葉に、平らかなることを得ませんでした。

「しからば悪人を、いつまでもそのままに置いてよろしいか」

「よろしい」

「それがために善人が苦しめられ、罪なき者が難渋^{なんじゆう}し、人の道は廃^{すた}り、武士道が亡びても苦しいござらぬか」

「苦しいござらぬ」

「これは意外な仰せを承る」

「この世に敵討ということほどばかかしいことはない、それを忠臣の孝子のと賞^ほめる奴が気に食わぬ」

「和尚、御冗談^{ごじようだん}をおっしゃるな」

と兵馬は、慢心和尚の言うことを本気には受取ることができません。今まで自分を励まして、力をつけてくれる人はあつたけれども、こんなことを言つて聞かせた人は一人もありません。

「冗談どころではない、わしは敵討という話を聞くと虫唾^{むしず}が走

るほどこいやだ、誰が流行^{はや}らせたか、あんなことを流行らせたおかげに、いいかげん馬鹿な人間が、また馬鹿になつてしまった」

「和尚は、世間のことにあずからず、こうしてかけ離れて暮しておらるる故、そのような出まかせを申されるけれど、現在、恥辱を受け、恨みを呑む人の身になつて見給え」

兵馬として、和尚の出まかせを忍容することができないのは当然のことであります。それにもかかわらず和尚は、兵馬の苦心や覚悟に少しの同情の色をも表わすことをしませんで、寧ろ^{むし}冷笑のような語氣であります。

「誰の身になつても同じことよ、わしは敵討をするひまがあれば昼寝をする」

「しからば和尚には、親を討たれ、兄弟を討たれても、無念と^{おぼしめ}も残念とも思召されないか」

「そんなことは討たれてみなけりやわからぬわい、その時の場合によつて、無念とも思い、残念とも思い、どうもこれ仕方がないとも思うだろう」

「ごんごどうだん
言語道断」

兵馬はこの坊主を相手にしても仕方がないと思いました。仕方がないとは思つたけれども、多年の鬱憤うつぶんと苦心とを、こんなに露骨に冷笑されてしまったのは初めてのことでありました。それだから、その心中は決して平らかではありません。

和尚の言葉は、敵討あざけそのものを嘲るのではなくて、寧ろいつまでもこうして、本望ほんもうを達することのできない自分の腑甲斐ふがなさいを嘲るために、こう言つたものだろうと思われるのです。

そう思つてみると、嘲らるるのも詮せんないことかと我自ら情けなくなるのであります。それと共に、過ぎにし恨みや辛いこと

が胸に迫つて来るのであります。兵馬は全く、自分の腑甲斐ないことに泣きたくなりました。

ともかくも和尚の前を辞して、定められたる書院の一室に落着いた後までも、兵馬はこの泣きたい心持から離れることができません。

ついには、こうして、永久に自分は兄の敵^{かたき}を討つことができないで了^{おわ}るのかと思ひました。そうして、討つことのできない兄の敵を、東奔西走して尋ね廻つた自分は、それでけつきよく一生がどうなるのだということをも、考えさせられてしまいました。

それだけの意味ならば、敵討^{かたきうち}はばかばかしいと、昼寝をするにも劣るように罵つた和尚の言葉が当らないでもない。そうして畢竟^{ひつきよう}、悪いことをした奴は、悪いことをしただけが仕得^{しどく}で、

人間の応報の怖るべきことを思い知る制裁を与えらるることなしに済んでしまふとしたら、この世の中は不公平なものだ、ばかばかしいものだ。兵馬はそんなことを考えると頭が重くなつて、きようづくえ経机の上に両手でその重い頭を押えて俯伏うつむいた時、ハラハラと涙がこぼれました。

宇津木兵馬はその晩、泣いてしまいました。それは自分の臍甲斐ないことばかりではなく、過ぎにいろいろのことが思い出されると、涙をハラハラとこぼしはじめて、やがて留度とめどもなく泣けて仕方がありません。

兵馬自身にも、その悲しいことがわかりませんでした。慢心和尚に言われたことの腹立ちは忘れて、ただただ無限に悲しくなるのでありました。それだから経机の上へ突伏つつぶして、いつまでも眠ることもしないで泣き暮していました。

いつそのこと、刀も投げ出し、お松を連れてどこへか行つてしまおうかしら。そうして小店こだなでも開いて、町人になつてしまおうかとも思わせられました。そうでなければ髪を剃りこぼつて、こんなお寺のお小僧になつてしまった方が気楽だろうとも考えさせられました。

兵馬の心は、今日まで張りつめた敵討の心に疲れが出て来たのかしら。人を悪にくむ心よりは、人恋しく思うようになって泣きました。

張りつめていたから、今までお松と、ほとんど同じところに起き臥がしていても、その間にあやまちはありませんでしたが、今こうして見れば、お松の今まで尽してくれた親切と、異性の懐しみとが犇ひしと身に応こたえるのであります。これは思いがけないことで、この寺で坊さんに嘲られてから、兵馬自身に、女を恋し

く思う心が起りました。

すでに敵を討つ^{かたき}ということのないものにすれば、自分はこれから一生を、なるたけ無事に、なるたけ楽しく、そうしてなるたけ長く生きて行きさえすればよいことになる。それをするにはお松という女は、実によい相手であるときさえ思わせられないではありません。

もし、ここの和尚が言つたように、敵を討つことがばかばかしいことであるとするならば、この方法を取つて、なるべく長く生きるのが賢い方法であつて、その方法はいくらでもあることを、兵馬は無意味に考えさせられました。

お松の心はすでに、そうなつているときさえ、兵馬には想像されるのであります。「いつそ、命を目的の敵討などはやめにして……お前と一緒に末長く暮そうか」「それは、本當でございますか」

そう言つてお松の赧^{あか}らむ面^{かお}が眼に見えるようです。お松の内心では、疾^とうからそこへ兵馬を引いて行きたいように見えないではありません。

すこしも早く本望を遂げた上は、兵馬に然るべき主取りをさせて、自分もその落着きを楽しみたい心が歴々^{ありあり}と見えることもある。

もしまた本望を遂げないで刀を捨てる時は、たとえば八百屋、小間物屋をはじめたからとて、お松はそれをいやという女でないことも思わせられてくる。

この時、兵馬は、竜之助を追い求むる心よりも、お松を思いやる心が痛切になりました。明日の晩は甲府へ入つて、お松を訪ねてやろうという心が、むらむらと起りました。

慢心和尚という坊主が、よけいなことを言つたおかげで、せつ

かくの兵馬の若い心持をこんな方へ向けてしまったとすれば、不届きな坊主であります。けれども、その不届きな坊主の無礼な言葉をも忘れてしまったほど、兵馬はお松のことが思われなくなりませんでした。

四

果して兵馬はその翌日、またも甲府へ向つて忍んで行きました。

それは雲水の姿をして行きました。あじろがき網代笠を深く被つて袈裟文庫けさふんこをかけて、草鞋穿で、わらじばき錫杖としやくじよういふ打ちいでたちです。

机竜之助を探るのは二の次で、お松のいるところまでというのが、この時の兵馬の第一の心持であります。

甲府の市中へ入ったのは夜で、甲府へ入ると兵馬は、駒井能登守を訪ねようとはしないで、神尾主膳の邸の方へ、心覚えの経文を誦ずしながら歩いて行きました。

神尾の門前を二度三度通つてみました。またその邸の周囲を、さりげなく廻つてみました。しかしながら、それだけではお松の姿を見ることもできず、それに合図をする便りもありませんでした。

前にも一度、兵馬はこの家を覗ねろうて、それがために御金蔵破りの嫌疑を蒙こうむつて、獄中に繋がれた苦い経験を思い出さないわけにはゆきません。一度は神尾の屋敷のまわりを廻つてみたけれども、この姿で二度と廻ることは危ない、と言つて、声を出して呼んでみることは無論できない。わざと経文を声高く誦ずしてみたところで、それは、またあらぬ人の怪しみを買うばかり

で、お松の耳に届こうわけもないのであります。ぜひなく兵馬は、神尾の屋敷から引返して、甲府の市中を当もなく歩きます。忍ぶ身になってみると、無性^{むしよう}に懐かしくなつて、お松に会いたくてたまらなくなりました。

それをするのに最も便宜な方法は、駒井能登守の屋敷を訪ねることです。能登守の邸を訪ねてみれば、万事を心得ているお君が、言わずともよく計らつてくれないはずがない。兵馬はそれを知りつつも、どうも能登守の屋敷へは行けないのであります。行つて行けないことはないけれども、今は行くべき必要が無いはずなのであります。

それで兵馬は空しく経文^{むな}を誦しつつ、徒ら^{いたず}に甲府の町を歩きました。歩き歩いているうちに、いつしか駒井能登守の屋敷の後ろへ来てしまったことに気がつきました。

やや歩いて行つて振返つた時に、駒井の屋敷の長屋塀のある門前から左の方に、高く二階家の燈ともしびの光の射すのを遠目にながめました。そこは自分が獄中から出て病を養うところである。それから右の方へ廻つて後ろになつて能登守の居間があり、お君の方のお部屋がある。お君という女はもと賤いやしい歌唄いの女、それと知つてか知らずにか、能登守ほどの人が寵愛ちようあいしていることを、兵馬はその時分も異様に思いました。

能登守は無論お君の素性すじようを知らないのだろう。知らないとすれば、それが現われた時はどうなるだろう。これは能登守の生涯の浮沈に関する大問題に相違ないのであります。

兵馬はその時分に、能登守のために諫言かんげんをしようかとも思いました。

けれどもその機会を得ずに邸を去りました。思い切つてその

諫言をしないで邸を去つた臍甲斐なさを、ここでも悔む心になりました。

あれほどの人でも女に溺れると、目がなくなるものかと情けなくもなります。溺れる心はないが、今の自分もやはりお松という女に、苟且かりそめながら引かれて来たことを思うと、そこにも情けないものがあるようです。恰あたかもよし、この時、兵馬の空想を破るものが足許から起つて来ました。

恰もよし、とは言うけれども、実際それは善かつたか悪かつたかは疑問であります。

兵馬の足許に現われた黒い物は、ムク犬であります。

「ムク」

兵馬は低い声でその名を呼んで頭を撫なでました。ムクは尾を振つて喜びました。

兵馬とムク犬との間柄の、よく熟していることは、久しい前からのことでありました。お君を理解し、お松を理解し、また米友を理解するムク犬が、いつまでも兵馬に対して敵意を持っていようはずがありません。兵馬はこの犬を見て、このさい最もよき使者の役目をつとめるのは、この犬のほかにないと喜びました。

「ムク、こつちへ来い」

兵馬は素早く歩き出しました。その旨を心得てかムク犬は、兵馬のあとを跟ついて行きました。

憐れむべきムク犬は、いま不遇の地位にいますのであります。あいやま間の山以来の主人は、すでに他に愛せらるべき人を得て、以前ほどにこの犬の面倒を見てやる事ができません。

代つてこの犬を養うべき女たちは、元の主人ほどに親身を以

て世話をすることはできないのであります。時としては叱り罵ることさえあり、時としては自分たちのした粗忽そこつを、犬にかずけて責めをのがれようとするこゝとさえあるのであります。

さしにも黒い毛を、以前はお君が絶えず精出して洗つてやつたから、漆うるしのように光沢つやがありました。このごろは、手を下くだして滅多に洗つてやる者がないから、汚れた時は汚れたままであることがあります。食事さえも、その時その時に忘れられて与えられないことがあるのであり、ムクは巨大の犬であるだけに、食物の分量もまた多量を要する。食を細くされてから後は、餓えを感じることがしばしばあつて、催促がましく台所へ現われる時は、心なき女どもはそれを侮あなどりうるさがることもあるのであります。それでもお君の眼に触れた時は、女中に言いつけでよく世話をさせるにはさせます。そのほかの時は、神尾の屋

敷でお松に愛されることによつて、ムク犬はお君に失い、米友に行かれた空虚を補うことが出来るらしくありました。

お米倉の構外まで来た時に、兵馬はムク犬を顧みてこう言いました。

「ムク、お前は賢い犬だ、神尾の屋敷から、お松の便りをしてくれたのはお前だそうだ、今日は、わしからお松の許まで、お前に使を頼む」

兵馬は、紙と矢立を取り出してサラサラと一筆認め、それを紐でムク犬の首に結いつけました。

ムクは確かに神尾の屋敷の中へ入つて行つたけれども、容易にその返事を齎しませんでした。兵馬は長くそこに立っていることがけねんに堪えられない。人目に触れないように、行きつ戻りつしていたけれど、ムクは容易に戻つて来ませんのです。

兵馬はここに人を待つ身となりました。

待つ身になってみると、来る人が一層恋しくなるものか知ら。兵馬は早くお松に会いたい会いたいという心が、今までになかったほど胸に響きます。

お松から愛せらるることの多かつた兵馬。今はお松を慕う心が、我ながら怪しいほどに切せつになつてゆくようです。

お松の身になってみると、この頃は立場に迷う姿であります。立場に迷うというだけならば迷つたなりで、ともかく、その日を過ごして行けるけれども、居ても立つてもいられないようなことばかり、その周囲に降つて湧きました。

第一は兵馬に去られたことであります。駒井家を立退くということは早晩そうあらねばならぬことだけでも、あまりに急なことであります。ことにその行先の知れないということが、

お松にとつては、どのくらい残念であり心細くあるか知れませ
ん。それと同時に、降つて湧いたような気の毒な風聞が、今の
いちばん親しい友達であるお君の身の上にかかつて来たこと
であります。

その風聞というのは、このごろ士人一般の間に取沙汰せられ
ている、お松の親愛なお君の方が、ほいとの娘だという噂であ
ります。あれは人交りのできぬ素性の者であるに拘らず、能登
守を欺いて、その寵愛をほしいままにしている汚らわしい女、
あざむ
ひとまじわ
おうちやく
横着な女という評判が立つてゐることあります。

それと共に、能登守ともあろう者が、ほいとの娘を寵愛して
鼻毛を読まれているとは、さてさて思いがけない馬鹿殿様とい
う噂も、折助どもやなにかの間に立つてゐることです。

これは単に噂だけとしても容易な噂ではありません。お君と

併せて能登守の生涯を葬るに足る噂です。

この場合に、自分としてはどういう処置を取つていいのだから、ほとほと思案に余りました。それと忠告しなければこの後の御災難が思いやられるし、そうかと言つて明^{あか}らさまに忠告すれば、その愛情に水を差すようなものだし、またほかのことと違つて、お前の素性^{すじよう}はこれこれだろうと露出^{むきだし}には女の口から言えないし、いつそお君様が自分から御辞退申せばよいのにと、お君の心をさえ情けなくも思つたりしました。

けれども、その噂はいよいよ密々に拡がるばかりで、ことに神尾家の折助などはこのことを、いちばん恰好^{かつこう}な笑い草にして、おおつぴらで嘲弄していました。お松はそれを聞くと、どうしても本人に忠告をしなければならぬことだと思ひました。たとえ自分は悪^{にく}まれ者になつても、このままで聞き捨てにはなら

ないから、今晚は、お君様を尋ねてそのことを言つてしまおうと思つて、出かけようとする時に、例のムク犬が庭先へ尋ねて来ました。

早くも眼にとまつたのは、ムク犬の首に結ゆわいつけられた紙片かみきれであります。

お松は心得てその紙片を取つて見ると、それに「静馬しずま」と記してありました。

それだからお松はハツとしました。兵馬さんが訪ねて来ていると思うと、気がソワソワとして落着かなくなりました。これから駒井家を訪れようということなども忘れてしまいました。

急いでこのムク犬の導いて行くところへ行かなければならぬ。お松はソコソコに身仕度をして、履物はきものを突っかけようとする時に、

「お松」

と言つて奥の方から出て来たのは、お絹でありました。

「はい」

「お前はどこへ行きます」

「ちよつと、あのお長屋まで……」

お松は、悪いところへお師匠様が出て来てくれたと思わないわけにはゆきません。

「少しお待ち、お前に頼みたいことがあるから」

「はい……」

お松にとつては、いよいよ悪い機会でありましたから、その返事もいつものように歯切れよくはゆきませんでした。それで

「まあ、こつちへおいで、わたしのところへおいでなさい」

お絹はわざと、お松に猶^{ゆうよ}予と口実を与えないかのように見え
ました。そうして退^{のつ}引させずにお松を自分の居間へ連れて来て
しまいました。お松はどうすることもできませんから、そこへ
畏^{かしこ}まつて早くお師匠様が用事を言いつけて下さるようと、腹
の中でそれを焦^せき立てていましたけれど、なぜかお師匠様なる
人は、いつもより悠長に構え込んでいるもののようにあります。

「あの、御用向きは何でございましたよう」

お松は堪^{たま}り兼ねて催促してみました。その時に、お師匠様な
る人はようやく、

「お前、あのお長屋へ行くというのは嘘だろう」

と微笑しながら、お松の面^{かお}に疑いの眼を向けました。

「いいえ」

お松は見られて煙たいような心持です。

「お長屋へあの乳呑子ちのみこを見に行くと云つておいて、お前は時々、駒井様のお邸へ遊びに行くそうな」

「左様なことはござりませぬ」

この時もお松は、しどろもどろな打消しを試みましたけれど、その打消しは自分ながら、まずいものだと思わないわけにはゆきません。

「あつてはなりませぬ、あのお邸へ遊びに行くことは、お前のためになりませぬ故、これからさしとめまする」

お絹の口から、キツパリとさしとめの言葉が出ました。温順なお松も、こんなにキツパリと言われていると、はい、と言いきることはできませんでした。

「あのお邸には、わたしのお友達がおりまするものでございますから……」

「そのお友達がいけませぬ、そのお友達とお前が附合つていと、お前の身の上ばかりではない、わたしの身の上も、こちらの殿様のお身の上までも汚けがれるようなことが出来ます、それ故、今までのことはぜひもないが、これからプツツリと縁を切つて、途中で会つても口を利きかないようにしなければなりません。わたしがこういつてお前をさしとめるわけは、もう少したてば、きつとわかつて参ります、なるほど危ないことであつたと、お前はあとから気がついてくるであります。わたしは意地悪くお前にこんなことを言うのではありませぬ」

その言いつけに対しても申し分はあるけれども、お松はそれをかれこれと気に留めていられないほど、外のことが気になるのであります。

それにも拘らず、お師匠様なる人は相変らず悠長に構えて、

別に差当つての用事を頼むのではなく、意見を加えがてら、話し相手のお伽ときにするようなあんばいで、

「お前は、まだ知るまいが、あの駒井様という殿様のお家は、近いうちに潰つぶれます、いま甲府では飛ぶ鳥を落すほどの御支配様だけれど、遠からず、お家をつぶされて、お預けになるか、または御切腹……これはまだ内密のことだから誰にも話してはなりませぬ……そうになるとこちらの殿様が、そのあとをついで御支配に御出世なさるようになりまわっている、だからお前も、そのつもりで、うちの殿様のお面かおにかかるようなことをしてはなりませぬ、まあ、じつとして、もう暫らく見ておいで」

と言っているお絹は、何か企たくらむことがあつて、やがてそれが成就じょうじゆした時を楽しみにしているように見えます。その企みというのは、駒井家に、何か重大な変事が出来るだろうとの暗示で推察

することができます。今いう通り、遠からずお家を取りつぶされて、その上に殿様がお預けになるか、または御切腹になるかというほどの大事、お松は、いよいよ胸がつぶれる思いで、この風聞の裏には権力を争う嫉^{ねた}みや罾^{わな}が幾つも幾つもあつて、駒井の殿様はうまうまとその罾にかかつて知らずにおいでなさるということを、お氣の毒に思わないわけにはゆきませんでした。それもあるけれど、差当つてもつと痛切にお松は、外へ出て見なければならぬ必要が迫つております。ところがお師匠様なる人は相変らず、お松を話し相手のつもりにして、べんべんと言話を繰り出し、座を立たせないであります。

「男も女も身分の低い者を相手にしてはなりません。駒井の殿様などは、あの通り男ぶりはお立派であるし、学問はおありなさるし、人品はお高いし、これから若年寄、御老中とどこまで御

出世なさるやら知れないお方でいらつしやるのに、あろうことか身分違いの女を御寵愛になつたために、あたらし生を廃り物すたものにしておしまいなされた、ほんとにお気の毒ともなんとも申し上げようがありません。とは言え、これも身から出た錆さびで、誰をお怨み申そう様もない。お家には堂上方からおいでになつた立派な奥方様を持ちながら、あんな女芸人上りの身分違いの女へお手をかけられたために、御身の上ばかりか、死んだ後までも、御先祖へまでも、恥を与えるようになってしまいました。それにつけてもお前なども、仕合せに堅くて結構だけれども、間違いのないうちに何とかして上げたいと、わたしは常々それを思っています。それ故、今の殿様のお側へはなるたけお前を上げないようにしてあるけれども、いつまでもそうしておられるものではない、わたしもいろいろとお前の身の上を考え

ているうちに、あの御支配の上席の太田筑前守様の奥方が、お前をお側に欲しいとこうおっしゃるから、わたしはどうしようか、今お前を呼んだのは、そのことを相談してみたいから……」

ようやくここへ来て、お松を呼び寄せた相談の緒いとぐちが開かれたのでありました。お松はそれどころではないのであります。お松がソワソワとするのを、これは駒井の邸へ密そつと行きたいからであろうと見て取ったお絹は、わざと話を長くして、意見のよくな、教誡のような、お為ごかしののようなことを言つて、お松に席を立たせまいとするのであります。

お松は針の筵むしろに坐っているようにして、それを聞かされていくけれども、てんで耳へは入りません。ようやくお絹の相談とというのが済んで、お松は解放されました。お辞儀をソコソコにして帰つて見ると、ムク犬はまだ待っていました。そのムクを

先に立てて、お松は裏門から走り出でて見ました。けれどもその時分には、もう宇津木兵馬の姿をいずれのところでも見るこ
とができないで、町の門々や辻々に集まった多くの人が、

「また出た、また出た」

と噪さわいで、お城の方をながめているのを見ました。

お松はその人出のなかを、あれかこれかと尋ね廻りましたけれど、とうとう兵馬の姿を発見することが出来ないので、失望し、ムクを先に立てて、今も行つてならぬと差止められた駒井能登守の邸の方へ、知らず知らず足が向いて行きました。

その間も例の人出は、

「それ出た、また出た」

とお城の方をながめながら罵ののり噪いでいます。これは今宵に限つたことではない、町の人はこの二三日の晩のある一定の時刻に

なると、こうして門並かどなみに立つて、

「それ出た、それ出た」

というのであります。

何が出たのかと言えば、真紅まつかな提灯ちようちんがたった一つ、お城の天守の屋根の天辺てっぺんでクルクル廻っているのです。大方、提灯だろうと思われるけれども、それとも天狗様の玉子かも知れない。もし提灯だとすれば、それを持って、あの高いところまで上る人がなければならぬ。そんなことは誰にだって出来るはずではないのであります。警固の役人がその提灯をみとめると、直ちに取調べに行くのでありますが、天守の上まで登る時分には、もう提灯は消えてしまつて、人の気配などはさらにないのであります。それですから大方、天狗様の卵だろうということに、ほぼ多くの人の意見は一致して、それが毎晩、一定の時を

定めて出て来ると、こうして町中総出の姿で、門並かどなみに立つて見物するのであります。

なるほど、御本丸の天守台の上で、紅い提灯がクルクルと廻つています。お松もやはり、その提灯が何者であるかということ、不思議に思わないわけにゆきません。

人中を歩いて行くうちに人の噂を聞けば、天狗様の卵だというものもあるし、近いうち大火事があるのを、稻荷様が知らせて下さるのだと言う者もあり、また勤番のお侍のうちに、いたずら者があつて、長い竿へ提灯をぶらさげて、町民を驚かして面白がるのだろうと言うものもありました。

けれどもこの提灯をこうして噪いで見ているうちに、市中の到るところを盗賊が荒していたことを知ったのは、その後のことでありました。

そのうちにお松は、ムク犬を先にして駒井家の邸前まで来て考えているうちに、ムク犬にひかされて裏門から邸の中へ入ってしまいました。

ここでもまた、お城の屋根の上の提灯を問題にして、家中かちゅうの侍や足軽などが立って見ていました。

「うちの殿様は、天狗だとか稲荷様だとかいうことをお信じにならぬ、では何でございましょうとお尋ねすると、ただ笑っておいでなさる」

「殿様は鉄砲の名人でいらつしやるから、殿様の狙ねらいで、あれを撃ち落してごらんになれば、直ぐにエ、タイが知れるでござりましょう」

こんなことを話し合っていました。

その中へ入って行つたけれども、ムク犬の附ついていることと、

常に奥へ出入りすることに慣れているお松のことでしたから、
誰も咎めるものはありません。^{とが}

僧体をした宇津木兵馬は、神尾の邸の裏に待っていたけれども、お松に会えない先に、四辺^{あたり}の人が噪ぎ出したので驚きました。それは自分を発見した人があつて噪いだのではないけれども、

「それ提灯^{ちようちん}が出た」

と言う声と共に人が集まる様子だから、うかとそこにおられません。心を残して町の方へ向って行くと、そこでもここでも人が出て、

「それ提灯が出た」

だから兵馬もその人々の見ている方向を見ると、お城の天守

台あたりの屋根の上に赤く一点の火があつて、それがクルクルと廻るのであります。

確かに提灯であろうとは認められるけれども、その提灯ならば何者がどうして、あんなところへ上つたかということが疑問であります。ちまた巷の人々の噂は信ずることが出来ません。

いったん町へ出た兵馬は、どうしたものか再び駒井能登守の邸の後ろへ来てしまつて気がつきました。見上げると、三階になつたところの戸が開かれ、そこから火の洩もれてることが見えます。

あれは能登守が物見のために建てたところで、あの三階へは、能登守自身のほかは登れないことにしてあるのだから、そこで火の光のすることは、まさしく能登守がそこにいて、何事かを調べているのだということがわかります。

それ故、兵馬は懐しく思つて三階の上を暫らく見上げていると、その開かれた戸から人の半身が見えました。それは一見して能登守の姿であることがわかりました。

今、能登守は、そこから面を出してお城の方をながめてゐる。お城の方といえは無論、その天守台の櫓の屋根の上の疑問の提灯の火であります。その提灯の火は、さきほどはクルクルと廻つていましたけれど、今は高いところでブラブラと横に揺れてゐます。

兵馬は三階の上なる能登守と、天守台の上なる疑問の提灯とを興味を以て見比べていました。いったい能登守という人は、妖怪変化を信ずることのない人であるから、あの提灯についてはいかなる解釈を下しているのだらうと、その心持を兵馬は忖度してみないでもありません。

窓から半身を出した能登守は、ややしばらくの間、その疑問の提灯を見定めている様子でありましたが、やがて取り直したと見えるのがまさしく一挺いつちようの鉄砲であります。

「さてこそ」

あれだ、能登守の疑問の提灯に対する解釈はあれだと、兵馬は少なからぬ好奇心を加えました。

能登守は聞ゆる射撃の名人。あの銃口つつさきに提灯の疑問が破られて、同時に、市民の迷信が解かれるのだと、兵馬は頼もしく思つて固唾かたずを飲みました。

鉄砲を取り直して構えた能登守の姿勢は無雑作むぞうさに見えました。

暫らくして轟然ごうぜんと一発！

兵馬は天守台の櫓やぐらの屋根の上から、疑問の提灯が切つて落したように真一文字に直下するのを見ました。

しかも直下する途中で提灯の体へ火がついたから、一団の火の玉が九仞きゅうじんの底に落つるような光景を、兵馬はめざましく見物しました。おそらく、ほかの市中の人もそれをめざましく見物したでしょう。

五

その翌日、城中の御番所で勤番の総寄合そうよりあいがありました。

月に少なくとも一度はある詰合つめあいでありましたけれど、その日の寄合は、特に念入りの寄合ということであります。

御老中が見えるということもあるし、また御老中の名代みようだいに、

駿府すんぷの御城代が立寄るといふ噂うわさもあるし、それらの接待の準備

や、また先日の流鏑馬やぶさめの催しについての跡始末やなにかの相談

もあるのです。駒井能登守も無論、その総寄合に立会わねばならない。それでお供の者はお供の用意を整えて、主人のお出ましを待つていました。

ここに訝いぶかしいことは、まだお君の方が今朝から枕を上げないことであります。殿様の御出仕には、いつも人手を借らずにお世話を申し上げる寵愛ちようあいのお君が、どうしたものか今朝は気分が悪いというて、能登守の前へ姿を現わすことをしませんでした。それだから能登守は、ほかの女中の手によつて世話をされながら、

「どこが悪いのじゃ」
と訊たずねました。

「どこがお悪いのでございますか、急に……」
と言つて、訊ねられた女中も、お君の方の病氣の程度を知らな

いものようであります。

能登守はそれを物足らず思い、また事実、お君の病気が甚だ軽いものでなかうとういうことを心配しながら、出仕の時間に迫られて邸を出ました。

この日の詰合には、当番も非番もみな集まるのでしたから、追手おうちの門は賑わいました。二の丸の下にある御番所の大広間は、これらの詰合でいっぱいになりました。能登守の一行も御番所へ着いた時分には、大方その席が満ちていました。上席の太田筑前守もまた別席に休憩して、会議の開かれる時刻を待っていました。御番所というのは、大手の門を入ると少しばかり行つたところの左手にあります。その右は二の丸で、後ろは楽屋がくやくるわ曲輪、表門の左右にはお長屋があり、お長屋の前には腰掛があつて、足輕が固めていました。

能登守はこの御番所の表門から入つて、お長屋へお供を待たせて、刀を提げて玄関へかかりました。出迎えの者は、いつもするように上役に対する礼儀を尽して能登守を迎えました。これは今日に始まつたことではないけれど、なぜか能登守はこの時に胸騒ぎがしました。一種の不安な気持がヒヤリと能登守の胸を刺して、玄関の大障子に何か暗い色が漂うているように見えたから、それで能登守はなんとなく胸騒ぎがしたのであります。

思い返してみるとその不安は、今朝に限つてお君の姿を見せなかつたことから起る心配の変形であると弁解ができないではありません。ああ、出がけに一度、お君の病状を見舞つてやればよかつた、今日はここへ医者も詰めているはずだから、それを急に見舞に遣^{つか}わそうというようにすることを思いながら、能登守

は刀を提げて大広間へ進み入ると、五百人足らず集まつた勤番のいづれもが能登守に対して、上役の出席という敬意を表したけれども、その席の上のいづれかに、やはり冷たい色が漂うように見えて、まだ能登守の胸騒ぎが止まりませんでした。

これより先、この席の一隅で問題になつていたものがあります。それは一つの壊れた赤い提灯であります。

その提灯は壊れた上に、大半は焼けてしまつていました。それを手から手に渡して、しきりに話し合つていましたところへ能登守が見えたので、その話も止みました。その時分にどういうつもりか、右の焼けて壊れた提灯は、この席でも上の方にいる神尾主膳の手に渡つて、留保されるもののように膝の上に載せられます。

やがて太田筑前守も出席するし、それと並んで駒井能登守、

そのほか組頭や奉行の面々以下、勤番の人までが、それぞれ順序によつてその大広間に居流れて、やがて会議が始まりました。筑前守が席の長者で一通りの挨拶があり、駒井能登守もまた、それに次いで両支配の訓示様のことから会議が開かれ、各組頭や奉行の報告様のことで無事に進行し、その間はいつもする会議の通り極めて月並なもので、末席の連中はしびれを切らせ、あくびを噛み殺していました。

訓示と報告とが一通り済んだ時分、もうこれで散会になるだろうと、しびれを切らしたり、あくびを噛み殺していた連中がホッと息を吐いた時分、

「御支配並びに列座のおのおの方」

と甲走かんぽしった声が聞えました。誰の発言かと見れば、それは焼けて壊れた提灯を膝の上に載せていた神尾主膳の口から出たもので

あります。神尾の面付かおつきの緊張しているのと、その発言の甲走つていふことによつて察すれば、何かこの男が緊急動議を提出するものらしい。

「神尾殿」

と言つて議長ぶりの太田筑前守が主膳の名を呼び、その言わんとするところを言わせようと催促しました。

「ちとお聞きづらいことのようにではござるが、言わんとして言わでやむは武士の本意でない、その上に、このことは甲府城を預かる我々一統の面目にもかかることと存ずる故、この席で両支配並びに列座のおのおの方の御所存を承りたい」

神尾の意気込みは烈しいのに、太田筑前守はそれをさのみ気には留めないようであります。駒井能登守は神尾の気色けしきのただならぬのと、それから武士の面目呼ばわりをすることが穏かで

ないのを、上席の筑前守が応対しないから自分で引受けて、
「我々一同の面目にかかるというののは一大事、何事かは存ぜね
ど、神尾殿の御腹藏なき御意見が承りたい」
と言いました。

能登守からこう言われて主膳は、さもこそという面付かおつきで、膝
の上にさいぜんから後生大事に保管していた焼け残りの提灯を
取り上げました。

「近頃、この甲府城の内外は甚だ物騒なことでござる、城下の
町々で辻斬がほしいままに行われるかと思えば、破牢の大罪人
があつて人心を騒おがす、その辻斬の曲者くせものも未だ行方が判然せず、
破牢の重なる罪人は影も形もなし、これ我々を在おもつて無きが如
く致す者共の振舞。その以前、御金藏の金子きんずが紛失致したとや
ら、その盗賊の詮議せんぎも今以て埒らちが明かず。あれと言いいこれと言

い、不祥^{ふしょうせんばん}千万。

その上に、このごろは毎夜の通り、この天守台の上に提灯が現われる、心なき町民どもは天狗魔物の為す業^{わざ}と申しおれど、これ以て人間の為せし悪戯^{いたずら}、我々を愚弄するにも程のあつたもの。余^よのことは扱^{さて}置き、まず天守台の提灯から御詮議あつて然るべく存じ申す」

神尾主膳は、焼けた提灯を捻^{ひね}くり廻しながらこう言いました。

神尾主膳のこの発言は無遠慮に聞えました。列座の誰をも不愉快に感じさせましたけれど、その言うことには筋道がありました。神尾がいま並べたようなことは、その一つがあつても、役人の重き越度^{おちど}と言わなければなりません。神尾とてもその責めを分つべき勤番のうちの上席の方の身分でありながら、それをこの席へ持ち出すということは、あまりに無遠慮であると思ひました。

太田筑前守がそれを抑おさえないのも気の知れないことだと眼を睜みはるものもありました。駒井能登守は主膳の無遠慮な発言を聞いて、やはり沈黙していました。

そうすると神尾主膳は、先程はやや甲走かんぱしつていた声がようやく落着いて、提灯を枷かせに使いながら、一人舞台のように主張をはじめてしまいました。

「まさしく何者かがあつて、この提灯を夜な夜な天守の上へ掲げて我々を愚弄したものと相見える、奇怪千万のことと申さねばならぬ、この用捨し難き悪戯は、何者の手によつて為されたかきつと訊たださねばならぬ。しかし、これと言うも末のこと、斯か様に我々を愚弄致すものがあるのは、つまり上うえが悪い、上の風儀が乱れているが故に、下これを侮あなどる、まず以て上の士風から正さねば相成るまい、上に立つ者の風儀が乱れていては、いくら

それぞれの係の者が骨を折つたからとて所詮無益、一向に人のしめしにはならぬ、かえつていよいよ輕侮けいぶを加えるのみじゃ、まず以て上流の風儀が肝腎かんじん」

と言つて神尾主膳は、駒井能登守を尻目にかけるようにしました。これは、いよいよ無遠慮な言い分に相違ないことであります。

上流の士風というようなことを、別人ならぬ神尾主膳の口から聞くことは、淫婦の口から貞操が説かれ、折助の口から仁義が論ぜらるるようなものであるけれど、それにしても、この席で神尾の上流としては、太田筑前守と駒井能登守があるくらいのものであります。これらの上席をそこへ置いて、こんなことを言うのは、この上もなき礼を失した言語挙動であります。神尾とても、そのくらいの礼儀わきまを弁えない男ではなからうけれど、

それを満座の中でかく主張するからには、やはり例の通り、何かの魂胆があることと見なければならぬのであります。

神尾の言い分も怪^けしからんものであるけれど、それをまた抑えようとも咎^{とが}めようとしないう太田筑前守の座長ぶりもまた、気の知れないものであります。筑前守の態度は、神尾に言うだけのことを言わせてしまおうという態度のように見えることでもあります。その無礼と無作法とを黙認していることのように見えることであります。

筑前守のこの煮え切らない座長ぶりは、自然に神尾の無作法^{たしな}を嗜める責任が駒井能登守の手に落ちて来るようになりました。上席の責任上、こういうことを神尾一人に言わしておくのは、その威厳にもかかるし、列席の不愉快を招くことが大きいのであります。やむことなく駒井能登守が、神尾主膳^{やおもて}の矢表に立つ

ことになりました。

「神尾殿、貴殿の御意見は一応御尤もなれど、それではどうやらこの甲府城内の上流の者に、風儀を乱すものがあるように聞えて甚だ聞苦しい、角の立たぬように、御意見のあるところだけを述べて欲しいものじゃ」

駒井能登守からこういわれたのを機会に、神尾主膳は、能登守の方へ向いて正面を切りました。

「これは御支配の駒井殿、お言葉ながら拙者は元来、礼に嫻わぬ男、つついとお氣に触るようなことを申さぬとも限らぬ、これというも城内の士分の風儀を重んずる心から致すこと、別意あつてのことではござらぬ、お咎めを蒙つた上流の者のよくない風儀ということにも、ちと心当りあればこそ申すこと、これを大目に見逃しては、旗本の名誉が地に落つる……」

「それは聞捨てになり難い」

神尾主膳からこう挑戦的に出られてみると、駒井能登守も意気込まないわけにはゆきません。

こうして引き出されて神尾の手に載せられることは、能登守にとつては極めて不利益なのはわかつているが、私の場合においては避けて避けられることも、こうなつては避けられないのであります。

「いかにも聞捨てになり難いことでござる」

神尾主膳は膝を進ませました。

列席の人々は、意外の光景になつて行くのを見ました。駒井能登守対神尾主膳の取組みのような形になつて行くのを見ました。神尾が、能登守の上席に対して不平であつて、事毎にそれに楯を突こうとするの形勢は、大抵の勤番は知っていました。能

登守がまたそれに相手にならず、つと勉めて避けている態度を、奥床おくゆかしいともはがゆ齒痒いとも見ている人もありました。しかし、公おおやけの席で、こんなふうまともに正面にぶつかりそうになる形勢は初めて見ることであります。ことに今日は神尾主膳から仕掛けて行つて、敵を引張り出そうとする形勢がありあり歴々と見えるから、能登守のためひそに密かに心配する者もありました。それを太田筑前守がなんとも言わないのは、いよいよ以て怪けしからんことです。両々共に騎虎の場合になつて退引のつびきならないのでありますから、この時に、太田筑前守がなんとか言つて調停しさえすれば、とにかく鶴の一声でこの場は納まるべきはずであります。それを無言だまつてゐる筑前守の気が知れないのであります。

筑前守が調停しないものを、それ以下の者が口を出すわけにはゆきません。それを神尾はいよいよ得意になつて、

「列席のおのおの方にもさだめてお聞きづらいことでござろうけれど、さいぜんも申す通り、これを聞捨てに致し見捨てに致す時は、我々旗本の名誉が地に落つる、それ故、言い難きを忍んで申し上げる、おのおのにもお聞きづらきを忍んでお聞き下されたい。さて、御支配、駒井殿、ここでそれを申しても苦しうござりますまいか」

「勿論のこと、旗本の名誉が地に落つるというほどの重大事ならば、誰に遠慮も要らぬ、明白に承りたい」

「しからば申し上げます、近頃、この城中の重き役人にて、身分違いの女を愛する者があるやに専らもつぱらの噂」

「なんと申さるる」

「身分違いの女子を寵愛ちようあいして、妻妾さいしやうの位に置くものがあるや
ら」

「ははは、何事かと思えば家庭の小事、そのようなことはこの席に持ち出すべきものでござるまい」

と言つて駒井能登守は、笑つてその言いがかりを打消そうとしましたが、神尾主膳は冷笑を以てそれに酬むくいました。

「その人にとつては家庭の小事か知らねど、武士の体面よりすれば、なかなか小事ではござらぬ。いかにおのおの方に承りたい、たとえば旗本の身分の者が、仮りにほいと、賤人の女を取つて妻妾となし、それにうつつを抜かして世の人に後ろ指ささるるようなことがあらば、それが家庭の小事で済まされようや、また左様な人物が上に立つ時に、いかで下々の侮しめりがなくて済もうや、これが一大事でなければ、もはや武士とほいと、賤人との区別はない、士風の根本が崩れ申す」

神尾主膳は、駒井能登守の面を見つめました。「これでもか」

という表情と冷笑と、それから勝ち誇つたような下劣な得意とを満面に漲^{みなぎ}らせていました。

列席の者は、神尾の言い分の道理あるやなきやの問題ではなく、その言うことに不快を感じて座に堪えられないようなものもありました。駒井能登守は神尾にこう言われて、一時沈黙して眼をつぶりしました。企^{たく}んだな！　とこう思つて駒井能登守のために同情し、神尾の挙動を悪^{にく}む者も少なくはありません。

確かにこれは駒井能登守が窮地に陥つたなと、予^{かね}ての噂を聞いてゐる者は、ひとごとながら見てはいられない氣の毒の感じを起したのも少なくはありません。

この場合、能登守を救うのは、誰よりも先に太田筑前守の義務でなければならぬ。今まで神尾にこういうことを言わせて置いたことでさえが緩慢の至りであるのに、ここでなお黙つてい

て能登守の急を救わなければ、それは武士の情けを知らないのみならず、寧ろ神尾と腹を合せて、神尾をして充分に能登守を弾劾させようとする策略があると言われても申しわけがありません。それでも、やはり筑前守は知らぬまねして、神尾の一言一句にも干渉することをしませんでした。

一座は白け渡つてしまいました。その中には、眼の色を変えて能登守のために、神尾に飛びかかるという権幕のものも見えました。また神尾の言うことを小気味よしとして、能登守が窮したのを内心快くながめている者もあるようです。

一時沈黙して眼を閉じていた駒井能登守は、やがて眼を開きました。

「神尾殿、近ごろ苦々しき噂をお聞き申す、しかしともかくそれは一大事。して左様な噂を立てられた人物というのは何者に

や、してまたその人物が寵愛するという身分違いの女子おなごの素性すじようというのはいかなる者にや、その辺を委くわしくお聞き申したい、それらの者の姓名もお包みなく、これにてお明かし下されたい」能登守の声は、少しばかり顫ふるえを帯びていたようであります。けれども終しまいはキツパリとして、神尾主膳の面を篤とくと見つめながら言葉も色も動きませんでした。

「それは申し上げぬが花と存じ申す。しかしながら、言い出した拙者の面目、軽々しく世上の根無ねなし言ごとを、この公けの席へ持ち出したとあつては迷惑、それ故、噂は噂として、その噂の中より拙者の見届けた真実だけを申し上げる。拙者がまだ当地へ参らぬ以前のこと、伊勢の国の大神宮へ参拝致した、その途中、かあいの山やまと申すところに、名物のお杉お玉と申すものがおつて、三味ひを弾ひいて歌をうたい、客の投げ与うる錢を乞うていた、そ

のお杉お玉両女のうち、お玉と申すのがことのほか姿容きりようがよい、それによく間の山節よという歌をうたい申す、拙者つれづれも旅の徒然ひなに、右のお玉を旅宿に招よんで歌を聞き申した、なるほど姿は鄙ひなに珍らしい、その歌も哀れに悲しい歌で涙を催した。しかるに近頃思いがけなくもこの甲州の土地へ来て、全く思いがけぬところでそのお玉という女子を見申した。それはただいま現在に、この甲府でさる重い役人の寵愛ちようあいを受けているということを知り、いよいよ思いがけない思いを致した。おのおの方、そのお玉という者をいかなる素性の女子と思召す、姿こそ美しけれ、歌こそ上手なれ、それは彼地かのちにてほい、とというて人交りのならぬ身分の者、一夜泊りの旅人さえも容易に相手に致さぬ者を、知らぬ土地とはいえ、この甲府へ来て、あの出世うし、氏のうして玉の輿こしとはよく言うたもの。ただし女は出世で済まそうとも、済ま

ぬは我々旗本の身分、ほいと、賤人を寵愛して閨ねやの伽とぎをさせるはすなわちほいと、賤人に落ちたも同然、もし我々同族のうちに、左様な人物がありとすれば、同席さえも汚けがれではござるまいか。左様なことはないことを望む、左様な人物はあつてはならぬけれど、左様な人物あるがために士風を汚し、庶民あなどりの侮を買うような仕儀に到らば打捨てては置かれまい、よし一人の私情は忍び難くとも、流れ清き徳川の旗本の面目のために……」

主膳は今日を晴れとこんなことを絶叫しました。能登守は静じつ粛として聞いていたけれども、座中にはもう聞くに堪えない者が多くなつて、雲行きが穏かでないのを、太田筑前守が、この時になつてようやく調停がましき口を利き出しました。

今ごろになつて調停がましい口を利き出すなぞは、かなりばかばかしいことであります。

気の毒なことに駒井能登守は、すっかり彼等が企みの罠わなにかかってしまいました。ここに至るまでには一から十まで企みに企んであつた仕掛を、能登守は一つも覚さとることなくしてこの場に身を置くようになったのは、返す返すも気の毒なことであります。

太田筑前守は程よくこの会議を切上げる挨拶を述べ、神尾主膳は勝ち誇つた態度で揚々と座を立ち、そのほか集まる人々がおおかた席を退いたけれども、駒井能登守は柱に凭もたれ腕組みをして俯向うつむいていました。

すべての人が席を退いたあとで、能登守はそこを立ち上りました。その時に面色かおいろは蒼ざめていました。足許がよろよろするのを、辛からうじて刀を杖にして立つたように見えました。さすがにこの人とても非常なる心の動揺を鎮めるのに、多少の苦しみ

を外へ現わさないではいられないでしょう。それでも玄関へ出た時分には、なにげない面色で家来たちを安心させました。お供の家来たちは、不幸にして主人の受けた恥辱と、その心中の苦痛を知らないであります。

こんなわけで、能登守の乗物は無事に邸へ帰るのは帰ったけれど、その時になつて大きな騒ぎが起りました。主人が御番所において受けた容易ならぬ恥辱を、お供の者が知らない先に、邸へ知らせたものがありました。そこで家老とお供頭ともがしらとの間に、烈しい口論がありました。口論ではなく家老がお供の者たちを罵ののしつて、

「腰抜け！ たわけ者！ ナゼその場で神尾主膳を討つて取らぬ、その場で討つことが叶かなわずば、途中においてナゼ神尾主膳の同列へ斬り込んで討死をせぬ、よくもおめおめとお供をして

帰つて来られたものじゃ」

家老のお叱りにあつて、お供の者は一言もないのであります。家老のお叱りそのものが何を意味するのだから合点することができませんでした。

これは無理のないことで、たとえば毒を飲まされた時に、飲まされた本人が黙つて堪^{こら}えている以上は、外から見て、その苦痛や惨烈の程度がわからないのはあたりまえのことであります。

駒井家の邸内は沸騰しました。これから神尾主膳の邸へ斬り込まんとする殺氣が立ちました。それを厳しく押えた能登守は、追つて自分の沙汰^{さた}するところを待てと言つて、例の研究室へ入つてしまいました。その邸内がこんなに混雑したのみならず、この噂は城下一般に燃え立ちました。駒井能登守の家来が、今にも神尾主膳の屋敷へ斬り込んで来るという噂が立ちました。神

尾の屋敷では、それこそ面白い、そうなれば能登守が恥の上塗り、見事、斬り込んで来るなら来てみるという意気込みで、人を集めて待ちうけました。

その附近の家々では家財道具を押片附けて、今にも戦争が始まるかのように慌^{あわ}てるものもありました。しかし、その形跡がないうちに、またも噂が立ちました。

「駒井能登守が自殺した」

という噂が立つと、神尾家の者共は、それ見たことかと得意満面でありました。まもなく自殺は嘘で、心中だ！ という噂も立ちました。そうだろう、心中だろう、相手がよいからそんなことだろうと言って、また笑ったり囃^{はや}したりしました。

ところが、それらの噂はみんな嘘で、能登守は相変らず研究室^{こも}へ籠^{こも}って大砲の研究をしていると言うものもあつて、何が何

だかわからなくなりました。

邸の中はひつそりしていましたが、邸の外は囂々ごうごうとして上も下もこの噂で持切りでありました。このことからして、能登守の信望は地を払ってしまいました。

能登守に幾分か同情を持っている者は、お君という女が、人交りのならぬ分際の者でありながら、素性すじようを包んで能登守を騙たぶらかし、それを窮地に陥れたことを、悪むにくべき女、横着の女であるとし、それをうかと信用して疑わなかったのは、つまりは能登守の宏量こうりようなる所以ゆえんであつて、罪は一いっにお君にあるように言っていました。

つまりその宏量というのは世間を知らないということ、どのみち素性を隠してお妾になろうというほどの女だから、旨いうま物を食つて、いい着物を着せて貰いさえすれば、殿様であらう

と、折助であろうと、誰でも相手にする女郎と同じことの女を寵愛してお部屋様に引上げ、それがために家門を潰すつぶようなことにまでなるのは、お気の毒とは言いながら、よつぽどおめでたく出来ている殿様だと口穢くちぎたなく罵る者もありました。殊に例の折助社会に至つては、こんなことは待つていましたという程に喜ばしい出来事で、あらゆる醜陋しゅうろうと下劣の言葉で、皮肉と嘲弄の材料にしてみました。

こんな塩梅あんばいで、士分の間にも、町民の間にも、能登守に同情を寄せる者は一人もなくなつてしまいました。内心は同情を寄せる者があつても、それを口にする则自分もまたほい、とであり賤人であるかの如くさげすまれるのが辛いから、御多分に洩れず口々に、能登守の行いを汚らわしいものとして罵つていました。見かけ倒しの惚いのろ殿様だといつて、世間の口の端はに調子を

合わせては笑い物にするのが多いのであります。

能登守の邸はその当座閉門同様です。なんでもあの席から帰つたあとへ、若年寄からの伝達があつて、不日、能登守は江戸へ呼びつけられるのだということです。

それでいま頻りに邸内の整理をし、暇を遣わすべき家来たちには暇を遣わし、引次ぐべき事務は引次ぎ、邸外へ送り出すべき荷物は毎日送り出して、頻りに始末を急いでいるのだということであります。それで、いよいよひつそりしている邸内の模様にはひきかえて、外の評判は刻一刻に高まつて行くのであります。その評判を煽るあおるのは神尾主膳の一派であるらしく、汚らわしい者を妾にかかえたのみならず、破牢の罪人を隠匿かくまつて逃がしてやつたり、甚だしいのは盗賊を出没させて城中城下から金を盗ませ、それをひそかに蓄えて、他日この甲府を根城に、事

を起す時の軍用金として準備しているというようなことまで言
い触らす者があります。

神尾主膳は、あれだけでは飽き足らないで、あらゆる流言を
放つてこの機会に、駒井能登守というものを士民の間の憎悪と
怨府えんぶとにしてしまおうという策略のように見えました。

この策略が凶に当って、駒井能登守は逆賊の片割れであり、
屠者賤民の保護者であるように思われてきました。

能登守の邸の中へ、外から石が降りはじめたのは、いくらも経
たないうちのことであります。その石の雨が一晚毎に殖ふえてゆ
きました。それでも能登守の屋敷内はなぜかひつそりしたもの
でありましたから、いい気になって石の雨が昼も邸の中へ降つ
て来る有様とまでなつてしまします。

夜はようやく人が出て面白半分に石や瓦を投げ込むのであり

ます。そうして聞くに堪えない罵詈譎ばりざんぼうを加えては哄どつと鬨ときの声を揚げる有様は、まるで一揆いっきのような有様でありました。

しかし、遠巻きにしてこんな乱暴を加えるだけで、誰も近づいては来ませんでした。それはこの邸には大砲というものがあるし、また主人の能登守は無双の鉄砲上手であるということが、怖れの重なる理由であるらしい。おも

そうしてゐるうちにある日、駒井家の門が八文字に開きました。そこから威勢よく馬を乗り出したのは、例の通り筒袖の羽織に陣笠をいただいた駒井能登守でありました。

それに従うた家来が十人ばかり、いずれも徒歩かちでありました。この一行は勢いよく表門を乗り出して、八日市通りを東に向つて練り出しました。

それと氣のついた者は早くも立ち出でて、

「御支配が江戸へお引上げになる」

といつて騒ぎました。騒いだけれども、一行の威風に吞まれて、夜陰^{やいん}屋敷へ来てするように罵ったり、石を投げたりする者はなく、ただ一種異様の眼を以て見送っているうちに、馬蹄^{ばてい}の音は消えて、一行は早くも甲府の城下を去ってしまいました。

一行の姿が見えなくなつてから、また噂^{かまひす}は喧しくなりました。

ああしてこの甲府から引上げた能登守は、問題のあの身分ちがいのお部屋様というのを、どう処分なされたのだろうということが評判の種とならずにはいません。

そのうちに恐ろしい噂が立ちました。

それはお部屋様のお君が自害してしまつたという噂と、殿様のお手討に遭^あつてしまつたという二説であります。自害説よりは、お手討説の方が有力でありました。

駒井能登守はその立退きに當つて、寵愛のお君の方を斬つて二つにし、井戸へ投げ込んで立去られたと、見て来たように言う者もありました。そうではない、家臣の者がお君の方を刺し殺して、井戸へ投げ込んで引上げたのだという者もありました。

ともかく、すべての者にお暇が出て、そのうちの一部の者は殿様がつれてお引上げになるうちに、ついにお君という女がどうなつたかは、誰もその行方ゆくえを知るものがありません。ことにその行方を知りたがつて細作しのびをこしらえておく神尾派の者までが、ついにその消息を知ることができませんでした。

総て知れたがつていることがわからないのだから、それさまさまの揣摩しまと臆測とが、まことのようにならされて来るのはもつとものことであります。

そこで駒井能登守の屋敷は實際上の明家あきやとなつてしまい、筑

前守の手に暫らく預かることになりました。二三の番人が置かれることになったけれども、その番人が夜になると淋さびしがつてたまりません。

「お化けが出る」

という噂が、またパツと立ちはじめました。そのお化けを見たものがあるのだそうです。一人や二人でなく、幾人もそのお化けをみたという人が出て来ました。

その説明によると、お化けは若い美しい凄いお化けで、手に三味線を持つているということです。

それが肩先を斬られて血みどろになって、井戸の中から出て来て、屋敷をさがし歩いては泣くということです。であります。

人の口くちの端はというものは、それからそれと枝葉が出るもので、能登守が馬に乗って門を出た時に、若い女の姿が真白な着物を

着て、烟のようになつて、能登守の馬のあとから追つて行つたのを見たという者まで出ました。

その当座は、またまたその樽で持切りで、能登守の屋敷あとは、金箔付の化物屋敷にされてしまい、そのお君の方を斬り込んだと伝えられる井戸は固く封ぜられ、ついにはその屋敷の前を通る者さえ少なくなりました。

宇治山田の米友がこの噂を聞いたらどうだろう——そう言え
ば、袖切坂下で下駄を持ちあつたあの男は、今どうしてい
る。

六

わが親愛なる宇治山田の米友は、袖切坂で拾つたお角の下駄

を持ちあつかつて、一里の間も二里の間も持ち歩いていました。いつまでもその下駄を持つて歩いたところで仕方がないから、ついに笛吹川の上流にあたつて、とある淵の中へ思い切つてその下駄を投げ込んでしまいました。

それから米友は大菩薩峠に登りにかかりました。

例の跛足びっこを俊敏な体と手慣れた杖とに乗せて、苦もなく峠に登つて、やがて大菩薩峠の頂に着きました。

頂上には妙見やしろの社があつて、その左の方に二間に三間ぐらいの作事小屋さくじこやがあります。

「やれやれ」

作事小屋には、誰か仕事をしかけて置いてあるらしく、切石がいくつも転がつて、石鑿いしのみなども放り出されてありました。

石工いしくの坐つたと思われるところの蓆むしろの上へ米友は坐り込んで、

背中の風呂敷から、お角の家でこしらえてもらつた竹の皮包の胡麻ごまのついた握飯むすびを取り出して、眼を円くしていましたが、やがてパクリと一口に頬張りました。

握飯は大きなのが五つ拵こしらえてありました。それですから米友が、いま一つ頬張つてムシヤムシヤ喰つていると、竹の皮包の中には四つ残るのであります。

その大きなのを一つ食べてしまつてから、米友は峠の下から汲んで来た竹筒の水を取つて飲みました。それからまた握飯を一つ取つて頬張りました。それを食べてしまうと、また竹筒の水を取つて飲みました。三つ目の握飯を米友が食べてしまつた時に、惜しいことには竹筒の中の水を飲みつくしてしまいました。これは握飯の塩が利き過ぎていたせいか、或いは米友の咽喉が乾き過ぎていたせいか知らないが、ともかく、米友として

は少し飲み過ぎた傾きがないではありません。

胡麻のついた握飯は、まだあとに二個残っているものであります。それなのに水は早や尽きてしまいました。それは米友でなくとも、山路を旅して腹の減った時分に、握飯を囓るほどおいしいものはおそらくこの世になかるうはずのものであります。まして小兵ながら健啖な米友が、この場合に五箇の握飯を三箇だけ食べて、あとを残すというようなことがあるうとも思われませんのです。けれども水は尽きてしまいました。

「ちよッ、水がなくなつてしまやがつた」

しばらく思案していた米友は、さいぜん登つて来る路のつい近いところで、水の流れる音を聞いたことを思い出しました。それを思い出すと竹筒を取り上げて、杖なしで、さっさと峠道を少しばかり下りて行きました。それは竹筒へ水を汲まんがた

めであることは察するまでもありません。

この小説の、いちばん最初の時に、巡礼の姿であつたお松という少女が、これと同じようなことを、これと同じところで繰返していたのであります。その時の少女は、老人の巡礼につれられていましたけれど、今の米友はたった一人であることと、その時のお松は瓢箪ひょうたんへ水を汲みに行つたけれど、今の米友は竹筒かつを持つて行つたことが、違えば違うようなものです。

曾てお松が、この下の黄金沢こがねざわの清水を瓢箪に満たして、欣欣せいせいとして帰つて来たその間に、連れの老巡礼は見るも無惨な最期さいごを遂げていました。

それらの出来事は、いつこう米友の知つたことではありません。米友もまた、期せずして前にお松が汲んだらうと思われるあたりの沢の清水を竹筒に満たして、欣欣として、もとのところ

ろへ帰つて来たけれど、そこにはなんらの意外な変事も起つていた模様も見えません。

「おや」

なんらの変事もないと思つたのは、米友がこの峠を初めての旅人であつたからであります。竹筒を持つて作事小屋の中へ入つた時までは気がつかなくつたけれど、そこへ来て見ると、今の米友にとってはかなり重大な変事が起つてゐることを知りました。

「握飯むすびがねえや」

五箇いつつ

箇の握飯のうち三箇を食べてしまつて、あと二箇を残して

おいたことは紛れもなき事実であります。その二箇とても、なにも嫌いやで残したわけではない、食べたくて食べたくてたまらないのだけれど、それをなるべくうまく食べようと思つて、わざ

わざと途中で休んで水を汲みに行つたものであります。その取つて置きの二箇の握飯、しかも胡麻ごまのついた大きなのが、わずかの間に消えてなくなつていたのだから、さすがの米友も力を落さないわけにはゆきません。

しかし、米友きしやうの氣象として、一時は力を落しても、そのまま引込んでゐることはできないのであります。

「太え奴だ、誰が盗とりやがつた、人の大切な胡麻のついた握飯むすびを盗んだ奴はどこにゐる、こつちは嫌で残しておいたんじやねえや、これから水を一杯いっぺい飲みながら、旨うまく食べようと思つて取つて置いたんだ、それを持主に黙つて盗つた奴はどこにゐる、遠くへ逃げる隙があるわけでねえから、どこかそこらにいやがるんだらう、この堂の中か、堂の後ろあたりに隠れていやがるだらう、やい、人の大切な胡麻のついた握飯むすびを盗つた奴はどこに

いる、ここへ出て来い」

米友は眼をクルクルして堂の中や、堂の後ろを見廻したけれども、人の気配は無いのであります。それで米友も、怒ってはみたけれど、拍子抜けのようでもあり、自分ながら解げせないのがあります。人通りの多かるべきところでもないこの山路で、こんなにすばしっこく握飯を掠かすめられようとは、米友としても思い設けぬことでもあり、ことにその傍には、ほかに荷物を入れた風呂敷包もあれば、笠や杖もあるのに、それらには眼も触れないで、握飯だけを取って行ってしまったのは、よほど食辛棒くいしんぼうの泥棒か、そうでなければ、飢えに迫つての旅人の仕業しわざとしか思われないのであります。そのいずれにしても、この僅かの間にそれをせしめるというのは、敏捷を以て誇りとする米友には、癪しやくな芸当であると思ひましたから、米友は、一旦は怒って、そ

れから後は空しく竹の皮の亡骸を見つめて思案に暮れていました。
むな
なきがら

米友はじつと腕組みをして思案に暮れている時に、頭の上の栗の大樹の梢で、

「キヤツキヤツ」

という声。米友が頭を上げるとその大樹の幹に、一群の動物がいることを知りました。

「畜生、こいつら、手前たちの仕業だな」
てめえ

米友はそれを見るより勃然として怒りました。見上げる栗の大樹の梢にたかっている一群の動物は猿であります。その猿どもが、大切の胡麻のついた握り飯を持って、それを一口食っては米友に見せ、二口食っては米友に見せているのであります。それからほかの猿はまた尻を米友の方へ向けてバタバタ叩いた

り、木の枝を揺ゆつたりして、しきりに米友に向つて挑戦をするらしいのであります。

「畜生！」

米友は齒はがみ嚙くをしました。僅かの間に畜生どもにばかにされたかと思うと、米友の氣象ではたまらないのであります。直ちに手慣れた杖を取り上げましたけれど、不幸にして彼等はあまり高いところにいるのであります。さすが手練の米友の槍も、距離においてどうすることもできません。

「よし、こん畜生！」

米友は杖を捨てて石を拾いました。拾った時、石はすでに空くうを飛んでいました。

その覗ねらいは過つことなく、米友が石を拾ったかと思うと、ほとんど一緒に、

「キヤッ」

と叫ぶ声が樹の上でして、^{どう}擋という音が米友の足許でしました。
「こん畜生」

その時、米友は一匹の大猿の首筋を後ろからギュウと抑えて、膝の下へ組み敷きました。抑えられた猿は苦しさに絶叫したけれど、浅ましいことに、胡麻のついた握飯を^{むすび}その手から放すことではありません。

「手前たちは憎らしい畜生だ」

と言つて米友は、猿の頭を二つ三つぶんなぐりました。猿は殺されることかと思つて、苦叫絶叫して悶^も掻いたけれど、米友は懲^こらしめるだけで、事実殺す気はなかつたものらしくあります。少しばかり懲らしめて突つ放してやるつもりで、二ツ三ツぶんなぐつたのを、当の猿は殺されるのだらうと思つて、あらん限

りの絶叫をしました。

そうすると樹の上に見ていた猿どもが、バラバラと樹から飛んで下り、一様にキャツキャツと物凄い叫びを立てました。

その物凄い叫びを聞くと、どこにいたか知れない無数の猿が、谷から谷、樹から樹を潜^{くぐ}つて、続々として走^はせ集まつて来ました。その面の色は、いずれも物凄い色をして眼を剥^むき出し、白い歯を剥き出して、丸くなつて米友をめぐめて襲いかかつて来ました。

米友は猿を怖れるものではありませんでしたけれど、その数の多いのを見ては驚かないわけにはゆきません。そうして彼等の面^{つら}が、いずれも獰^{どうあく}悪な色を現わしていることを見て取らないわけにはゆきませんでした。

「この奴ら、俺^{おい}らに手向えをするつもりだな。こん畜生」

正直な米友はまた、この猿どもの不遜な挙動を憎まないわけにはゆかないのであります。人の物を盗んでおきながら、その懲らしめを怖れずにかえって反抗し来るとは、身の程知らぬ猿どもだと思つてムキになりました。

それで米友は、抑えつけていた大猿の頭を、一つガンと食わせました。大猿はギューと言つて息が絶えた様子であります。その時に猛り立つた群猿は、八方から一時に米友をめがけて飛びかかりました。

「猪口才ちよこざいな、こん畜生め」

米友はその大猿を片手で掴んで群猿の中へ投げ込んで、例の手慣れた杖槍おつとを押取りました。

「こいつら！」

その杖槍を縦横に打振ると、猿どもはバタバタとひっくり返つ

たり飛び散ったりするが、直ぐにまたその後から後から後詰^{ごづめ}が出で来るのであります。或る者は木の上へ登つてそこから木の枝を投げおろしました。或る者は妙見の社や作事小屋へ登つて石ころの雨を降らせました。米友はその杖槍をりゅうりゅうと揮^{ふる}つて、その傍へ猿どもを寄せつけないのであつたけれど、この騒ぎと猿どもの絶叫を聞いて、附近の山々谷々から続々と集まつて来る猿の数の夥^{おびただ}しいことと、その面色^{めんしょく}の穏かならぬことにはいよいよ驚かないわけにはゆかないのであります。

「こうなりや、一匹残らず突殺してやるから覚えていやがれ」
米友はとうとうその杖槍に、しかと穂先を穿^はめました。それを下段に構えて、当るところのものを幸い、一匹残らず槍玉に揚げて、峠の谷を埋めてやろうと決心しました。

多勢^{たの}を恃^{たの}む猿どもはいよいよ驕慢^{きょうまん}でありました。けれど伶俐^{れいり}

な彼等は、いつも相手の實力を見るのに鋭敏でありました。ですから米友はギラギラ光る穂先を杖の先に上げて、一匹残らずという手強い決心をしたのを見て取って、急いで木の上や、堂の上や、作事小屋の上へ飛び上り、そこから眼を丸くし、齒を剥き出して、米友を睨めてキャツキャツと叫んでいます。

満山の猿は、米友一人を遠巻きに押取おつとり囲んでしまいました。

米友が少しでも隙を見せれば、彼等は一度にドツと押包んで、取って食おうというような形勢であります。

單身を以てすれば猿に劣らぬ俊敏な米友も、こう多数を相手にしては、ドレを目当に懲こらしていいか、わからないのであります。それで米友は齒はが噛みをしました。

かわいそうに米友も、畜類を相手にして立竦たちすくんでしまわねばならなくなりました。

この時、どこからともなく、

「ホーイホーイ」

という声。猿どもがキャツキャツと言っている中で、その声は、はじめは米友の耳へ入りませんでした。つづいて、

「ホーイホーイ」

という声。それが耳に入つたのは米友より先に、米友を取囲んだ猿どもであります。

「ホーイホーイ」

その時に、米友も風の声かと思いました。

「ホーイホーイ」

人間の声であることは紛れもないのであります。人ならば三十人の声でありましょう。それが何人なにびとであつて何のためにする声だかわかりません。こちらへ来る人の声であるか、または

どこかへ一団ひとかたまりになつてゐる人々の声であるかもよくわかりませんでしたが、

「ホーイホーイ」

という声がようやく聞え出して来た時に猿どもが、遽にわかにどよめき出したことがよくわかります。

米友の気象としては、敢あえてこの猿どもを相手に取ることに置いて、人の加勢を願おうとは思わないのであります。それだから人の声がしたからとて、それに助けを得たとは思われたいないのであります。人が来ようが来まいが、こうなつた上は一匹残らずこの傲慢不遜ごうまんふそんな猿どもを退治てやらなければ、虫がおさまらないと思つてゐるのであります。ただどこから形かたをつけていいか、余りにその数が多いことによつて、戸惑いをしてゐるのに過ぎないのであります。

「ホーイホーイ」

その声は相変らず、遠くもなく近くもなく、纏まとまつて響いて来るのであります。猿どもは米友を睨めると共に、しきりにその声のする方を気にしているようです。

そのうちにどうしたものか、猿どもの陣形が忽ち崩れ出しました。ひとたび陣形が崩れ出すと共に、畜生の浅ましきであろう、今までの擬勢が一時に摧くだけて、我勝ちに逃げ出しはじめました。その崩れたのと逃げ足との、あまりに慌あわただしいのは、米友をして呆あっけ氣に取らせるほどでありました。

「ホーイホーイ」

その声が敢て近寄ったというわけでもありませんのに。だから米友も少しく拍子抜けの体ていでいた時分に、やや離れたところへ大きなものが一つ現われました。

「こんちは、ずいぶんいい天気でございますねえ」

その大きなものは、米友とかなり隔たつたところにいながら、
こう言つて米友に挨拶しました。

「いい天気だよ」

米友もまた仏頂面ぶつちようづらで返事はしましたけれども、その大きな物
体を、なんとなく間抜けた男だと思わないわけにはゆきません。
なぜならばその大きな男は、牛みたような体格をしている上に、
面つきつらがいかにも暢気のんきらしく、その上に、自分でいい天気だと
言いながら、この昼日中のいい天気たいまつに、松明の大きなのに火を
つけて携えているのですから、かなり間抜け野郎だと米友は見
て取つてしまいました。

なおその上に間抜けなことは、背中に大きな石地藏を一つ
背負しょつていることで、それを背負しょつてウンウン唸りながら、こ

ここまで登つて来たと思われる御苦労さであります。

「こんにちは」

その大きな物体は、今、背中の石地藏を作事小屋の中へ運び入れて、台の上へ寝かしておいてから、額の汗を拭き拭きまた米友の前へ来て、二度目に、こんにちは、と言いました。

「こんにちは」

米友もまた妙な面かおをして、この男に挨拶を返しました。

「お前さんは、この峠をお通りなさるのは初めてでござんすべえ」

と間拔けた男がニコニコしながら、米友にこう言いました。

「ああ、初めてだよ」

「だからお前さん、猿におどかさねなすつたのだ」

「ほんとに憎い畜生よ」

米友の余憤は容易に去らないのであります。

「何か猿が悪戯いたずらをしましたかね」

「俺おいらがここに置いた、胡麻ごまのついた握飯むすびを盗んで行きやがった」

「それをお前さんが調戯からかいなすつたんでございましょう。だから猿がああして、仲間をつれて来て嚇おどかすんでございますよ」

「人をばかにしてやがる」

「ナ―ニ、猿だつてそんなに悪い者じゃありませんねえよ」

この男は、なにげなき体ていでニコニコしていることが、米友には幾分か癪にさわらないではありません。この米友をさえ怖れなかつた猿どもが、この間抜けた男が来たために逃げ出したとすれば、米友の沽券こけんにかかわらないという限りはない。米友は自分の実力でこの猿どもを懲らすことができないで、外来の人

から追つ払つてもらつて、それでようやく危急を逃れたといふように見られることは心外でしょう。それですから米友は、よいなお世話と言わぬばかりの面をして、大きな男を睨めました。

「猿を追つ払うには、力づくではいけねえのでございますよ。初めての人は、この松明が**たいまつ**いちばんいいのでございますよ、松脂でもいいのでございますよ、猿は人間よりか火の方を怖がりますから、こうして火を持って歩くと、傍へ寄れねえのでございます。だからここを通る旅の人は、みんな松明を用心しているのでございますが、お前さんはそのことをお知りなさらねえから、それで猿がああして集まつて来たのでございましょうよ」

「なるほど」

この説明を聞いて米友は、なるほどと合点がてんしました。これに

よつて見れば猿が逃げたのは、自分の実力よりもこの大男の実力を怖れたからではなく、全く火を持っているのといないのとの相違で、人物の如何いかんにはかかわらないのだという保証がついたようなものだから、それで米友はいくらか安心しました。そうしてみると、このよい天氣に松明をつけて来たということが必ずしも間抜けではなく、それを間抜けと見た自分の無智であるということ悟らないわけにはゆきませんでした。そう悟つてみると、この男がいま背中へ背負しよつて来た大きな石の地藏尊に、大した重味があることに気がついて、どこから背負つて来たか知らないが、ともかく、この石の地藏尊を背中につけて、この難渋な峠を登りつめたものとすれば、この大男の力量の測り知るべからざることに、今となつて舌を捲かないわけにはゆかないのであります。

「こりやなにかえ、お前が、この地藏様をなにかえ、下から背負い上げたのかえ」

「エエ、左様でございますよ」

「一人で背負い上げたのかえ」

「エへへ」

「うーん」

米友は唸^{うな}つて、その地藏様と大男とを見比べました。米友は四尺足らずの精悍^{せいかん}な小男であるのに、その男は牛のような大男で、それで年は自分と同じぐらいに見れば見られないこともないので、まだ前髪があるといえはあります。

米友も、自分の力においては自負しているところがあるつもりだけれど、この地藏様を背負^{おぼ}つて、この六里の嶮道を越えるということとは、残念ながら覚束^{おぼつか}ないことであります。第一、自

分の身の丈が許さないのであります。それですから、

「うーん」

と唸つて、大男の面を見つめていました。

「お前はなかなか力がある。それでなにかい、槍も使えるのかい」

「槍？」

大男は妙なことを言うと思つて、米友の面を見ました。

「そうさ、力はあるつても、槍を自由に使いこなすことはできないだろう」

「そんなことはできねえでございます、槍だの、剣術だのというものは、俺にはできねえでございます」

「そうだろう、こりやなかなか生れつきなんだからな、力ばかりあつたつて、上手に使えるというわけのものでねえんだ」

力の分量においてこの大男に及ばないことを自覚しかけた米友は、技わざにおいて優れていることを自負しようとしているもののようにあります。

「お前さんはこれからどっちへおいでなさるんだね」

大男は力や槍や剣術のことには取合わないで、米友のこれから行くべき方向をたずねるのでありました。

「俺おいらか、俺らはこれから江戸へ行こうというんだ」

「江戸へ。そうしてどっちからおいでなすつたのだね」

「甲州から来たんだ」

「そうでございますか、それでは俺も、これから武州路を帰るのでございますから、一緒にお伴ともをして帰りましょう」

「そりや有難え」

「ホーイホーイ」

「何だい、先からあの声は」

「猪ししが畑を荒すから、それを村方で追っ払っているのをござんすべえ」

この大男が、沢井の水車番の与八であることは申すまでもありませんです。

与八が背負つて来たお地蔵様は、いつぞや東妙和尚が手ずから刻んだお地蔵様であることも、推察するに難くないことです。

肥大なる与八と、短小なる米友が打連れて歩くところは、当人たちは至極無事のつもりだけれど、他目よそめで見ればかなりの奇観を呈しているものでありました。与八の歩くのは牛のようでありましたけれども、しかも大股でありました。米友の走るのは二十日鼠のようであつて、しかも跛足びっこなのであります。与八を煙

草入とすれば、米友はその根付のようなものであります。与八を三味線とすれば、米友はその撥ばちみたようなものです。もしまた与八をお供餅そなえもちとすれば、米友は団子みたようなものであります。与八を猪八戒ちよはつかいとして、米友を孫悟空そんごくうに見立てることは、やや巧者な見立て方であるけれど、与八は八戒よりも大きく、米友は悟空よりも小さいくらいの比較でなければなりません。

「お前、江戸に親類があるって？」

悟空がたずねました。

「俺の親類は下谷にあるんでございます」

八戒が答える。

「下谷？ 俺らもその下谷へ訪ねて行こうと思うんだが、下谷はどこだい」

悟空が再びたずねました。

「下谷は長者町というところなんでございますよ」

八戒は念入りに再び答える。

「おや、下谷の長者町。俺らのこれから尋ねて行こうというところもやっぱりその下谷の長者町なんだが」

「そうでございますか、お前さんもその長者町に親類がおありなさるんでございますか」

「親類というわけじゃねえんだけど、ちつとばかり世話になつた人があるんだ」

「そうでございますか。そうしてお前さんの訪ねておいでなさるお家の商売は何でございますね」

「商売は医者だ」

「おやおや、俺の親類もお医者さんでございますよ」

「何だつて。お前も同じ町内の同じお医者さん、それで名は何

というお医者さんだい」

「道庵先生」

「道庵先生だつて」

「そうでございますよ」

「俺らの尋ねて行くのもその道庵先生の許もとなんだ」

与八と米友とは偶然、その訪ねようとする目的の家を一つにしました。与八と米友はここで初対面のようでありましたけれど、実は初対面ではないのであります。

前に一度、対面は済んでいたのであります。しかしその対面は与八もそれを知らず、米友もまたそれを知らないものであります。与八はその時に米友を日本人として見てはいませんでした。米友もまたその時の見物にこの人があつたことは覚えていゝるはずがありません。それを知るものは道庵先生ばかりであり

ます。この兩人は途中の話頭わとうによつて、おたがいに行く先の暗合を奇なりとして驚きました。

それから山路を歩く間、二人の会話を聞いていると、かなり人間離れのした受け渡しがあるのであります。

七

恵林寺えりんじの僧堂では、若い雲水たちが集つて雑談ふけに耽つておりました。彼等とても、真面目まじめな経文や禅学の話ばかりはしていません。夜になつてこうして面かおを合せた時には、思い切つて人間味のありそうな話に興を湧かすのであります。人間味というのは、なにも色恋の沙汰ばかりではないけれども、ここでは特にそうなるのであります。

嚴肅な僧堂生活の反動というわけではない。彼等とても強健な身体からだに青年の血を湛たたえているのですから、そんな話に興味を起すことは無理もないのであります。それも話に興味を起すだけでは満足ができないで、事実においてこれらの連中には、垣根を越えて寺の外へ迷い出すものが少なくないのであります。

そうして附近の遊廓や茶屋小屋へこつそりと遊びに行ったり、土地の女たちに通ったりする者がありません。それをする時に体ていよく組を別けて、一組は留守を守り、一組は垣根を越えて行くのであります。こうして外へ迷い出して歩くものを、彼等の仲間で亡者もうじやと呼んでいました。

これらを取締るのは例の慢心和尚の役目であります。けれどもあの和尚は、弟子どもがこんな人間味を味わいはじめたのを、まだ知らない様子であります。或いは知つていてもこの和尚は、

それを大目に見ているのかとも思われたいではありません。或いはあの通り図々しい和尚のことだから、遣^やれ遣^やれ、若いうちはウンと遣^やつてみるがいい、なんかと言つて蔭で奨励しているのだかも知れません。しかし、苟^{いやし}くも宗門の師家^{しけ}としてそんなことがあるはずはありません。たとえ若氣^{わかげ}の至りとは言いなから、雲水たちの一部に、こんな人間味が行われはじめたということを知つた以上は、和尚として儼^{げんこ}乎^こたる処置を取ることでありましょう。

この晩、右の若い雲水たちは、またも垣根を越えはじめました。垣根を越える時には、留守の当番に當つた者が、垣根の下に立つのであります。外へ迷い出す者は、その留守の当番に當つた者の肩を踏台にして、垣根を乗り越えることになつてゐるのであります。もしその踏台の背が低い時には、肩でなく頭へ足

を載せて乗り越えるのであります。今宵またその通りにして、五人の若い雲水が垣根を乗り越えました。踏台になった雲水は、明晩は自分の当番だということを楽しみにして帰り、その五人の者の寢床を、さも本物であるように拵こしらえておきました。そうして自分は蒲団ふとんの中に潜り込んで休みながら、こんなことを考えていました。

「このごろ、向岳寺の尼寺へ、素敵べつびんな別嬪が来たとか来ないとか言つて仲間の者共が騒いでいるが、ほんとに来たものだから来ないものだから、その辺はとんと疑問じゃ、よしよし明晩は行つて、おれが見届けてやる、見届けたところで、どうしようというわけではない、俗人どものように張つてみようとか、振られて帰ろうとかいうような、そんなケチりようけんな了簡で見届けに行くのではない、これも修業のためである、僧堂の中で慢心和尚の出鱈目でたらめ

を聞いているばかりが修業ではない、和尚来れば和尚きた、美人来れば美人……」

こんなことをひとりで考え込んで力んでいるとその時、オホンという咳が聞えました。この咳は確かに慢心和尚の咳でありました。それを聞いた若い雲水はハツとして、ひとり言の気焰ほくそえと北叟笑みとが消えてしまいました。和尚来れば和尚……と言つて力んではいたけれど、その咳の声だけで縮み上ったところを見ると、美人が来ればやつぱり魂を抜かれてしまうでありましょう。そこでこの雲水は気焰と独り笑いとをやめて、蒲団を頭かぶから被かつているうちに、昼の疲れでグッスリと寝込んでしまいました。

寝込んでしまつてはいけないのです。実は迷い出した五人の亡者が戻るまで眠らないでいて、戻った合図を聞いた時には、

また踏台として出て行かねばならぬ義務があるのであります。それを忘れて寝込んでしまいました。

かくとも知らず、迷い出でた五人の亡者は、立戻つて来て垣根の外へ立ちました。

合図にトントンと垣根を叩くと案あんの定じょう、中からもトントンと垣根を叩いて答えます。

外にいた亡者は、仲間の者の肩を踏台にして中へ入ると、中にまた踏台が待ち構えています。

第一に乗り越えたものが、足を卸おろして、中にいる踏台の肩を踏もうとして、勝手を間違えて頭を踏台にしてしまいました。これは間違つたと思つたけれども横着な心が出て、そのまま両足を頭へ載せてしまいました。下になつた踏台はそれでも別に不平は言わないのであります。なぜならば明晩は、自分が同じよう

にして人の頭を踏台にすることができるとのだから、鎌倉権五郎かまくらごんごろうのような野暮やばを言うものではありません。

しかし、この頭は踏台としてはあまりに円くありました。坊主の頭に円くないのは無いようなものだけでも、それにしてもあまりにまる過ぎたから、危なくツルツルとすべりそうなのを、たい体を転じて辛くも飛び下りました。

第二の亡者はそれでも幸いに肩を踏んで無事に入りました。第三のはまたツルツルした頭を踏台にして、第一と同じように危なく飛び下りました。そのほか、第四、第五も、肩を踏台にしたり頭を踏台にしたりして、ともかく迷い出でた五人の亡者は、また無事に寺へ舞い戻ったのであります。

もちろん勿論、これは深更のことであり、また秘密の行いでありますから、極めて物静かに行われたのであります。外から来た亡者

はもとより口を利か^きず、中にいた踏台もまた一言半句を言わな
いで、あちらを向いて従容^{しやうよう}として踏台の役目を果してしまつた
のであります。

そうして彼等は無言のうちに寢室へと急ぎ、踏台もまた、い
つか知らない間にどこへか片づいてしまいました。広い寺の境
内は森閑として、静かなものになつてしまいました。

ここに寢室へ帰つて来た五人の亡者が、ハツと度胆^{どきも}を抜かれ
た出来事が一つありました。今、ここで雷のような轟^{いびき}をかいて
口をあいて寝ている雲水は、たしかにいま踏台になつたはずの
雲水なのであります。明晩は亡者となつて迷い歩くべき権利の
保留者であつて、今晩は踏台となるべき義務者なのであります。
たつたいま踏台となつた男が、自分たちより先廻りをして、も
うここに轟をかいて口をあいて寝ているということは、悪戯^{いたずら}に

してもあまりに敏捷な悪戯でありました。ましてそれは悪戯ではなく、事実そこに今まで寝込んでいたものと見るよりほかはないのでありましたから、五人の亡者は面を見合せて、なんとなく気味の悪い思い入れであります。

この踏台がここに寝込んでいたのなら、今の踏台は何者であつたろうと、彼等は言わず語らず、その踏台を訝りました。

「おい愚藏^{ぐぞう}、起きろ」

と言つて揺り起すと、

「うーん」

と言つて眼を醒ますと共に、

「あつ、失敗^{しま}つた！」

と言つて匆起^{はねお}きました。自分が踏台となるべき義務を忘れて寝込んでしまった怠慢を、さすがに慚愧^{ざんき}に堪えないものと見えて、

その周章^{あわ}て方は尋常ではありませんでした。しかし五人の亡者が踏台無しに帰ってみれば、やはり解^げせないのは同じことで、誰か自分に代つて踏台になった者があると思ふなければなりません。

もとより当番であるとは言いながら、踏台となることは歓迎されていなかったのであります。なるべくならば踏台となる義務^{まぬか}だけを免れて、亡者となる権利だけを持つていたいというのが人情であります。人の亡者株を奪つてさえやりたいという世の中に、自分から進んで踏台を引受ける者があるうとは、それはあまりに殊勝な振舞と言わなければなりません。

六人は、ここで面^{かお}を見合せたが、そのとき思ひ出したのは、道理でその頭の^{すべ}り方が少し変であつたわいというくらいのもので、別にその殊勝なる踏台の何者であるかを考えてみるまで

に至らずに、寝込んでしまいました。

その翌日の定刻に、慢心和尚は講義をするといつて、例の二三冊の振仮名ふりがなの書物を持ち出しましたけれど、その本を開かないで、円い頭をツルリと一撫でして、細い目でジロリと席を見渡しました。

「愚藏ぐぞう、連十れんじゅう、英翁えいおう、甲論こうろん、乙伯おつはく、この頭をよく見てくれ」

と言い出したから、集まった雲水たちは今更のように慢心和尚の面を見ました。和尚の面も頭も、いつも見慣れている頭や面であるけれど、そう言われて見れば見るほど円いものであります。和尚はその円い頭を撫でながら、細い眼で一座の連中を見廻して、ニヤリニヤリと笑っているのです。そうすると、

「あつ！」

席の一隅に、思わず、あつ！ と叫んで面色かおいろを変えたものが

六人ありました。この六人は、あつ！　と言つて面の色を変えて、我を忘れて和尚と同じように、自分たちの頭を撫でました。

「オホホ」

と慢心和尚は面白そうに笑いました。この和尚の、オホホという笑い方は、にやりこふし握拳を口の中へ入れるのと同じように、余人に真似のできない愛嬌がある。

「あつ！」と言つて自分たちの頭を撫で廻している六人というのは、そのうちの五人は昨夜の亡者であつて、他の一人はその亡者の踏台となるべき義務を怠つた雲水でありました。

「オホホ」

和尚は再び笑いました。六人の顔色はいよいよ土のようでありました。自分たちの円い頭をやけ自暴になつて撫で廻しているけれど、その円さにおいて、とうてい慢心和尚に匹敵するもので

はありません。

そうすると和尚は、妙な手つきをはじめてしまいました。それは両手を幽霊でも出たように上の方からぶらさげて、自分の円い頭の上へ持つて来て、そこでツルリと^{すべ}こらしてみるのであります。それも一度でよせばよいのに、ゆっくりゆっくりやって、二度も三度も同じことを繰返して、

「オホホ」

と笑うのであります。やりきれないのは五人の亡者と一人の踏台でありました。もうたくさんだと思つてゐるのに、意地のよくない慢心和尚は、五度も六度も繰返すのだから真にたまらないのであります。

こうして六人の人間は、やりきれない土壇場^{どたんば}に迫つて、九死一生の思いをしているのに、ほかの連中は一向そのことを解す

ることができませんでした。これはお師家しけさんが何か深甚の意味を寓ぐうするために、手真似を以て公案を示しているのだと解する者もありました。

俱胝ぐてい和尚は指を豎たて、趙州じょうしゅう和尚は柏かしわの樹を指さしたということだから、慢心和尚がああして幽霊のような手つきをして、自分の円い頭を込こらしているところに、三世十方さんぜじつぽうを坐断する活作略かつざりやくがあるのではなからうか。これは一番、骨を折らずばなるまいと、汗水を流して本気になって、慢心和尚の妙な手つきをなめながら唸うなっている真面目な修業者もありました。

「オホホ」

ようやくのことで、慢心和尚はその妙な手つきをやめてしまいました。五人の亡者と一人の踏台はホツと息を吐つきました。

「さあ、お前たち、これができるようになったら、裏口から忍

んで出るには及ばない、大手を振って山門を突き抜けて通るがよいぞ」

と言いながら、和尚はその拳を固めて、あなやと見ているまにその拳を、ポカリと口の中へ入れて見せました。

これには一同、

「あつ！」

と言つて驚きました。

八

昨晚、踏台の身代りになつたのは、この慢心和尚であつたことを、いま思い出しても遅いのであります。師家の頭を踏台にして迷い帰つた亡者こそ、いい面つらの皮でありました。けれども、

このことからして、亡者がお寺から迷い出すことがなくなつてしまつたのは、これ慢心和尚の道力どうりきと申すべきものでありましよう。

迷い出すことだけは、ピッタリととまつたけれども、若い雲水たちの間に、その都度つど噂に上るのは、向岳寺の尼寺のことでもあります。向岳寺の尼寺へ、非常に美しい新尼にいあまが来たということを、誰がいつのまに見たのか聞いたのか、そのことが善き意味にも悪しき意味にも、話の種に上つて来るのであります。

その向岳寺の新尼とは何者！ それよりも先に、向岳寺の尼寺というものの存在を説く必要があります。

向岳寺の開山は、拔隊ばつすいぜんじ禪師、臨濟宗りんざいしゅうのうちにも拔隊流の本山であります。そのの尼寺を開いたのは赤松入道円心の息女であるということです。

播磨^{はりま}の国赤松入道円心の息女、その姫の名は何というたかわからぬ。また一説には入道円心の娘ではなくその孫であると。ともかくもその当時において屈指の大名であつた赤松家の息女が、尼となることを志したのは、よくよくの事情があつたことであろうが、その事情もよくわかりません。

この寺へ訪ねて来て、抜隊禅師に出家の願いを申し出でたところが、その願いを聞いた禅師は、「出家は大丈夫のこと、女なんぞは思いも寄らぬ」と言いました。

けれどもこの姫の決心は強いものでありました。そこで花のように美しい面^{かお}へ、無惨にも我れと焼^{やき}鑊^{くわく}を当てて焼いてしまいました。その強い決心にめでて禅師も、ついに姫の尼となる望みを許したということであります。その赤松の息女の歌として伝えられるのに、

おもて
面をば恨みてぞ焼くしほの山

あまの煙と人はいふらん

その赤松の姫君がこの尼寺の開基ということであります。それは南北時代のことであるから、かなり時が経っています。

今の庵主は五十許ばかりの品のよい老女で、この老女がこの頃になつて何か胸に思い余ることがありげに、しきりに心を苦しめてゐるのが、そう思つて見れば他目よそめにも見えます。

老尼の住んでゐる庵いおりは、昔から伝えられた名をそのままに燈外庵と呼ばれていました。珠数じゆずを爪繰つまぐりながら老尼が燈外庵の庵を出ようとすると、若い尼が、

「御庵主様、いずれへおいであそばします」と尋ねました。

「はい、わしはこれから、ちよつと恵林寺まで行つて参ります

る」

「左様でございますか、お供を致しましょうか」

「それには及びませぬ……しかし、曾光尼、そこうにあの、わしが留守の間をよく気をつけて給れ」たも

老尼は若い尼の耳に口をつけて何をか囁くと、ささや

「かしこ畏まりました、だいじお大切に行つておいであそばしませ」

そのあと、この若い尼は池の傍に立つて鯉を見ているけれども、心は鯉にあるのではなく、老庵主から頼まれた何者かの見守りに当るらしくありました。

暫らくした時に、池に向いた方の書院の障子がスラスラと開きました。その開いた間から見えるのは、やはり若い尼で、しかもこちらにいる若い尼さんよりも一層美しいものでありました。頭のかぎりを下ろした尼さんとは見えません。頭巾ずきんを被つ

ていた頬のあたりへ鬢びんの毛のほつれが見えます。永い尼寺生活をした寂しい人ではなく、まだ色香のこぼれるような美しい人であります。

その姿を見ると、池のほとりの尼は手を振って何か合図をすると、せつかく開きかけた障子を閉めて、再び姿を現わすことをしませんでした。この美しい尼ならぬ尼は、駒井能登守おもいものの寵者のお君の方かたであります。お君は、恵林寺へ寄進の長持と見せて、その中へ入れられてここまで送り届けられたものであります。しかもその送り届けられた後まで、お君はそのことを知りませんでした。

お君は、あの晩に、お松の口から思い切った忠告を聞いて、お松が帰ったあとで咽喉のどを突いて自殺しようと思いました。それは老女の手によって止められましたけれど、その後のお君は、気

が狂うたと思われるばかりであります。

その物狂わしさが静まった時分に、お君は死んでいました。自殺したのではなく、誰かの手で死なされていました。誰かの手、それはおそらく駒井能登守の手でありましょう。能登守は、老女に言いつけて、物狂わしいお君の息の根を止めさせたものと思われます。何かの薬を与えて、それによつてお君は殺されていきました。

お君が再び我に帰ったのはこの尼寺へ着いた後のことで、自分分は寄進物の長持の中へ入れられて、ここに送られたということともその後に庵主から聞かされました。

慢心和尚が、宇津木兵馬を呼んで、

「お前さんに一つ頼みがある」

兵馬は一旦この坊主から腹を立てさせられましたが、今になつてみると腹も立たないのがこの坊主です。何の頼みかと思つて聞いていると、

「向岳寺の尼寺から、八幡村の江曾原えそはらまで人を送つてもらいたい」

ということですよ。なおその人というのは何者であるかを兵馬に尋ねられない先に、和尚が語つて聞かせるところによると、

「向岳寺の燈外庵へこのごろ泊つた若い婦人がある、燈外庵の庵主は、その若い婦人を預かるには預かつたけれども始末に困っている——尼寺というところは、罪を犯した女でも、一旦そこへ身を投じた以上は誰も指をさすことはできないのだが、その尼寺でもてあましている女というのは……実は、お前さんだから話すが身重みおもになつてゐる——」

ということであります。和尚は真面目でありました。

「それじやによつて、尼寺でも始末に困る、あの寺でお産をさせるわけにはゆかない、よつてどこぞへ預けるところはないかと、わしがところへ相談に来た、そこで、わしが思い当つたことは、この八幡村の江曾原に小泉という家がある、そこへその女を連れて行つて預けるのだが……」

と言われて兵馬は奇異なる思いをしました。八幡村の小泉は、もとの自分の縁家である。ここへ来る時も思い出のかかつた家である。今その家の名をこの和尚の口から聞き、しかも身重の女を守護してその家を訪ねよと請^こわ^るることは、兵馬にとつて奇異なる思いをせずにはいられないのであります。

「小泉の主人が、いつぞやわしのところへ来て、和尚様、悪い女のために戒名を一つ附けてやつて下さいというから、わしは、

かいみよう

よしよし、悪い女ならば悪女大姉あくじよだいしとつけてやろうと言うたら、有難うございます、そんなら悪女大姉とつけていただきますと言つて帰つた、その悪女大姉の家へ、また悪女を一人送り込むというのも因縁いんねんじゃ。この役はほかの者ではつとまらぬ、お前さんでなくてはつとまらぬ」

兵馬は、いよいよ奇異なる思いをして、とかくの返事に迷いましたけれど、思い切つて承知をしました。

「よろしうございます、たしかにお引受け致します」

「有難い。では、夜分よいになつて、八幡まではそんなに遠くもないところだから、宵よいの口に行つて戻るがよい。しかし、聞くところによるとその女はなかなか曰いわくつきの女で、おまけに別嬪べっぴんさんだそうだから、甲府あたりから狼が二三匹さんついていとうことだから、その辺はお前さんもよく気をつけてな」

と念を押しました。

兵馬が委細を承つて、やはり例の僧形そうぎようで、恵林寺から向岳寺へ向つて行つたのは、その日の宵の口であります。

まもなく一挺の駕籠かごが向岳寺から出て、僧形の宇津木兵馬はその駕籠に附添うて寺の門を出て行くのを見ました。

宇津木兵馬はその駕籠を守つて、差出さしでの磯いそにさしかかります。ここへ来た時分には、月が皎々こうこうと上つていました。

差出の磯の亀甲橋きつこうばしというのはかなりに長い橋であります。下を流れるのは笛吹川であります。行手には亀甲岩そびが高く聳えて、その下は松原続きであります。

なるほど、耳を澄ますと、どこかで千鳥が鳴くような心持がします。亀甲橋へ渡りかかった時に、

「右や左のお旦那様」

兵馬はその声を聞流しにする。駕籠屋も無論そんな者には取合わないで行くと、

「右や左のお旦那様」

また一人、菰こもをかぶつて橋の欄干らんかんの下から物哀れな声を出しました。兵馬も駕籠舁かごかきもそんな者にはいよいよ取合わないでいるうちに、またしても、

「右や左のお旦那様」

橋の両側に菰をかぶつたのが幾人もいて、通りかかる兵馬の一行を見てしきりに物哀れな声を出す。

「もうし、たよりの無い者でござりまする、もうし、もうし」
菰を刎はね退けて一人が、駕籠の前へ立ちふさがった体ていは、尋常とは見られません。

兵馬は、手に突いていた金剛杖を、ズツと立ち塞がる怪しい

お菰こもの前へ突き出しました。

それが合図となつたのか、今まで前後に菰を被っていたのが、一時に刎はね起きました。

「何をする」

兵馬はその金剛杖を振り上げました。

「その駕籠をこちらへ渡せ」

菰を刎ねのけたのを見れば、それは乞食体の者ではありません。
ん。それぞれ用心して来たらしい仲間ちゅうげんてい体のものでありました。

委細を知らない兵馬は、和尚が自分を選んで附けたのは、こんな場合のことであるなと思つたから、

「エイ」

と言つて金剛杖で、先に進んだ一人を苦もなく打ち倒しました。

「この坊主」

兵馬の手並を知つてか知らないでか、怪しの悪者はバラバラと組みついて来ました。

「エイ、無礼な奴」

兵馬は身をかわして、組みついて来るのを発矢^{はつしはつし}発矢と左右へ打ち倒しました。それは兵馬の働きとして敢て苦しいことではなく、彼等を打つことは、大地を打つと同じことに、それをかわすのは、縄飛びの遊びをするのと大して変つたことはありません。

驚いて逃げ足をした駕籠^{かご}舁^{かき}も、兵馬の手並に心強く、息杖^{いきづえ}を振^{ふる}つて加勢するくらいになつたから、悪者どもは命からがら逃げ出し、或いは橋の下の河原へ落ちて、這^{ほう}々^{ほう}の体^{てい}で逃げ散つてしまいました。

それから兵馬は、駕籠の先に立つて行手の方をうかがうと、

その時分に向うから、また橋を渡つて来る人影のあることを認めました。

駕籠屋を励まして長蛇のような亀甲橋を渡り切ろうとすると、左は高い岩で、右は松原から差出の磯の河原につづくのであります。月は中空に円く澄んでいました。向うから歩いて来るのは僅かに一個ひとつだけの人影であります。

「少々……物をお尋ね申したいが」

笠を深く被かぶつて両刀を差して、袴はかまを着けて足を固めたまだ若い侍さむらい体の人、おそらく兵馬より若かろうと思われるほどの形でもあり、姿でもあり、またその声は、女かと思われるほどに優しい響きを持つておりました。

「はい」

兵馬はたちどまりました。駕籠はここもち足を緩めただけ

で進んで行きました。

「あの、七里村の恵林寺と申すのはいずれでござりましょうな」
「恵林寺は、これを真直ぐに進んで行き、塩山駅へ出で、再び
尋ねてみられるがよい、大きな寺ゆえ、直ぐに知れ申す」

「それは忝かたじけのうござる」

若い侍は一礼して通り過ぎました。兵馬はその声が、なんとなく覚えのあるような声だと耳に留まつたけれど、自分は近頃、あの年ばえの友達を持った覚えがありません。

「雲水様」

駕籠屋が兵馬を呼びかけました。

「何だ」

「今のあの旅の若いお侍は、ありや何だとお思いなさる」

「何でもなからう、やはり旅の若い侍」

「ところが違いますね」

「何が違う」

「何が違うと言ったって雲水様、こちららは商売柄でござんすから、その足どりを一目見れば見当がつくんでございます」

「うむ、何と見当をつけた」

「左様でござんすねえ、ありや女でござんすぜ、雲水様」

「女だ？」

「左様でございますよ、男の姿をしているけれども、あの足つきはありや男じゃあございません、たしかに女が男の姿をして逃げ出したものでございますねえ」

「なるほど」

「当人はすっかり化^ばけたつもりでも、見る奴が見れば、一眼でそれと見破られちまうんでござんす。これから大方、江戸表へ

でも落ちようというんでございましょうが、道中筋で飛んでもねえ目に会わされるのは鏡にかけて見るようだ」

「なるほど」

兵馬は、さすがに駕籠屋が商売柄で、物を見ることの早いのに感心をし、そう言われてみると言葉の端々はしはしにも、男とは思われないようなものがあることを思い出して、長蛇のような亀甲橋を振返って、その後ろ姿を見送ります。

兵馬はその後ろ姿を見送って、異様な心を起しました。

橋を渡り終って松原へかかると、駕籠屋はまた不意に悸きよつとしました。

松林の中で焚火をしている者があります。焚火の炎が見えないほどに、幾人かの人焚火の周囲まわりに群がっていて、それが今まで一言も物を言わなかったというのは、まさしく人を待ち構

えているものと見なさなければなりません。それですから駕籠屋は、ギョツとして立ち竦すくみました。

しかし、宇津木兵馬はそのことあるのを前から感づいて、

「構わず、ズンズン遣やつてくれ」

と駕籠屋を促うながしました。

「おい、その駕籠、待つてくれ」

果して焚火の周囲から声がかかります。

「構わずやれ」

兵馬は小さな声で、またも駕籠屋を促しました。

「おい、待たねえか」

「何用じゃ」

「その駕籠の主は何の誰だか、名乗つて通つて貰いてえ」

「無礼千万、其方そのほうたちに名乗るべき筋はない」

「そつちで名乗るがいやならこつちから名乗つて聞かせようか、その駕籠の中身は女であらう」

「女であらうと男であらうと、其方どもの知つたことではない。駕籠屋、早くやれ」

「おつと、おつと、ただは通さねえ、ほかでもねえが、その女をこつちへ温和おとなしく返してもらわなければ、お前たちにちつと痛い目を見せるんだ。向岳寺の尼寺から送り出して行く先はどこだか知らねえが、ここへかかると綱を張つて、附たもといて来た坊主の手並がどのくらいのものやら、さつき向うの橋の袂たもとでちよつと小手調べをやらせたが、あれがこつちの本芸だと思つて大間違ひ。さあさあ、痛い目をしないうちに、早く渡したり、渡したり」

憎にくい奴等」

兵馬は金剛杖を握り締めると、彼等はバラバラと焚火の傍から走り出して、兵馬を取囲みました。兵馬は金剛杖を揮^{ふる}つて、駕籠をめがけて来る曲^{くせもの}者を発矢^{はつし}と打ち、つづいてかかる悪者の眉^{みけん}間を突いて突き倒し、返す金剛杖で縦横に打ち払いました。この悪者どもは、たしかこのあたりに住む博徒の群れか、或いは渡り仲間の質^{ちゆうげん}のよくない者共と思われまゝです。

兵馬は、やはりそれらを相手にすることに、さして苦しみはありませんでした。片手に打振る金剛杖で思うままに彼等を打ち倒し、突き倒すことは寧ろ面白いほどでありました。

けれども、本文通り……敵は大勢であつて、これをいつまでも相手に争うていることは、兵馬の本意ではありません。兵馬は彼等を相手にしているうちに、駕籠だけは前へ進ませようと思ひます。

悪者どもは、兵馬よりは駕籠をめざしているものと見えまして。駕籠を守る兵馬は一人、それをやらじとする悪者は、松林の中から続々と湧いて来るようであります。

しかし、多勢もまた兵馬の敵ではなく、その神変不思議な一本の金剛杖で支えられて、近寄ることができないで、離れてしきりに噪い^{さわ}でいました。

兵馬とても、彼等を近寄らせないことはなんの雑作もないけれども、さりとて、遠巻きのようになっているところを、どこへどう斬り抜けてよいのだか、その見当はついていないのであります。駕籠屋は駕籠を担^{かつ}いだままで、ウロウロするばかり、逃げ出す勇氣ありません。

「やい、しっかりやれ、敵はたった一人の瘦坊主^{やせぼうず}だ」

親方らしいのが、棒を揮^{ふる}つて飛び出すと、それに励まされて

丸くなつた五六人が、兵馬を目^め蒐^がけて突貫して来ました。

兵馬はよく見澄まして例の金剛杖で、バタバタと左右へ打ち倒す時に、不意に松葉の中から風を切つて一筋の矢が、兵馬へ向いて飛んで来ました。

危ないこと。しかし兵馬の金剛杖は、その思いがけない一筋の矢を、一髪^{いっぱつ}の間に打ち落すことができました。

「この坊主は拙者が引受けるから、早く駕籠を片づけろ」

同じく松林の中から、覆面した袴^{はかま}の二人の姿が現われました。

これは今までのと違つて両刀、それに袴、まさしく武士のはしくれであります。それと同時に、

「それ担^{かつ}げ、わっしょ、わっしょ」

ならずもの

無頼者の一隊は、早くも駕籠を奪つてそのままに、神輿^{みこし}を担ぐように大勢して昇^{かつ}ぎ上げたようです。

兵馬がハツとする時に、左の覆面が切り込みました。

兵馬は金剛杖でそれを横に払いました。その瞬間に、右の覆面が斬り込んで来ました。兵馬は後ろに飛び退いて小手を払いました。

兵馬に小手を打たれてその覆面は太刀たちを取落したその隙に、兵馬は飛び越えて駕籠を奪い返すべく走はせ出すと、続いて二人の覆面はやらじと追いかけます。

兵馬は金剛杖を打ち振り打ち振り後ろの敵に備えながら、只走ひたばしりに駕籠を追いかけると、かなたの松原でワーツという人声であります。駕籠も人も見えないで、その人声がひとときわ高く揚りました。兵馬は気が気ではありません。

飛んで来て見ると、橋の袂のところで、今、一場の大格闘が開かれています。月が明るいから、こつちから、絵

のようにその光景を見て取ることができます。それはいま奪つて行つた駕籠を真中にして、それを奪つて行つた悪者どもが、入り乱れて組み合つていたのでありました。しかもこの悪者どもが相手にしているのは、たった一人の人間に過ぎないようでもあります。一人の人間を相手にして、寄つて集つて組んずほぐれつしているらしいが、その一人の人間が非常に豪傑であるらしい。

その一人の豪傑は、遠目で見たところではなんらの武器を持つていないらしい。徒手空拳で、つまり拳こぶしを振り廻して、片っぱしから悪者どもを撲り散らしているものらしいのです。兵馬は天の助けと喜びました。偶然、通りかかった旅の豪傑が、悪者どもの狼藉ろうぜきを見咎みとがめて、それを遮さへぎつてくれたものだろうと喜び勇んで来て見ると、その豪傑の強いこと。遠くで見た通り、拳

を固めて悪者どもの頭を、ポカリポカリと撲っているのです。
ます。

一つ撲られたその痛さがよほど徹こたえると見えて、飛びついて来たり、組みついて来たりする奴等が、一つ撲られると、二三日も向うへケシ飛ばされて起き上れない有様であります。

兵馬はその勇力にも驚きましたけれども、同時に、それが自分と同じことに僧形そうぎようをしている人物であるを見て、なお不思議に思いながら近づいて見ると意外、それは頭と顔の円いので見紛みまごうべくもあらぬ師家の慢心和尚であらうとは。

「老和尚」

と言つて兵馬は近づいて呼びました。

「宇津木どん」

慢心和尚はその時、悪者どもを片っぱしから撲りつけてしまつ

て、駕籠の前に立つて、抜からぬ面^{かお}で兵馬を待つていました。

「どうしてここへ」

「お前さんに頼みは頼んだが、あぶないと思うから、あとを跟^つけて来たのさ、跟いて来て見るとこの始末さ、オホホ」

「すんでのことに、この駕籠を奪われるところでした」

「危ないところ、オホホ」

和尚は例の愛嬌のある笑い方をしました。この和尚の面の円いことと口の大きいことと、その口の中へ拳が出入りするといふことはかなり驚かされていたけれど、その拳の力がこれほど強かろうとは、今まで知らなかったことであり、聞きもしなかつたことであります。なんとも見当のつかない使者の役目を吩咐^{いっ}けておいて、あとからノコノコと跟いて来るといふ挙動も、なんだか人を見縊^{みくび}つたようでもあります。

「それ、また危ない」

この時、疾風はやてのように、白刃が兵馬の頭上に飛んで来ました。それは前の覆面の二人のさむらい。兵馬が身をかわすと、慢心和尚は、うどん切りをするように、ポンポンと二人を続けさまに亀甲橋の上から、笛吹川へ落つこととしてしまいました。

「オホホ」

実に要領を得ない坊主であります。兵馬は舌を捲くばかりでありました。慢心和尚は、

「さあ、兵馬さん、これからだ。八幡村へ持つて行けと言ったのは、大方こんなことが起るだろうと思つたから、奴等を出し抜いたのだがね、こうして毒を抜いておけば、あとの心配がない、これからほかの方へ持つて行くのだ、さあいいかえ、兵馬さん、わしの後ろへ跟ついていておいで」

何をするかと思つて見ている間に、慢心和尚は、駕籠の棒へ手をかけて、それをグーツと一方を詰めて一方を長くしました。
「これ女人衆や、少しの間、窮屈でもあらうがの、こういう場合だからぜひもないことじやて。しつかりぶらさがつておいでよ」

と言つて慢心和尚は、その棒の長くした方へ肩を入れて、ウンと担いでしまいました。

いくら女一人の身ではあるといえ、それを片棒で、一人で担いでしまうにはかなりの力がなければできないことでもあります。

兵馬は、やはり呆氣あつけに取られていると、和尚は、両掛けの荷物でもぶらさげた気取りで、先に立つてサツサと歩き出しました。

しかもその歩き出す方向が、今まで来た八幡村へ行く方向とはまるつきり違つて、東の方——またしても亀甲橋を渡り直し

て、もと来た方へ帰つて行くのであります。初めは常の足どりで歩いていたのが、ようやく早足になりはじめます。

兵馬は後れ^{おく}じと和尚について走りました。あまりのことに、兵馬は和尚がどこへ行こうとするのだから尋ねる気にもなりません。

しかしながら和尚は、恵林寺へ帰るのでもなし、また尼寺へ立戻ろうとするのでもないらしく、甲州街道をどうやら勝沼の方まで出かけようとするらしいから、兵馬は忪^{こら}えきれないで、「老和尚、いつたいどこへおいでなさるつもり」と尋ねました。

「甲斐の国石^{いさわ}和川まで」

「石和川というのは？」

「この川が石和川じゃ」

「その石和川へ何しに」

兵馬は、いよいよ解げせないことに思いました。

「この背中にある女をそこへつれて行つて、沈めにかけるのじゃ」

「沈めにかけるとは？」

「水の中へブクブクと沈めて、殺してしまうのだ、オホホ」

「エッ」

なんと下らないことを言う坊主ではありませんか。兵馬が驚くのも無理はありません。それを坊主は平気でオホホと笑い、

「何も驚くことではない、昔から例のあることじゃ、この石和川

で禁断せつしょうの殺生したために、生きながら沈めにかけられた鵜飼うかいの

話うたいが謡の中にもあるわい。殺生も悪いけれど邪淫じゃいんもよくない、

女という奴、十悪と五障の身を持ちながら、あたら男を迷わして無限の魔道へ引張り込む、その罪は禁断の場所で鵜を使つて

雑魚ざこを捕つたどころの罪ではない。一人の女を生かしておく
この後、好い男が幾人きずもの創物になるか知れたものではない、それ
故に、女と見たら取捉とつかまえて沈めにかけておくのがよろしい。
お前さんに手伝ってもらつて、この女を沈めにかけてやうといふ
のはそれだ、なまじいの慈悲心を出して命乞いなどをしなさん
なよ、オホホ」

「老和尚、またしても冗談じようだんを」

「冗談ではないよ」

冗談にしても兵馬は、いい氣持がしませんでした。ましてや
駕籠に乗っている女の人が、それを聞いて、いい氣持はしま
すまい。

けれどもこの和尚が、この駕籠に乗っている女を沈めにかける目的でないということは、川の方角は疾とうに通り越してしまつて、それとは違つた勝沼の町の方へ、サツサと歩いて行くことでわかります。

兵馬は、いよいよ呆あきれ返つてしまいました。その大力と洒落洒落しやあしやあとしたところは、どう見ても人間界の代物しろものとは思われないのであります。呆れ返りながら兵馬は、金剛杖を突き鳴らして和尚のあとをついて行くうちに、ふと思ひ当つたことがありました。ああ、この和尚こそ、まさにその人ではないかと思ひました。その人に違ひないと思ひました。

その頃、知られた大力の坊主もつがいに物外和尚というのがありました。この和尚は拳骨の名人であります。拳を固めて物を打てば、

その物がみな凹へこむから、一名を拳骨和尚とつけられました。

この拳骨和尚がまだ若い時分に、越前の永平寺に安居あんごしていました。その時にある夜、和尚はいたずらをしました。そのいたずらは鐘楼から釣鐘を下ろして、それを山門の外へ持つて行つて打捨うちちやつたのであります。翌あくる朝になつて寺の坊さんたちが驚きました。誰がこんないたずらをしたか知らないけれども、とにかく、元の通りに鐘楼へ持つて行つてかけねばならぬと、大勢して騒いでいるとなにくわぬ面かおをしてそこへ現われた拳骨和尚は、

「僅か一つの鐘を、そんなに大勢して騒いでも仕方がないではないか」

と言つて、からからと笑いました。

「僅か一つと言うけれど、その一つが釣鐘だ、笑つていないで

何とか知恵があつたら知恵を貸せ」

「それはお安い御用よ、おれに茶飯を振舞いさえすれば、一人で片づけてやる」

この和尚の力のあることは坊さんたちがみんな聞いていたから、ともかく、茶飯を食わせてみようではないかということになつて、充分に茶飯を振舞うと、和尚は軽々とその鐘を差し上げて、元の通り鐘楼の上へ持つて来てかけてしまった。

その後、たびたびこの釣鐘が山門の外まで動き出すので、「さては、あの物外めが、もつがい茶飯を食いた**い**ばかりに悪戯いたずらをする」一山の者が大笑いをしました。

この拳骨和尚が京都へ出た時分に、壬生みぶの新撰組を訪ねて、近藤勇こんどういさみを驚かした話はそのころ有名な話であります。

或る時、壬生の新撰組の屯たむろの前へ、みすばらしい坊主が、一蓋いちがい

の檜木笠^{ひのきがさ}を被つて、手に鉄如意^{てつによい}を携えてやつて来て、新撰組の浪士たちが武術を練っている道場を、武者窓^{のぞ}から覗いていました。

出家とは言いながら、あまり無遠慮な覗き方であつたから、
忽ち^{たちま}浪士たちに咎め^{とが}られてしまいました。

「我々の剣術を覗いて見るくらいでは、さだめてその心得がある
のであろう、とにかく、道場の中へ入つて一太刀合せてみる」
強^しいて和尚を、道場の中へ引張り込んでしまいました。

もとより名代^{なだい}の壬生浪人のことですから、面白半分にこの坊
主をいましめてくれようと、我勝ちに得物^{えもの}を取つて立ち向うの
を、拳骨和尚は噪^{さわ}げる色もなく、携えた鉄如意^{てつによい}を振^{ふる}つて、瞬^{またた}く
間に^ま数十人を叩き伏せてしまった。

この時、上座にいたのが、隊長の近藤勇でありました。この

体を見て、

「これはこれは、驚き入った和尚の腕前。拙者は近藤勇、いざお相手を仕る」
つかまつ

というわけで、二間柄の槍を執つて近藤勇が、道場の真中に立ち出でるといふことになりました。

それを聞くと、拳骨和尚は平伏して、

「これはこれは、先生が名に負う近藤勇殿でござったか、鬼神と鳴りひびく近藤先生のお名前、世捨人の山僧までも承り奉る、いかで先生のお相手がつとまるべき、許させ給え」
よすてびと

と殊勝な御辞退ぶりです。

しかし、近藤勇ともあるべきものが、それで承知すべきはずがなく、今は辞するに由なくて、和尚は、また前の鉄如意を取つて立ち上るといふ段取りになりますと、その時に近藤が、

「およそ武術の勝負には、それぞれの器うつわがある、貴僧もその如意を捨てて、竹刀しなひにあれ、木刀にあれ、好むところを持って立たるるがよろしかろう」

と言われて、和尚は首を振り、

「我は僧侶の身であるから、あながちに武器を取りたいとも思ひ申さぬ、やはりこれでお相手をつかまつ仕りたい」

鉄如意を離さなかつたけれど、近藤勇は頑がんとしてきかなかつた。ぜひ、他の得物えものを取れと勧めたから和尚は、

「しからば」

と言つて鉄如意を下へ置いて、改めて頭陀袋ずだぶくろへ手を入れて何を取り出すかと思えば、木のお碗わんを二つ取り出しました。その二つの碗を左右の手に持つて立ち上り、

「如意でお悪ければ、この品でお相手を致すでござろう」

あまりと言えば人をばかにした仕業しわざである。相手もあらうに、今は京都で泣く子も黙る近藤勇を相手に取るに、木の腕を以てするとは何事であらう。勇は烈火の如く怒つて、一突きに突き倒してくれようと槍を構えましたが、和尚は二つの腕を左右の手に持つて、

「いざいざ、いずれよりなりとも突きたまえ」

といつて腕をかざしている体ていは、傍若無人ぼうじゃくぶじんを極めたものであります。しかしながら、近藤勇ほどのものが、ついにこの傍若無人な坊主を突き倒す隙を見出すことができませんでした。半時ばかりの間、瞬いわおきもせずにらに睨にらんでいたが、やがていかなる隙を見出しけん、巖いわおも通れと突き出す槍先、和尚の胸板むないたを微塵みじんに砕いたと思いきや、和尚が軽く身を開いて、両の手に持った腕を合せて槍の蛭巻ひるまきをグツと挟んでしまいました。仕損じたと近藤

がその槍を外そうとしたけれど遅かった。突いても、引いても、押しても、捻^{ひね}つても、動かばこそ、汗は滝のように流れ出した。槍を挟まれた近藤は、空^{むな}しく金剛力を絞り尽すことまた半時あまり、その時に拳骨和尚が大喝一声ともろともに腕を放すと、さしもの近藤が後ろに尻餅つき、槍は畳三四枚ほどの距離をあつちへ飛んだ。勇は、あまりのことに呆れ果てたけれども、彼もまた豪傑であつた、恭^{うやうや}しく礼を正して和尚に尋ねた。

「まことに万人に優れたお腕前、感服の至りでござる。そもそも貴僧はいずれのお方に候や、名乗らせ給え」

「お尋ねを蒙^{こうむ}るほどの者には候わず、愚僧は備^{びんご}後尾道の物外^{もつがい}と申す雲水の身にて候」

と聞いて、近藤はじめ、さては聞き及ぶ拳骨和尚とはこの人かと、懇^{ねんご}ろにもてなしたということであります。

嘘か、まことか、この話は今に至るまでかなり有名な話でありました。

宇津木兵馬は、その和尚のことを思い出したから、もしや右の拳骨和尚が、慢心和尚と変名して、この地に逗留しているのではないかとさえ思いました。そうでなければ、こんな勇力ある坊主が、二人とあるべきはずのものではなかうと思ひました。

それで兵馬は慢心和尚に向つて、

「老和尚はもしや、備後尾道の物外和尚ではござりませぬか」と尋ねました。

「そんな者ではない、そんな者は知らん」

と言いながら慢心和尚は、駕籠を担いでサッサと行くのであります。それですから、一度はそれと尋ねてみたけれど、二の句

は継げません。こうして金剛杖を突いて、やつぱりあとを追っかけて行くうちに勝沼の町へ入りました。

その時分、もう夜は更ふけきつていたのであります。勝沼へ来て柏尾坂かしおざかの上で和尚が、はじめて駕籠を肩から卸して土の上に置き、その駕籠の上に頬杖をつきながら、

「宇津木さん、これから先は、この中の人をお前さんに引渡しますよ、どうかして江戸へつれて行つて上げるのがいちばんよろうと思いますよ。この中の人には向岳寺の方から手形が出ているし、お前さんは、わしの寺からということにしてあるから、道中も無事に江戸へ行けるだろうが、出家姿で女を連れて歩くというのも異いなものだから、あたりまえの武士なりの風をして行くがよろう。この町で富永屋庄右衛門というのをわしは知っているから、それを起して今晚は泊めてもらい、そこで兩人とも

支度をととのえて、明朝にも江戸へ出かけることにしてもらいたいね。その行先は兩人で相談してみるがよい。そうして兵馬さんの方は御用は済んだら、またこっちへ帰つて来て、敵討かたきうちというやつをおやんなすつたらよからう」

こう言いましたから、兵馬は、やつぱり呆氣あつけに取られていると、

「さあ、そういうことにして、これから富永屋を叩き起そう、宿屋が商売だから、いつなんどきでも叩き起して、いやな面かおをするはずはない、ことに恵林寺の慢心が来たといえ、庄右衛門は喜んで出迎える」

とにかく、こうして駕籠かごは勝沼の町の富永屋庄右衛門という宿屋の前へ来て、再び土の上へ置かれました。

慢心和尚はその宿屋の前へ立つて、拳を上げてトントンと戸

を叩きましたけれど起きませんでした。大抵の場合には、時刻を過ぎては狸寝入りをして、知っていても起きないことがあるのでしたから、慢心和尚は、やや荒く戸を叩いて、

「富永屋、富永屋……庄右衛門、庄右衛門、恵林寺の慢心だよ、慢心が出て来たのだよ、起きさつしやい」

こういうと慢心の利目ききめが即座に現われて、家中が急に混雑をはじめました。

慢心和尚はここの家へ二人を送り込んでから、スーツと帰つてしまいます。

駕籠の中の主が、お君であつたということを、兵馬はこの宿屋の一室へ来て、はじめて知りました。お君はその前から感じていたけれど、口に出して言うことはできませんでした。兵馬にとっては意外千万のことです。ことに神尾主膳のために駒

井能登守がおとし陥れられた一条を聞いて、兵馬は氣の毒と腹立ちとに堪ゆることができません。

またその後のお松の身の上を聞いてみると、やはり危険が刻々と迫っていて、今日は逃げ出そうか、明日は忍び出そうかと、そのことのみ考えているということを知り、それも心配に堪えられませんでした。

けれども、さし当つての問題は、預けられたこの女をどうするかということにあります。執念深い神尾主膳の一味はこの女をいけど生捕つて、また何か恥辱を与えんとするものらしい。さすがに尼寺は荒せなかつたけれど、一步踏み出すとあの始末です。

甚だ迷惑千万ながら、兵馬としては、やはりこの駕籠を江戸まで送り届けることを、ともかくもしなければならぬなりゆきになつてしまいました。お君は、もう弱り切っていました。

兵馬はお君を先に休ませて、明日の駕籠や乗物の事を心配しました。明朝と言つても、もう間もないことだから、今からどうしようという手筈もつかないのがあります。且又、弱り切ったお君の姿を見ると、このうえ駕籠に揺られて、険しい山越しをさせることは考えものであります。

そこで兵馬は、明日一日はここに逗留して隠れていようと思いました。その間に準備をととのえ、お君にも休息の暇を与えて、明後日の早朝に出立しようと考えたのであります。

駕籠の中には兵馬の衣服大小の類も、路用の金も入れてありましたから、兵馬はそれを取り出して調べました。

江戸へ送り届けて後のこの女の処分も、考えればまるで雲を掴むようなものです。まさかに能登守の本邸へ送り届けるわけにはゆくまいし、さりとて、江戸はこの女の故郷ではない。江

戸へ連れ出してみての問題だが、ともかく、江戸へ連れ出しさえすればどうにかなるだろうと思いました。

そうしてこの女を江戸へ届けて、ともかくも落着けてみてからの兵馬自身の行動は、直ちにまたこの甲州へ舞い戻つて来ることであります。最も怪しむべきは神尾主膳である。駒井能登守を陥れた手段の如きは、聞いてさえその陰險卑劣なことに腹が立つ。わが狙^{ねら}う仇も、確かにあの神尾が行方^{ゆくえ}を知っているもののように思われてならぬ。こうなつてみると、今は神尾を中心として当つてみるのが最上である。場合によつては、あの邸へ斬り込んで……とまで兵馬は決心しました。

疲れ切つたお君は、傍^{かたわら}にスヤスヤと寝ているけれど、兵馬は寝もやらずに考えています。

十

その翌日は、あまり大降りではないけれども、とにかく雨が降りました。宇津木兵馬にとつてはこの雨がかえつて仕合せなくらいでありました。兵馬はお君をここで、できるだけ休養させようと思いました。お君は病人のようで、兵馬はその看護をしているもののようにして、旅の用意を調えつつ、その日一日を暮らしました。

ちようどこの時に、この富永屋という宿屋に、一人の年増としまの女が逗留とまりゆうしていました。

この間、絹商人だという亭主らしい人と一緒に来て、その亭主らしい人はどこかへ出て行つて、まだ帰つて来ない間を、その年増の女がたった一人で幾日も待っているのです。

けれども、その亭主らしいのが幾日も帰つては来ないうちに、帳場へ懇意になり、主人の庄右衛門とも心安くなりました。

そうしてゐるうちに番頭が病氣になると、この女が帳場へ坐り込みました。帳場へ坐り込んだと言ったところで、主人を籠絡ろうらくしたり、番頭を押しつけて坐り込んだわけではなく、自分の暇つぶしに懇意づくで、手助けをしてやるような調子で働いてやつていました。

ところがこの女は、人を遣つかうことが上手、客を扱うことに慣れきっていました。その技倆から言えば、前の番頭などは比較になるものではありません。このくらいの宿屋を三ツ四ツ預けたとて、物の数とも思わなくらいの冴さえた腕を持っているように見えましたから、主人は舌を捲いていました。雇人たちは喜んでそれに使われるようになりました。それに、番頭の病氣

が捗々しくなくて湯治とうじに出かけるというほどであつたから、そのあとを主人も頼むようにし、当人も退屈まぎれの氣になつて、この女が今では、ほとんどこの店を預かつているのであります。この女というのは、別人ではなく——両国で女輕業師の親方をしていたお角であります。

その雨の降る日に、お角は帳場に坐っていました。

「お千代さん、それでは三番のお客様も、今日は御逗留なのだね」

と言つて、お千代という女中に尋ねました。

「はい、今朝は早くとおつしやつておいででございましたが、お足が痛いからとおつしやつて、もう一日お泊りなさるそうでございます」

「そりやそうでしょう、あのお御足みあしでは……あまり旅にお慣れ

なさらないお方のようですね」

「ほんとに女のようなお若い、美しいお侍ひとでいらつしやるのに、お足を、あんなにお痛めなすつては、おかawaiiそうでございます」

「お見舞に上つてみましょう」

お角はこう言つて、その足を痛めた美しい侍の、三番の室と
いうのを見舞に行こうとしました。

ここで話題に上つた三番の室というのは、それは兵馬とお君
との部屋をいうのではありません。二人のいるのは一番の室で
あります。今の話の三番の室には刀架かたなかけがあつて、大小の刀が置
いてあります。その前の床柱に凭もたれてキチンと坐っているのは、
兵馬よりは二ツ三ツも若かろうと思われるほどの美少年であり
ます。

「御免下さりませ」

と言つてお角がそこへ訪ねて来ました。

「これはどなた」

という声は、少年にしてはあまりに優しい声であります。

「生憎あいにくの雨で、さだめて御退屈でいらせられましょう」

「これは御内儀でござつたか。生憎の雨のこと故、もう一日、出立を見合せまする」

「どうぞ御悠ごゆるりとお留まり下さりませ、なにしろ、音に聞えたこの笹子峠でござりまする、お天気の時でさえ御難渋の道でござりまする」

「明朝は駕籠を頼み申しまする」

「はい畏かしこまりました。あの、明朝はこのような雨が降りまして、やはり御出立でござりまするか」

「左様……雨が降つては」

「雨が続きましたら、もう一日御逗留なさいませ、ごらんの通りの山家、やまがお構い申し上げることはできませんけれど」

「しかし……ちと急ぐこともある故、もし明朝は雨が降つても峠を越したいと思ひまする」

「左様でござりまするか。左様ならばそのように駕籠を申しつけておきましよう」

「よろしく頼みまする」

「それではそのおつもりで……どうぞ御悠ごゆるりと」

お角はお辞儀をして出て行こうとすると、

「あの、御内儀……」

美少年は何か頼みたいことがあるもののように、立ちかけたお角を呼び留めました。

「はい」

「ちとお尋ね致したいが、あの峠へかかるまでにお関所がありましたな」

「はい、駒飼こまかいと申すところにお関所がござりまする」

「あの、その関所は、手形が無くては通してくれまいか」

「それはあなた様、お関所にはどちらにもお関所の御規則がありました」

「それをどうぞして、抜けて通る路はあるまいか」

「あの、お関所の前をお通りなされずに？」

「粗忽そこっせんぱん千万のことながら、その手形というものを途中で失うて困難の身の上、何と御内儀、よい知恵はござるまいか」

美少年は一生懸命でこれだけのことを言いました。よほどの勇気をもってこの宿の主婦と見たお角にこのことを打明けて、

相談をしてみる気になつたものであります。

しかし、これだけの相談として見れば、それだけの相談だけれど、表向きに言えば、お関所破りの相談であります。どうしたらお関所破りができるか教えてくれというようなものであります。お角はこの少年の面を^{かお}篤と^{とく}見ないわけにはゆきませんでした。

「それはそれはお困りのことでござりましょう、ほかのことと違ひまして」

お角も、さすがに即答がなり兼ねるらしくあります。少年はきまりが悪いのか、窮したせい、下を向いていると、

「お関所の抜け路をお通りなさることや……また殿方が女の風^{なり}をなさったり、女のお方が殿方にこしらえたりして、お関所をお通りになることが現われますと、それは大罪になることで

「ござりまする」

お角にこう言われて、少年の面かおの色が火のように紅くなりま
した。

その痛々しい若い侍の室を出たお角は、しきりに小首を傾かしげ
ていました。そうして何か思案することありげに廊下を渡って、
一番の室へ見舞に行こうとしました。そこには同じく、雨で逗
留している宇津木兵馬とお君の二人がいます。

お角がそこへ行こうと思つて廊下を渡ると、表の方で大声が
聞えました。それも図抜けて大きな声で、

「さあさあ、大変大変、峠へ狼が出て二人半食い殺されてしまつ
た、いやもう道中は大騒ぎ、大騒ぎ」

と言うのであります。あまりに無遠慮に大きな声でありました
から、お角の耳にも入つたし、その他の人にもみんな聞えたで

ありましよう。一番の室へ行こうとしたお角はこの声で直ぐに引返して、兵馬やお君を見舞わずに帳場へ帰つて来ました。

その今の大きな声の持主は、この街道を往来する馬方であります。それが地声の大きいのを一層大きくして、この店へ怒鳴り込んだのであります。

宇津木兵馬の耳にもその大きな声が聞えたから愕然^{がくぜん}として驚きました。スヤスヤと眠っていたお君の眼を醒^さまさせるくらいに大きな声でありました。

「宇津木様、何でございます、あの騒ぎは」

「峠へ狼が出たそうな」

「怖いこと、狼が？」

「そうして人を二人半食い殺したと聞えたけれど、二人はよいが、半というがちとおかしい」

兵馬とお君とはこう言つて話をしている間に、例の地声の大きな馬方は店の方で、お角やその他の者を相手に、盛んに大声をあげてその講釈をしているらしくありました。それが洩れて聞えるところによれば、狼に食い殺されたのは笹子峠の七曲りあたりであつて、食い殺された人は一人の薬売りと、それから魚屋と、もう一人危なく逃げたのは道中師であるらしく聞えます。半というのはおそらくその道中師が命からがら逃げたから、それで半と言つたのだらうと思われます。

兵馬は、その前路を控えた身で、こんな話を聞くことは、さすがに快しとはしませんでした。狼というものの存在はかねて聞いてはいるし、またこのあたりの山々にはそれが住んでいて、時あつては人里までも出て来るといふ話も聞きました。けれども、そんな話をお君に聞かせることはよくないと思つて、それ

で不快の感じがしたのであります。

「夜道などをするから悪いのじゃ、悠ゆうくりと宿を取つて日のうちに出で、日のうちに越えてしまひさえすれば、なんのことはなかりうに、無理をするからそんなことになる」

兵馬はそう思いました。一体深山に棲すむ狼は群れを成しているものだそうだけれど、兵馬は今までの旅に狼というものに出逢ったことがあります。狼に出逢ったことがないばかりでなく、狼というものの生きたのも死んだのもその実物を見たことはありませんでした。それは絵にかいたものだけによつて、そう信じているだけでありました。

こうは言うものの、明日、この女をつれて峠を越える時に、不意にそれらの悪獣に襲われたとしたら……それに対する用意をしておかなければならないのだと思いました。

いったん帳場へ帰つて、狼が人を食った話を馬方の口から詳細に聞いたあとで、お角はまた再び第一番の室、すなわち兵馬とお君のいるところへ見舞に行こうとして廊下を渡つて行くと、

「ちよッ、ちよつと、お角」

裏の垣根越しに呼び留めたものがあります。

「どなた」

お角がその垣根越しを振返つて見ると、雨の中を笠をかぶつて合羽かつぱを着た人。

「おや、お前は百さんじゃないか」

「叱しッ、静かに」

「誰も見ていないから、早くその土蔵の蔭から七番の方へお廻り」

「大丈夫かえ」

「大丈夫だよ、あの裏木戸から入つて」

「合点だ」
がってん

その垣根越しの笠と合羽は、が、ん、り、き、の百蔵であることに紛まぎれもありません。

二度まで見舞に行こうとして出端でばなを折られたお角は、またしても第一番の室へ行こうとした足を引返して、七番の座敷へ舞い戻つて来ました。この七番の座敷というのは、自分の部屋として借りてある座敷です。

お角がそこへ戻つて来た時分に、が、ん、り、き、の百蔵は、もう草鞋わらじを脱いで縁の下へ突っ込んで、合羽を抱えてその座敷へ入り込んでいました。

「おつそろしい目に逢つたよ」

「何がどうしたの」

「昨日の夕方はお前、笹子峠の七曲りで狼に出逢^{でつくわ}して、命からがらで逃げて来たんだ」

「そうかね、お前さんかえ。今、馬方が来ての話に二人半食い殺されたというから、その半というのはどういうわけだと聞いたら、それは食われ損なつて逃げた人があるんだと言つていた、それがお前さんとは気がつかなかった。何しろ命拾いをしてよかつたね」

「まあよかつたというものだ。大丈夫かえ、誰にも気取^{けど}られるようなことはありやしめえな」

「大丈夫。まあその合羽をお出し」

お角はが、ん、り、き、の手から、雨に濡れた合羽を受取つて、そつと裏の方から竿にかけました。

「やれやれ」

旅装を取ったが、ん、き、は火鉢の前へ坐りました。お角もまた火鉢によりかかりました。それから、ひそひそ話で、時々目面めがおで笑ったり睨めたりして、かなり永いこと話が続きましたが、「それじゃ、今夜は泊り込むとしよう、だが明日の朝は、また鳥沢まで行かなくちゃあならねえのだ」

「ほんとうに落着かない人だ、いくら足が自慢だからと言って、そうして飛び廻ってばかりしているのも因果な話」

「どうも仕方がねえや、こうしてせわしく出来ている身体だ」
「あ、そりやそうとお前さん、鳥沢へ行くのなら、お客様を一人、案内して上げてくれないか、まだお若いお侍だけれど、手形を失くしてしまつて困つておいでなさる様子、抜け道を聞かしてもらいたいとわたしに頼むくらいだから、ほんとうに旅慣れない初心うぶな女のような若いお侍だよ」

「なるほど、そりや案内してやつても悪くはねえが、こちとらと違つて、あとで出世の妨げになつてもよくあるめえからな、それを承知で、よくよくの事情なら、ずいぶん抜け道を案内してやらねえものでもねえ」

「そりやお前さん、よくよくの事情があるらしいね、手形を失くしたというのは嘘うそで、持たずに逃げ出して来たんだね、それで、どうやら追手がかかるものらしく、外へも出ないで隠れている様子が、あんまり痛々しいから、お前さん、ひとつ助けておやりよ、女のような優しいお侍だからかわいそうになつてしまふ」

その翌朝になつても雨はしとしとと降つていましたが、それにも拘らず宇津木兵馬は、駕籠を雇つてこの宿を立ち出でました。

兵馬は合羽を着て徒歩でこの宿を出て、尋常に甲州街道を下つて行くのでありますが、兵馬とお君の駕籠がこの宿を尋常に出かけた前に、まだ暗いうちに同じくこの宿を出でて、東へ向つて下つた二人の旅人がありました。

前のは旅慣れた片手の無い男で、あとに従つたのは前髪の女にも見まほしい美少年。前のはがんりきの百蔵で、後のは昨日三番の室で関所の抜け道を問うた少年であります。

兵馬お君の一行が、本街道の関所のあるところを大手を振つて通るのに、がんりきと美少年は裏へ廻つて、関所のない抜け道を通ることが違つていたのであります。

本道を通ることは例外で、抜け道を通ることのみがその本職であつた百蔵は、こんなことには心得たものです。

女にも見まほしき美少年は、足を痛めたというけれど、やはり旅には慣れているもののようです。しかし、両刀の重味がどうにも身にこたえるようで、それを抱えるようにして、がんりきのあとをついて行くと、

「それでもこれ、お関所のあるべきところを無いことにして通るんでございますから、表向きにむずかしく言えばお関所破りになるのでございますね、お関所破りの罪を表向きにやかましく詮議せんぎすれば、そのお関所のあるところで磔刑はりつけになるのが御定法ごじようほうですから、あなた様も、わつしどもも、御定法通りにいえばこれで磔刑ものなんでございますよ」

がんりきの言うことは少年をして、薄気味の悪い心持を起させ

ないわけにはゆきません。が、ん、り、き、はそれをこともなげに言つて、少年が氣にかける様子を尻目にかけて、

「しかし、お役人とても、そんなに野暮やばな仕打しうちばかりはござい

ません、こんなことでいちいちお関所破りをつかまえて、磔刑にかけた日には、関所の廻りは磔刑柱の林になつてしまひます、旅に慣れたわつしどものようなものでなくても土地に近い人などは、わざわざ関所を通つていちいち御挨拶を申し上げてもおられないから、その抜け道や裏道を突つ切つてしまふのでございます。そんなものは、笑つてお眼こぼしでございます。それでも、こうして渡つて歩くうちに、どうかして間違つてお上かみの手で調べられた時には、こんなふうに言い抜けをするんでございますね、実はあの勝沼の町から出まして、駒飼のお関所へかかろうと思う途中で、ついつい道を取違えて山の中へ入つてし

まいりました、そこでどうして本道へ出たものと迷っているうちに、山の中から樵夫きこりが出て参りました、その樵夫に尋ねてようやく本道へ出て参ることができましたけれど、その時は知らず知らずお関所を通り越しておりました、済まないこととは思いましたけれど、また先を急ぐ旅でございますから立戻るといふわけにもいかず、つついそのまま通り過ぎてしまいました、こういった言い抜けをするんでございますね。そうすると、しからば其方そのほうに道を教えた樵夫というのは何村の何の誰じやとお尋ねがある、その時は、いやそれを聞こうとしているうちに、樵夫は山奥深く分け入って影も形も見えなくなりました、こんなふうに申し上げればそれが済むんでございます、お関所にも抜け道があり、お調べにも言い抜けの道があるんでございませうがね、やかましいのは入鉄砲いりてっぽうに出女でおんなといつて、鉄砲が

お関所を越して江戸の方へ入る時と、女が江戸の方からお関所を越えて乗り出す時は、なかなか詮議せんぎが厳きびしかったものでございますがね、それも昔のこととて、今はそんなでもありませんよ。そんなではないと言ったところで、このごろは世間が物騒でございますから、男が女の風なりをしたり、女が男の風をしたりしてお関所を晦くらますようなことがあると、なかなか面倒には面倒になるんでございますね」

こんなことを言っている間に、いつか関所の裏道を抜けてしまつて、本道へ出て笹子峠を上りにかかつていました。

なお、がんりきは途中、いろいろの話をしてこの少年に聞かせました。丁度、そんなような雨のことですから、旅人も少ないもので、山また山が重なる笹子の峠道は、昼とは思われないほどに暗いものでありました。峠を登つて行くと坊主沢のあた

りへ出ました。この辺は橋が幾つもあつて、下には溪流が左右から流れ下つているところもあります。

やがて、もう峠の頂上へも近づこうとする時分に、

「こいつはいけねえ」

とが、ん、り、き、が言いました。

いま峠の上から、一隊の人が下りてくるらしくあります。この一隊の人というのは、尋常の人ではなく何か役目を帯びた人らしくあります。が、ん、り、き、はそれを振仰いで、

「あれは八州様の組だ、うっかりこうしてはいられません、少しばかり姿を忍ばせましょう」

こう言つて坊主沢を左に切れて、傍道わきみちへ入りました。少年もまた、同じようにしないわけにはゆきません。

なるほど、それは八州の役人らしい。幸いにしてこの役人た

ちは、いま横へ切れた二人の姿を見咎めもしませんで、やはり雨の中を肅々として甲州の方へ向けて下りて行くのは、何か大捕物でもあるらしき気配であります。

「どうも危ねえ」

がんり、きはその横道を先に立って行きました。これは多分、天目山の方へ行かるべき路であらうと思われます。

八州の捕方とりかたを避けて横道につれ込まれた少年は、この案内者に相当の信用を置いているらしいが、気味の悪い感じも相当に伴わないではありません。しかしどこまでも弱味を見せないつもりで、それに従って行くと、さして大木ではないけれども、杉の木立の暗い細道へかかりました。

その杉の木立の中に、山神の祠ほくらといったような小ちひやかな社のあるのを指して、

「あれで暫らく休んで参りましょう、どのみち本道へかからなくてはなりません、そのうち雨も歇やむことでございましょう」
が、ん、り、き、が先に立つてその祠の縁へ腰をかけ、

「ずいぶんお疲れなすつたことでございましょうねえ」

「いいえ、それほどに疲れはしませぬ」

と言つたけれども少年は、かなりに疲れているらしくありました。

「なにしろ、お若いに一人旅ということとはなさるものではございません、あなた様が男でいらつしやるからいいようなものの、もし女でもあつて御覧ごらんじろ、道中には狼がたくさんいますからな」

が、ん、り、き、にこう言われた時に、少年はギクツとしたようでした。そう言つたが、ん、り、き、自身もまた、妙に気がひけたらしく、

「狼、狼といえ、この山にはほんものの狼がいるんでございます、そう思うと何だか急に氣味が悪くなつて来た」

が、ん、り、き、は、わぎとらしい身ぶるいをして前後を見廻しました。前後は杉の木立で、足下では沢の水が淙々そうそうと鳴つて、空山くうざんの間に響きます。

少年は、なんとなし居堪いたたまらないような心持になつて、

「ともかく、本道へ戻ろうではござりませぬか」

「まあようござんす、まあ休んでおいでなさいまし、どんなことをしたからと言つたつて、日のあるうちに越せねえ峠じゃあございせんや、八州のお方が立戻つてでも来ようものなら、今度はちよつと抜け道がねえのでございます、もう少し休んでいらつしやいまし」

と言いながら、が、ん、り、き、は少年の手首をとりました。

「あれ——」

少年は思わずこう言つて叫びを立てました。

「そんなに吃驚^{びっくり}なさることはござんすまい、お武家様、あなたは男の姿をしておいでなさるけれど、実は女でございましょう」

「左様なものではない」

「いけません、わつしは道中師でございます、旅をなさるお方の一から十まで、ちやあんと睨^{にら}んで少しの外れ^{はず}もないんでございますから、お隠しなすつても駄目でございます」

「隠すことではない」

「それ、それがお隠しなさるんでございます、あなた様は女ではないとおっしゃつても、これが……」

が、ん、り、きはその片手を伸べて、乳のあたりを探るようにしましたから、

「無礼をするとうようしやはせぬ」

少年はツト立ち退いて刀の柄つかに手をかけました。が、んりきはそれを驚く模様は更になく、

「ははは、たとえあなた様が男でござりましょうとも、女でいらつしやいましょうとも、それをどうしようというわつしどもではございませぬ、御安心下さいまし。しかし、こうしてお伴つれになつてみるというと、その本当のところを確めておいてもらい申さぬと、臨機りんぎのかけひきというやつがうまくいかねえんでございますから」

「もう、雨も小歇こやみになつた様子、早く本道へ戻りましょう」

「まあ、もう少しお休みなさいませ。いったい、あなた様は女の身で……どうしてまた、わざわざ一人旅をなさるんでございます、それをお聞き申したいんでございますがね。次第によつ

ては、これでも男の端くれ、ずいぶんお力になつて上げない限りもございません」

「さあ、早くあちらへ参ろう」

「まあ、よろしいじゃありませんか、私がこうしてお聞き申すのは、実は、あなた様をどこぞでお見受け申したことがあるからでございます」

「えッ」

「たしか、あなた様を甲府の神尾主膳様のお邸のうちで、お見かけ申したことがあるように存じております」

「知らぬ、知らぬ」

「あなた様は知らぬとおっしゃいますけれど、私の方では、あなた様の御主人の神尾様にも御懇意に願つておりますし、それから、あなた様の伯母さんだかお師匠さんだか存じませんが、

あのお絹さんというのは、かくべつ御懇意なんでございます、間違つたら御免下さいまし、そのお内で、たしかお松様とおつしやるのが、あなた様にそのままのお方でございましたよ」

「どうしてそれを」

「がんりきの百蔵と言つてお聞きになれば、あなた様のお近づきの人はみんな、なるほどと御承知をなさるでございましょう」

「ああ、それではぜひもない」

少年はホツと息をついて、がんりきの面かおを見ていたが、遽にわかに声も言葉も打つて変り、

「いかにも、わたしが神尾の邸におりました松でござりまする、こうして姿をかえて邸を脱ぬけて出ましたのは、よくよくの事情があればのこと、どうぞお見のがし下さいませ」

「それぞれ、それで私も安心を致しましたよ、神尾様のお身内

なら、なんの、失礼ながら御親類も同様、これから、お力になつてどこへなりと、あなた様のお望みのところへ落着きあそばすまで、このが、ん、り、き、が及ばずながら御案内を致しまする」

「なにぶん、お頼み致しまする」

なにぶん、頼んでいいのだから悪いのだから知らないが、この場合、お松はこう言つてが、ん、り、き、に頼みました。

「ようございますとも。さあ、そう事がわかつたら、こんな窮屈なところに長居をするではございせん、本道をサツサと参りましょう」

それから後は存外無事でありました。無事ではあつたけれども、こんなに^{みすか}見透されてしまった上に、これが肩書附きの人間であることがわかつてみれば、決して気味のよい道づれではありません。

しかし、こうなつてみると、急にこの気味の悪い道づれと離れることもできないで、お松は笹子峠を越してしまいました。

何事が起るべくして、何事も起らずに峠を越してしまいました。人にも咎められず、狼にも襲われることがありませんでした。ただこの道案内であり道づれである男が、かえつて追手の方よりも恐ろしいものであり、或いは狼よりも怖いものであるかどうかは、まだわからないことです。

そうして黒野田の宿へ無事に着いて、まだ二三駅はらくに行ける時刻であつたけれども、そこでひとまず泊ることになりました。がんりきが、お松を案内したのは、前の本陣の宿ではなく、林屋という宿でありました。

ここへ着いての思い出は、お松にとつて少なからぬものがあります。ここの本陣へ駒井能登守と共に泊り合せた一夜の出来

事は、鮮あざやかにその記憶に残っているのです。あります。

お師匠様のお絹がここで何者にか浚さらわれて大騒ぎを起しました。狼も棲すむというし、天狗も出沒するという、このあたりに来た時は、あんなことがあり、帰る時にこんなことになって、剣呑けんのんな道づれに案内されて同じところの宿へ泊るといふのも、お松にとって心強いものではありませんです。

ところが、この宿へ着いて旅装を解くと、まもなくが、んりき、の姿が見えなくなっていました。お松は心には充分の警戒をして、万一の時は身を殺してもと思つていのですけれども、その警戒の相手が不意になくなってみると、なんとなく拍子抜けのようでもありました。いく時たつても、が、んりき、は帰つて来ませんでした。ついに夕飯の時になって見ると、その食膳は一人前であります。

これを以て見れば宿でもまた、自分に連れのあることは認めていないものと見なければなりません。またお連れ様はとも尋ねてみないことを以て見れば、この宿では全然、自分に連れがあつたことをさえ想像していないらしくあります。

お松は合点のゆかないことに思いながらも、食事を済ましてしましました。

日が暮れても、風呂が済んでも、いよいよ寝る時刻になつても、とうとうが、ん、き、は姿を見せないのです。

お松はそれを合点がゆかないことに思つたけれども、また多少安心をする気にもなりました。なぜならば、あんな気味の悪い男に導かれて行くことの不安心は、慣れぬ一人旅をして歩く不安心よりも、一層不安心であるからです。

前途はとにかく、あの男と離れたことが、かえって幸いであつ

たと、寢床に就いた時分にホッと息をつきました。

お松がこんな装いよそおをしてまで、甲府を逃れ出さねばならなかった理由は、全くあつちでは行詰ゆきづまつてしまったからであることは申すまでもありません。内には神尾の圧迫があり、外には筑前守へ奉公の強要があり、自分としては兵馬やお君の事が気にかかり、能登守の運命にも同情したり、主人の神尾の挙動には、身ぶるいするほどに怖れと嫌氣とを催して、どうしても居堪いたたまらないから、この非常手段で逃げ出したものであります。

兵馬が恵林寺に留まとどまっていることがわかりさえすれば何のことはなかったろうけれど、それをお松は知ることができませんでした。ただこうして行くうちに、兵馬の行方ゆくえを知る由もあらうかと思ひ、それがわからぬ時は、いっそ、江戸へ出て、外よそながら能登守やお君の身の上について知りたい、また例の与八とい

う男の許をも尋ねてみようかというような心持でありました。

その翌日、早朝に宿を出立すると、どうでしょう、阿弥陀街道の外れへ来た時分に、もうそこに、旅の装いをして、がんり、きがちやあん^だと待っているではありませんか。もつとも今日は雨が降りません。がんり、きが待っていたのは、阿弥陀街道を過ぎて、笹子川の橋詰のところであります。

お松も、はじめはそれとは気がつきませんでした。近寄って見た時に、それと知ってギョツとしました。

「お早うございます」

がんり、きは挨拶をしました。

「これは、まあ」

と言つてお松は呆氣あつけに取られました。

「お待ち申しておりました」

この分では、この男に見込まれたようなものだ。

「昨夜はどこへお泊りなさいました」

とお松は尋ねました。

「ツイこの近いところに知合いがあるんでございます」

が、ん、り、きはそれだけしか答えません。お松もその上は問うことをしませんでしたが、どうしてもこの男の道づれを断わるわけにはゆきません。

「ここは橋詰というところでございす、この次がよしヶ久保と

申しまして、あすこにあるのが虚空蔵様で、それと違つたこつ

ちの方に毒蛇済度の経石どくじゃさいど きょういしというものがございす、それから白

の原に白野、天神坂を通つて立川原へ出て橋を渡ると神戸ごうど、そ

れから中初狩に下初狩、上花咲に下花咲、大月橋を渡つて大月」

こんなことを言つて、が、ん、り、きは細かな道案内をしながら歩

いて行きます。暢氣のんきに歩いて行くようだけれども、絶えず往来と前後とに気を配っていることは、お松が見てもよくわかります。ことに前後から来る人の容貌を遠くから見定めようとすることと、通りすぎる人を横目に見やる眼つきなんぞは、気味が悪いばかりです。

そのうち大月の手前まで来ると不意に、

「どうか一足先においでなさいまし、私は少しばかり廻り道をして参りますから」

と言うかと思えば、が、ん、り、き、はツイと横道へ切れてしまいました。お松と一緒に歩いている時は、そんなでもなかったけれど、一人で横道へ切れる時の足の早いこと、あ、と言う間もなくいずれへか姿を消してしまいました。

それから、お松はまた一人で歩いて行きました。この男は、

確かに道中の胡麻ごまの蠅はえというものだろうと思ひました。飛んでもないものに付き纏まとわれてしまつたと、泣きたいにも泣けない心持で、心細い旅を歩きます。

笹子の山中で、右の男は道すがら、自分はこう見えても女に餓えてゐるような男でないから、一人旅をなさるお前様を、取つて喰おうの煮て喰おうのという了見りようけんはございませんと言つた言葉を思ひ起しました。事実、あの男が自分を女と知つた上で、無礼を加えるつもりならば、今までにその機会もあつたらう。殊に昨夜の泊りで、わざと外してしまつたのが不思議であるなど、お松は考へて歩きます。

しかし、気味の悪い男は気味の悪い男である、どうしてもあの男と道づれの縁を切つてしまわねばならぬと思ひました。それをするにはいかなる手段を取つたらばよいだらうかと、その

ことをそれからそれと考えて、大月から駒橋、横尾、殿上とのうえと通つて、ようやく猿橋の宿まで入ることができました。

お松は幼いとけない時分から諸国の旅をして歩きました。それ故に、はじめのほどは辛かったけれど足が慣れてみれば、世の常の女のように道に悩むことが少ないのであります。ただ腰に差し慣れない両刀の重荷が苦しく、人の見ないところでは、それを抱えるようにして歩きましたが、猿橋の宿へ来て、とある茶店へ入つて一息つきました。

「許せよ」

お松がこの店に休みながら考えたのは、やはりこの後いかにして、がん、りき、きという気味の悪い道づれを撒まこうかということでありました。お松の思案では、幸いに、この道中でしかるべき有力な旅の人を見つけて、その従者に加えてもらうか、或い

は同行に入れてもらえば、これから先の道中も無事であるし、あの気味の悪い男も寄りつくまいということでもあります。

ここで中食ちゆうじきをしている間にも、お松はその心持で街道の方を眺めていました。

暫くした時に、その前をズッシズッシと通ったのは、昨日、笹子峠の坊主沢のあたりで遣り過やごした八州の役人という一隊でありました。その一隊の人が、ズッシズッシと通って行く光景はなんとなく穏かではありません。昨日あれからどこまで行つたのか、甲府までは行くまいけれども、勝沼あたりまでは行つて、それからまた引返して来たものに相違ないのであります。

いかに同行の人を求めたいからと言って、あの一行の中へ駆け込むわけにもゆかないから、お松はその通り過ぐる間は隠れるようにして、それが遠く離れたと思われる時分まで、わざと

この店に隙を^{ひま}つぶしていると、そこへ頬冠^{ほおかぶ}りをした^{たくま}逞しい馬子^{まご}が一人、馬を曳^ひいてやつて来ました。

「御免なさいよ」

と言つて頬冠^{ほおかぶ}りを取つた馬子の面^{かお}は日に焼けて髯^{ひげ}だらけであるけれども、厳^{いか}めしい面で、眼つきが尋常の馬子とは違ふように見えます。眼つきが違ふといつても、悪い方に違ふのではありません。が、^んり^きの百蔵は身なりを小綺麗にしているにかかわらず、なんとなく小氣味が悪い男であるけれど、いま入つて来た馬子は、容貌が怖ろしげなのにかかわらず、一見して氣味の悪いという感じをお松に与えないで、そのお粗末な服裝の中に、どこやらに親しみのある人品が備わるように見えないでもありません。無^む雑^{ざう}作に入つて来たけれども、そこにお松のあることを見て、丁寧ていねいに小腰をかがめました。

この店の親方とは、心安い間柄と見えて、話しぶりも打解けたものです。その話を聞くと、笹子まで客を送って行つて、これから鳥沢へ帰るところであるということです。

この馬子は隅っこへ腰をかけて、お松の方を遠慮深く見ていたようでしたが、

「もし、お武家様」

と言つて言葉をかけました。

「はい」

お松は馬子から言葉をかけられたので、少しうろたえて返事をしました。

「失礼でございますが、あなた様は、これからどちらへお越しでございます」

「江戸へ下ります」

「左様でございますか、お一人で……」

「はい」

「いかがでございましょう、どのみち帰りでございますから、お馬にお乗りなすっておくんなさいますまいか」

と言われて、お松は馬子の面かおをチラと見ました。人の悪い馬方や雲助の多いことでは、郡内は名うてのところであります。ですから、なるべく今まで馬も駕籠も傭わないことにしてました。が、んりきがついていたから、それでも今まで通つて来たけれど、これからさき一人で歩こうものなら、どんなうるさい勧め方をされるかわからないし、万一、自分が女と知られた上は、またどんな目に遭うか知れたものでないと思ひました。

今、ここでこの馬子から馬に乗れと言われてみると、もうこれわるじが悪強い最初ではないかと思われて、その馬子の面を見た

のですけれど、主人の話しぶりを見ても、その人柄を見ても、性質たちの悪い馬子とは見えません。

お松は心をきめて、とうとうその馬に乗ることに約束しました。

馬子は喜びました。どのみち帰り馬のことだから、賃錢も安くするようなことを言いました。お松はどこまでというきまりをここではつけませんでした。けれど、実は上野原まで一気に行つてしまおうという心で、この馬に乗ることにしました。

この馬子の面はどこやら、先に甲府の牢を破つた南条という奇異なる武士の面影おもかげには似ているけれども、それはお松とは更に交渉のあることではありません。

ほどなく例の猿橋まで来ました。こちらへ入る時にお松は、この有名な橋の傍へ駕籠をとどめて見て過ぎました。今、馬上

からそれを見るとまた趣が變つたものであります。馬子は、この橋が水際まで三十三尋ひろあること、水の深さもまた三十三尋あること、橋の長さは十七間あることなどを、どの客人にも説いて聞かせるように、お松にも説いて聞かせました。

山谷さんやの立場たてばで休んで犬目いぬめへ向けて歩ませた時分に、傍道わきみちから不意に姿を現わした旅人がありました。お松は早くもその旅人がが、んり、きの百蔵であることに気がついて、ヒヤリとしました。

百蔵もまたズカズカと馬の傍へ寄つて、お松に向つて馴々なれなれしく口を利きき出そうとした時に、前に手綱たづなを曳ひいていた馬子うまこが、不意に後ろを向きました。近寄つて来たが、んり、きがハタと面かおを見合せたところ、おかしいことに、が、んり、きが甚しだしく狼狽ろうばいしました。ともかく相当の悪党を以て自任しているらしいが、んり、きが、この馬子の面を見ての狼狽あわて方は尋常とは見えません。

それがために、せつかくお松に寄ろうとして来たが、いしまんりき、一言も物を言う違いがなく、タジタジときがつて苦にがい面をしたが、そのまま前へ突き抜けて、トットと早足に行つてしまふ有様は、逃げて行くもののようであります。が、いんりき、が、しかく狼狽するにかかわらず、馬子は、

「あははは、足の早い野郎だ」と笑つていました。

なるほど、足の早い野郎で、たちま忽ちに後ろ影さえ見えなくなつてしまいました。

「お武家様、お前様は、あの男に見込まれましたね、お気をつけなさらずにちやあいけませんぜ、あいつは執拗しつこい奴でございますからなあ」

「馬子どの、お前は、あの人を知つておいでなのか」

「知っておりますよ、いやに悪党がつて喜んでゐる、たあいもない奴でございます」

「実は、あの者に取りつかれて困つてゐます、なんとか遠ざける工夫はなからうか」

お松は、ついこのことを馬子に向つて口走りました。

「左様でございますねえ、こんど出て来たら取捉まえて、なんとかしてみましよう」

と馬子は言いました。なんとかしてみろというのは、どうしてみるつもりなのだろう。けれどもこの馬子がかんりき、を怖れなと反対に、かんりきがこの馬子を怖れて逃げたことは今の挙動でわかるのですから、お松はなんとなくこの馬子を心強いものに思ひます。

この馬に乗つたお松は、犬目新田も過ぎ、矢壺やつばの座頭ざとうころが

しの險も無事に通つて、例の鶴川の渡し場まで来ました。

ここは、その前の時分に宇治山田の米友が坊主にされたところであります。ここまで来る間に、どうしたのかが、んりきの百蔵はまるきり音沙汰がありません。

前の時には、大勢の川越し人足がいたけれども、今は水の出も少ないし、人足でなしに、橋を架^かけて橋銭を取つて渡していました。定めの橋銭を払つて、この橋を渡りきると、以前、川越し人足が詰めていた小屋があります。その小屋の中に休んでいたのは例の八州の役人と手先とでありました。

「これ待て」

お松を乗せた馬がこの前を通つた時に呼びかけました。南条に似た馬子は、その声を聞いて聞かないようなふりして行こうとするのを、

「その馬待て」

二度呼び留めましたけれども、馬子はやはり聞かないふりをして行つてしまいます。役人はあとを追っかけて来るかと思うと、それつきりなんの音沙汰ありませんでした。だからお松の乗った馬は、無事に渡し場を越えて上野原の宿へ入りました。

ここで若松屋という宿屋へ、この馬子によつて案内されました。これから江戸へ行くまで、放したくない馬子だと思いました。けれども、そういうわけにはゆかないから、お松はこの馬子に定めの賃銀と若干の酒料さかてとを与えて、自分は、また一人で心細い宿屋の一室へ隠れるようにしています。

さてこうしてみると、が、ん、り、き、のことが思い出されます。あの馬子の面かおを見て逃げた狼狽さもおかしいけれど、それつきりで出て来ないという男ではありません。馬子を帰して

しまつてこれからの道も心細いが、またあの男に出て来られることも気味が悪い。お松がその両方を考えているところへ、

「お客様、まことに恐れ入りまする、八州様の御用が参りました」

「八州様の御用とは？」

「この辺をお見廻りのお手先でございます」

「役人に調べられるような筋はないが」

「さあ、どういうわけでございますか、先刻お馬でお着きになつた若いお武家の方にお目にかかりたいと申して、店へお出向きになりましたでございます」

「はて、先刻馬で着いたといえは、どうやらわし一人のような……」

「左様でござりまする、ほかにお馬でお着きになつたお方もご

ざりますれど、若いお武家様とおつしやられると、あなた様のほかにはござりませぬ」

「わしに何の用向きか知らんが、会いたくないものじゃ」

「それでも、ちゃんと、おあとを見届けておいでになったものでございますから、外様と違ひほかさままして、お断わり申すことはできないので困っております……」

「そんならぜひもない、会いましょう、これへお通し下されたい」

とお松は言つて番頭を帰しました。

けれどもこれは安からぬ思いであります。この際に役人から取調べを受けるということは一大事であります。しかしこうなつてみては逃れることができません。断わることもできません。断われれば職権を以て踏み込むに相違ない、逃るれば手分けをし

て引捕えるに相違ない、会つてみるよりほかはどうにも仕方がないのであります。このくらいなら、いつそ、がんりきと連れなつていた方が、まだ知恵もあつたろうにと思われる。そうして胸を痛めているところへ案内につれて、八州の役人と手先がズカズカと入つて来ました。

お松は胸が噪い^{さわ}で、気が嚇^{かつ}と逆上^{のぼせ}るようであります。

「ちと、お尋ね致したいが、其許様はいずれからお越しになりました^{そこもとさま}」

入つて来た八州の役人というのは、わりあい丁寧な物の尋ね様です。

「拙者は甲府より参りました」

お松も一生懸命で、度胸をきめて返事をしはじめました。

「甲府はいずれのお身分」

「勤番支配駒井能登守の家中の者にござりまする」

「駒井能登守殿の御家中とな、失礼ながら御姓名は？」

「和田静馬と申しまする」

「和田静馬殿……」

と言つて役人は小首を傾けましたが、

「して、これよりいずれへお越し」

「主人能登守のあとを慕うて、江戸まで出まする途中」

「ただお一人にて？」

「左様。それには少々事情ありて、主人の一行に後おくれました」

「ともかく、少々御意得ぎよいたきことがござる故、本陣まで御足労

下さるまいか」

「それは迷惑な」

「強たつてとはお願い申さぬ、実は貴殿のお身の上と言ひ、ただ

いま承つたところと申し、ちと不審の儀がござる」

「不審と仰せらるるのは？」

「よろしい、しからは後刻また改めてお伺い致そう、御迷惑ながらそれまでは、このお宿をお立ち出でなさらぬように願いたい」

「心得ました」

「これは御無礼の段、御用捨」

と言つて役人と手先とは、ゾロゾロと歸つてしまいました。

ともかくも歸つてしまったから、お松はホツと息をつきました。ホツと息はついたけれどこれは、いよいよ安心がならないのであります。存外、立入つて調べることはしなかつたけれども、実はここへ検束されてしまったのと同じことであります。後刻というのはいつ頃のことか知らないが、その時に来て委細を調べられてしまえば、何もかも曝露ばくろされてしまうことであり

ます。関所を抜けて来たことも表向きになつてしまわねばならぬ。駒井能登守家中ということや、和田静馬ということの化けの皮もたちどころに剥はがれてしまわねばならず、その上に、あられもない男装して神尾の家を抜け出したことの一部始終は、たあいもなく露見してしまうのであります。お松はようやく、絶体絶命のようなところへ追い詰められる気持に迫られて、いざといえど自害をして果てるばかりと、小刀を膝のところへ取り上げて、その後の成行を怖ろしい思いで待つていました。

けれども、待ち構えている役人も手先も、容易にやつて来る模様は見えませんでした。かなり身体も心も疲れているから、もう寝てしまいたい時刻であつたけれど、いつ役人が押しかけて来るか知れないのだから、寝てしまうわけにもゆきませんでした。

行燈あんどんの影に、ぼんやりと小刀を膝の上へ載せたままで、限りのない心細い思いと、それから危険を前にした一種の張りきつた心とで、お松は事のなりゆきを待っています。

甲府から江戸までは僅かに三十余里の旅、前に長い旅をしていた経験から、それをあまりにたかを括くくつた無謀を、ことごとにお松は覚さとつてくるのでありました。

「もし、役人に引き立てられて、本陣とやらへ行かねばならぬ場合には自害する、いつそ、こうなつては、その前にここで死んでしまった方がよいかも知れぬ」

お松は、調べられて一切が曝露した曉に恥辱を取るよりは、それより前に死んでしまった方がと、さしものに気が張っているお松も、とても逃れぬ運命と死を覚悟してみると、一時に心弱くなつてきて涙を落しました。

その時に、役人の来るべき表口でなく、障子を隔てた廊下の方で人の気配がするようであります。

十二

お松がこうして宿に着いた時よりは少し遅れて、同じような客がこの上野原の本陣へ、同じような方向から来て宿を取りました。それはお松のように忍びやかに来たのではなく、大手を振らないまでも、旅路には心置きのない人のようであります。

その客は、お松と同じような若い侍の姿をしていましたけれど、お松のように単独の旅ではなく、ほかに一挺の駕籠かごと共に、自分もここへ着く時は駕籠へは乗つて来たけれども、寧ろむじろほかの一挺の駕籠を守護して来たものようであります。

本陣へ着いてまもなく、守つて来たほかの一挺の駕籠の人を隠すように別間へ置き、自分はその次の一室を占めました。申すまでもなく、その隠すように守護されて来た人というのはお君で、それに附いて来た人は宇津木兵馬であります。兵馬がその一室に控えている時に、これもお松が受けたと同じように、例の八州の役人の見舞を受けました。

「はて、八州の役人が何用あつて、我々を詮議する^{せんぎ}」

と兵馬は訝^{いぶか}りましたけれど、それに應對する用意は充分であつて、表面上はなんらの咎め立てを蒙^{こうむ}るべき由もないのであるから、お松のような不安な心でなしに、たちどころにその役人を迎えました。

役人は、またお松にしたように、そのいずれより来りいずれへ行くやを尋ねました。また兵馬に向つて身分と姓名とを尋ね

ました。その時、兵馬は答えました。

「甲府勤番支配駒井能登守の家中、和田静馬と申す者」

「ナニ、貴殿が和田静馬殿と申される？」

役人は眼を丸くしました。その上に念を押して、

「お間違ひではござるまいな、しかと貴殿が和田静馬殿か」

「御念には及び申さぬ、元、駒井能登守の家中にて和田静馬と申すは、拙者のほかにはござらぬ」

「ところが、その和田静馬殿が二人ござるから、物の不思議でござる」

「なんと言われる」

「しかも、同じくこの上野原の宿屋へ今日泊り合せた客人に、同じく駒井能登守殿の家中にて、和田静馬と名乗る御仁ごじんがござる」
「これは不思議千万、その者はいずれの宿にいて、何を苦しん

で拙者の名を騙かたるのか」

「それはただいま、我々が確かに会うてその名乗りを承つて参つた、当所の若松屋というのに、今も尋常に控えておらるる」

「はて怪しい、してその者の年頃は」

「貴殿よりは一つ二つお若うござるかな」

「それほど年にしては大胆な。ともかく、それは心あつてすることか、或いはまた旅路のいたずら心から、わざと拙者の名を用いるものか、これへ同道して突き合わせて御覧あればすぐにわかること」

「いかにも、貴殿がまことの和田静馬殿であることは、恵林寺さきざふれの先触もちふれでも毛頭もうとう疑いのないところ、若松屋の若者こそ、甚だ怪しい、篤とくと吟味を致さねばならぬ」

「引捕えてこれへおつれあらば、拙者から懲こらして済むものな

らば懲らしめ、意見して追い放すべき者ならば、意見を加えてみるも苦しうござらぬ」

「しからばその者を引捕えて、これへ連れて参ろう」

役人や手先が立ち上った時に、兵馬はふと、何事か胸に浮んだらしく、

「お待ち下さい、なんにせよ、承れば年若の者、無下に恥辱を与えるも不憫ふびんゆえ、拙者これより同道致し、穏かにその者に会うてみたい」

「それは御随意」

兵馬は身仕度をして、わが変名の変名を名乗る若者の、何者であるかを見定めようと思いました。

若松屋の一室に和田静馬と名乗ったお松は、非常の覚悟をしています。

和田静馬の名は、或る時において兵馬が仮りに名乗る名前でありました。お松はその名をこの場合に利用したことが、こんな風に喰い違つたことを知ろうはずがありません。

再び役人の来るべき時を予想して待つていると役人は来ないで、障子の外に人の気配がしたかと思うと、密そつとそこを開いて、「御免なさいまし」

小さい声で言いながら面かおを出したのは、思いきや、が、ん、り、きの百でありました。

「……………」

お松は呆氣あつけに取られていると、

「また参りました」

来なくてもよい男であります。お松は苦にがりきつていました。

「また参りましたのは、大變が出来たからなんでございます。大

変というのは、わたしどもの方の大変ではございません、あなた様の方の大変なのでございます、そのあなた様がこうして落着いておいでになる気が知れません、一刻も早くこの場をお逃げ出しになりませんと、命までが危のうございますよ。それで、わたしどもがまた迎えに上ったんでございます。早くお逃げなさいまし、わたしと一緒にこの宿屋をお逃げなさいまし、取る物も取り敢えずお逃げなさらなくてははいけません。第一お関所破りだけで、命と釣替つりかえがものはあるんでございますから、是が非でも逃げなくてはなりません、さあ、お逃げなさいまし」

がんりきは執念深くお松を連れ出しに来たものとも思えるし、また一種の親切で逃がしに来たものとも思われるのであります。けれどもお松は、さすがにこの男の言いなりにそれではと言つて、逃げ出す気にはなれないでいると、

「何を考えておいでなさるんです。実はこういうわけなんでございます、あなた様が、この宿屋へ駒井能登守様の御家来だといってお泊りなさっていると、丁度本陣の方へ、その本物の能登守様の御家来が、ちやあんと着いておいでなさるんだ、役人から、あなた様のお話を聞いて、能登守の家中に左様な者があるとは訝おかしいとあつて、今こちらへ調べにおいでなさるところなんでございます、それにつかまつて御覧ごろうじろ、退引のつびきがなりません、それを聞き込んだから、わたしはこうして抜けかけをして御注進に上ったわけなんでございます、悪いことは申し上げません、ともかくもこの場だけは外さなければ、あなた様の動きが取れません、決して悪いことを申し上げるんではございません」

が、い、きにこう言われてせき立てられてみると、お松の心が

動かないわけにはゆきません。どのみち危ない道を踏んだ以上は、手を束ねて捕われの身になることもいやです。所詮、死を決したからには、逃げられるだけは逃げた方が伶俐ではないかとさえ思われるのであります。しかし、人もあろうに、この男の手引で夜分逃げ出すということは、いくらなんでも、まだその気にはなれないでいるところへ、表の戸をドンドンと叩いて、

「先刻、お尋ねした和田静馬殿にお目にかかりたい」

それは紛れもなき役人たちの声であります。お松はこの声を聞くと、さすがに狼狽えて立ちかけたところを、が、ん、り、き、は、その左の手でお松の手首をとって、

「逃げなくちやいけません、お逃げにならなくちや損でござい
ます、馬鹿正直も時によりけりでございます」

早や表の方では、役人たちが案内されてこつちへ来る足音が

聞えます。お松は我を忘れて大小を抱えると、が、ん、り、き、は早くもお松の荷物を取って肩にかけていて、再びその手を取って、引きずるように廊下へ飛び出しました。

事の急なるがためにお松は、心ならずも、が、ん、り、き、に引摺られるようにして、この家を外に飛び出しました。

外に出て見ると外は真暗です。その真暗な中を、が、ん、り、き、は案内を知っていると見えて、お松の手を引きながらズンズンと進んで行ったが、

「誰だッ」

途中で不意に異様な声を立てて、お松の手を放してしまいました。

「ア痛ッ」

最初、誰だッと言った時に、が、ん、り、き、は何者にか一撃を加え

られたようでありましたが、二度目にア痛ツと言つた時には、たしかに大地へ打ち倒されていたものであります。

「うーん」

と言つて、が、ん、り、き、が地上で唸っているのを聞けば、打ち倒された上に、手強く締めつけられているもののようにありました。さては役人の手が、もうここまで廻つていたかとお松は驚いて、木蔭に身を忍ばせました。それにしても不思議なのは、もし役人であるならば、御用だとか、神妙にとか言葉をかけて打つてかかるべきはずであり、なにも、が、ん、り、き、一人だけを狙^{ねら}わないで、当の自分にも、言葉がかかりそうなものです。それを不意に闇の中から出て、が、ん、り、き、一人だけを打ち倒したのはどういうつもりであるか、さっぱりわかりません。

「覚えてやがれ」

ややあつて、こう言つたそれは、が、ん、り、き、の声でありました。それは少しばかり遠いところへ離れて聞えました。大地へ打ち倒されたのがどうかして起き上つて、命からがら逃げ出した捨台詞すてげりふのように聞えて、それから後は静かになりました。お松は身体を固くして木蔭に隠れていると、

「もしもし、若いお武家」

それは聞いたような声であります。聞いたような声で、たしかに自分を呼ぶのだとは思いましたけれども、お松はこの場合に咄嗟とつさに返事をする事ができませんでした。それ故になおも身を固くして木蔭にひそんでいると、どうやらその者が自分に近く探り寄つて来るらしくあります。

お松はそれで身構えをしました。が、ん、り、き、をさえ取つて押えるくらいの者に、自分が身構えをしたところで甲斐のないこと

とは思つたけれど、それでも身構えをしていると、その者はすぐに近寄つては来ないで、そこへ蹲うずくまつて、カチカチと燧ひを切りはじめました。そしてその火を小田原提灯にうつしていることがよくわかるのであります。

提灯をつけられてはたまらない、もう絶体絶命と思つて、お松はその提灯の光を慄ふるえながら見ていると、意外にもその提灯の光にうつる人の面かおは見たようなと思うも道理、それは今日、猿橋の宿から、この上野原まで自分をのせて来た馬子でありました。この馬子を見た最初にが、ん、り、き、は逃げ出してしまいました。この次に逢つた時は取つて押えてやると言つていました。昨夕ゆうべあの宿へ自分を送りつけた後は、鳥沢とやらへ歸つてしまったものと思つていたら、まだあの宿に泊つていたものらしい。「どうなさいました、怖い者ではござらぬよ」

馬子は提灯をさしつけて、お松の隠れている木下闇このしたやみを照しました。お松の足は、ひとりでにその木下闇から離れて、馬子の提灯の方に引き寄せられました。

この時に、が、ん、り、き、はどこへ行つてしまつたか、姿も形も見えません。

「これから私が案内をして上げます、御安心なさいまし」

馬子はお松の先に立つて、崖道がけみちを桂川の岸へと下りて行きま
す。

しばらくしてこの馬子は、桂川の岸にある船小屋のところまで来ました。そこで振返つてお松の面を見て莞爾にっこりと笑いました。お松は提灯の光でその面を見たけれども、その意味を解すことができませんでした。

小屋の中には誰も住んではいません。炉の中には火もなければ

ば、燃えさしありません。

馬子は提灯を羽目はめの一端にかけて置いて、床板を上げるその中から、空俵を程よくからげたのを一つ取り出しました。それを手早く解ほぐして開くと、その中にいつ用意してあつたのか、一組の衣類と、見苦しからぬ拵こしらえの大小一腰が現われました。

馬子は自分の衣裳を脱ぎ捨てて、空俵に包んであつた衣類を着替えてしまいました。それもまた見苦しからぬ武士の着る衣裳であります。衣裳を着替えて、帯を締めて、それから足をこしらえにかかる手順が慣れたものであります。

身仕度をしてしまつてから、腰をかけて草鞋わらじを二足取つて、その一足をお松の前に投げ出し、

「これをお穿はきなさい」

お松にあてがつて、自分もまたその一足を穿く。

お松はただこの奇異なる人の為すところを夢見るような心持で見て、その為せというままに従うよりほかはありませんでした。

「これから御身と共に、拙者も江戸立ちじゃ」

と言つて、サツサと先に立つて、例の提灯を持つてこの舟小屋を立ち出でました。お松も無論そのあとに従いました。小屋を出て河原の町の方を見上げると、提灯の影がいくつも飛んで、人の罵る声^{ののし}などもします。

それを見ていた奇異なる武士は、なんと思つてか自分の小田原提灯をフツと吹き消しました。四辺^{あたり}はやはり真暗で、桂川の川波のみが音を立てて噪い^{さわ}でいます。その暗い中で、奇異なる武士は無言にお松の手を取つて引き立てました。しかしその疲れきつているのを認めて、

「拙者の背中をお貸し申そう、遠慮なさるには及ばぬ、それがたがいに楽でよろしい」

奇異なる武士はお松を背負うて、桂川の岸の大石小石の歩きづらい中を飛び越えて、流れと共に下って行くのであります。

後註

- 一 「お前さん」は底本では「前さん」

底本：「大菩薩峠 4」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成 8）年 1 月 24 日第 1 刷発行

「大菩薩峠 5」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成 8）年 2 月 22 日第 1 刷発行

底本の親本：「大菩薩峠 三」筑摩書房

1976（昭和 51）年 6 月 20 日初版発行

※「甲武信《こぶし》ヶ岳《たけ》」「よしヶ久保」の「ヶ」を小書きしない扱いは、底本通りにしました。

入力：tatsuki（一～七）、(株) モモ（八～十二）

校正：原田頌子

2002 年 9 月 21 日作成

2003 年 6 月 1 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。